

自死遺族である ということ



烏兎の庭より

碧岡烏兎

敦子さんへ

はしがき

この本は、二〇〇二年から二〇二三年にかけて、『烏兔の庭』と題したウェブサイトで私が書いてきた文章のなかから、自死と自死遺族、そして死別体験から生じる悲嘆 (grief) について書いた文章を私家集 (アンソロジー) として選んで作った。

『烏兔の庭』では、本の感想だけでなく、音楽や展覧会の感想、それから取るに足らない日記も書いている。

本書は私が上梓する初めての本。今回は一冊の本にまとめるためにテーマを絞った。なぜ、自死と悲嘆なのか。それは本文を読めばわかるように、私が思春期に姉を亡くした自死遺族だからであり、私自身がうつ病から一時期、希死念慮で苦しんだからでもある。言葉を換えれば、自死と悲嘆は私という人間の大きな部分を占めている。

ウェブサイトでは横書きで書いている。本書では縦書きにした上で加筆・割愛・推敲・校正を施した。

『烏兔の庭』 (<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~utouto/index.html>) について少し書いておく。

二〇〇一年、それまで働いていた米系ハイテク・メーカーから同じく米系でもスタートアップと呼ばれる中小企業の日本支社に転職した。それをきっかけに数十年ぶりに日記をノートに書きはじめた。これが冒頭の「烏兔以前」の部分。

ウェブ上で最初に文章を書いたのは「日記鱈」というブログ・サービスだった。二〇〇二年の六月ごろのこと。初めは図書館で借りた本を記録する備忘録だった。それから少しずつ、読んだ感想も書くようになり、やがて、本の感想以外のことについても書くようになった。書いたものがたまりはじめて「日記鱈」では不便になってきたので、HTMLを独学してウェブサイトを作ってみた。それが二〇〇二年の秋。『烏兔の庭』はこうして始まった。

それから二十年、途中で何度か中断しながらも書き続けてきた。中断したときに副題を変えて新しい部立てにした。これまでに第七部まで書いている。

- 第一部 烏兎の庭 二〇〇二年六月から二〇〇四年六月まで
- 第二部 草の上に腰を下ろして 二〇〇四年九月から二〇〇六年五月まで
- 第三部 土を掘る 二〇〇六年九月から二〇一〇年二月まで 第四部 硝子の林檎の木の下で 二〇一〇年六月から二〇一四年十二月まで
- 第五部 最後の手紙 二〇一五年一月から二〇一七年十二月まで
- 第六部 終わりの始まり 二〇一八年一月から二〇二一年十二月まで
- 第七部 梅の残り香 二〇二二年一月から現在まで

部立ての区切りは、気持ちの区切りでもある。心境が大きく変化したとき、あるいは疲労困憊したとき、文章を書くことをしばらく休む。しばらく休むとまた書きたくなる。それを繰り返してきた。

興味を持った方は、無料で公開しているのでウェブサイトを訪問して、ほかの文章も読んでいただきたい。

著者プロフィールの代わりとして、『庭』の裏木戸 (<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~utouto/kido.html>) に書いた文章を掲載しておく。これまで分散していた文章を一編の著作にしなかった理由、そして、今回、まとめようと思いついた意図はこの文章が代弁してくれるだろう。

二〇二三年四月十六日

碧岡烏兎

裏庭へつづく木戸をあけて——ある自死遺族のつづき

11/28/2009

私は、自死遺族の一人です。一九八一年二月六日、七つ離れた姉を失くしました。私は当時小学六年生、姉は十九歳の誕生日まで三週間という若さでした。

その事実は、本編では明示していません。自死遺族であることさえ、遠まわしにしか書いていません。

ウェブサイトにはある主題に焦点を当てたものが多くあります。音楽や映画や本についての感想や、病気の体験記、自死遺族の手記もあります。でも、拙サイト、『烏兎の庭』が目指しているのは、そのような、ある主題に特化したサイトではありません。

言葉を換えれば、「自死遺族」という属性を前面に出して文章を書くことを私は望んでいません。「自死遺族」であることは、私にとって重要なことですが、私のすべてではありません。私には一人の人間としてさまざまな面があります。

男性であり、日本国民であり賃金労働者、すなわちサラリーマンであり、夫でもあり、親でもあります。酒好きであり、音楽好きでもあり、ある程度の読書家でもあります。

自死遺族であることは、そうした私がつ多くの面のうちの一つに過ぎません。自死遺族としてのみ見られることを私は望んでいません。

その一方で、私は、多くの「自死遺族」という主題に特化したサイトを閲覧しています。そのなかには、自死遺族の体験記や、自死遺族が集う掲示板もあります。

そうしたサイトを見ながら、同じ体験をした人たちに私の文章を読んでもらいたいと思うこともあります。このページを書き出した理由はそこにあります。

自死遺族とは、何か。それは、隠れて生きる人々です。それはまた、秘密を抱えながら生きる人々です。

自死遺族であることは少なくとも現代の日本社会では差別の理由には必ずしもなりません。しかし自死遺族であることを明らかにすれば、

他人から興味本位で奇異な視線を浴びることになります。それは、その属性だけで他人に見られることです。

だから、自死遺族は自らが自死遺族であることを明らかにしません、秘密にしておきます。しかし、そのことが、自死遺族のなかに矛盾と苦悩を生みます。なぜなら自死遺族であることは、その人がその人である最も重要な一面だからです。少なくとも私にとってはそうです。

碧岡烏兔

目次

第一部 烏兔の庭

烏兔以前

書く、ウエブに書く

太陽を盗んだ男（一九七九）、長谷川和彦監督、沢田研二主演、キティ・フィルム、東映、二〇〇二

エッセイとは何か（L'Essai, Pierre Glaudes et Jean-François Louette, 1999）、下澤和義訳、法政大学出版、二〇〇三 9

神戸市街地 定点撮影 1995-2001 復活への軌跡、関美比古、高橋勝視写真、加戸玲子、中井久夫、森反章夫、毎日新聞、二〇〇二
13

浮彫としての文章——「烏兔の庭」開園一年を迎えて

谷間の女たち、森山啓、新潮社、一九八九

森山啓 石川近代文学全集9、森英一評伝、解説、石川近代文学館、一九八五 19

ふるさと石川の文学、金沢学院大学文学部日本文学研究室編、北國新聞社、二〇〇三 19

少年時代の画集、森忠明文、藤川秀之挿絵、講談社、一九八五 25

「生き残った傲慢さに耐えかねる苛立ち」

おとなになれなかった弟たちに……、米倉斉加年文・絵、偕成社、一九八三 28

第二部 草の上に腰を下ろして

裏庭（一九九六）、梨木香歩、河合隼雄（解説）、新潮文庫、二〇〇一 31

鉢かつぎ、あまんきみこ文、狩野富貴子絵、西本鶏介監修、ポプラ社、二〇〇四 36

Goodnight, My Angel: A LULLABY, lyrics by Billy Joel, illustrated by Yvonne Gilbert, Scholastic Press, 2004 38

The Saddest Time, written by Norma Simon, photographs by Jacqueline Rogers, Albert Whitman & Company, 1986
38

岸辺のふたり（Father and Daughter, 2003）Michael Dudok de Wit のちだやや訳 くもろ社版、二〇〇四 40

悲しい本 (Michael Rosen's SAD BOOK) 、 Michael Rosen文、 Quentin Blake絵、谷川俊太郎訳、あかね書房、二〇〇四	40
『岸辺のふたり』と『悲しい本』について	43
ジェニー・エンジェル (Jenny Angel) 、 Margaret Wild文、 Anne Spudvilas絵、もりこちすみ訳、岩崎書店、二〇〇一	44
吉田満著作集 (上下)、文芸春秋、一九八六	45
「戦後」が失ったもの、戦争とは何だろうか 鶴見俊輔座談、晶文社、一九九六	45
雨ふり花さいた、末吉暁子文、こみねゆら絵、偕成社、一九九八	51
吊いの哲学シリーズ 道徳の系譜、小泉義之、河出書房新社、一九九七	51
土佐日記 (九三五頃)、紀貫之、鈴木知太郎校中、岩波文庫、一九七九	54
田村隆一エッセンス、青木健編、河出書房新社、一九九九	58
星に帰った少女 (一九七七)、末吉暁子、こみねゆら絵、偕成社、二〇〇三	60
レヴィナス 何のために生きるのか、小泉義之、日本放送出版協会、二〇〇三	60
未完の菜園 フランスにおける人間主義の思想 (Le jardin imparfait: la pensée humaniste en France, 1998) 、 Tzvetan Todorov、内藤雅文訳、法政大学出版社、二〇〇一	60
If Nathan Were Here, written by Mary Bahr, illustrated by Karen A. Jerome, Erdmans, 2000	66
夕凧の街桜の国、こうの史代、双葉社、二〇〇四	67
死者と生者のラスト・サパー、山形孝夫、朝日新聞社、二〇〇〇	71
藤村随筆集、十川信介編、岩波文庫、一九八九	77
第三部 土を掘る	79
徴候・記憶・外傷 (sign, memory, trauma)、中井久夫、みすず書房、二〇〇四	80
石原吉郎詩文集、佐々木幹郎解説、講談社文芸文庫、二〇〇五	90

西田幾多郎の世界、石川県西田幾多郎記念哲学館、二〇〇四	93
西田幾多郎の憂鬱、小林敏明、岩波書店、二〇〇三	93
西田幾多郎の思想、小坂国継、講談社学術文庫、二〇〇二	93
記念日反応	99
生きるかなしみ、山田太一編、ちくま文庫、一九九五	100
二月最初の金曜日	101
奇妙な風景	105
第四部 硝子の林檎の木の下で	106
ある土曜日のこと	107
日本人の死生観を読む——明治武士道から「おくりびと」へ、島蘭進、朝日新聞出版、二〇一一	108
働きすぎに斃れて——過労死・過労自殺の語る労働史、熊沢誠、岩波書店、二〇一〇	110
「もう、うんざりだー」自暴自棄の精神病理、春日武彦、角川SSC新書、二〇一一	114
癒しとしての痛み—愛着、喪失、悲嘆の作業 (Healing pain: attachment, loss, and grief therapy, 1991) / Nini Leick, Marianne Davidsen-Nielsen / 平山正実監訳、長田光展訳、岩崎学術出版社、一九九八	116
自死遺族を支える、平山正実、エム・シー・ミュージズ、二〇〇九	122
さよならも言わずに逝ったあなたへ—自殺が遺族に残すもの (No Time to Say Goodbye: Surviving the Suicide of a Loved One, 1999) / Carla Fine / 飛田野裕子、扶桑社、二〇〇〇	122
家族・支援者のためのうつ・自殺予防マニュアル、下園壮太、河出書房新社、二〇〇六	124
秘密の観点 (一九七三)、土居健郎選集 8、土居健郎、岩波書店、二〇〇〇	125
二月第一金曜日	127
喪の悲しみ (Le deuil, Marie-Frederique Bacqué et Michel Hanus, 2010) / 西尾彰泰訳、白水社、二〇一一	129

- 悲しみを抱きしめてグリーフケアおこつわり、吉田利康、日本評論社、二〇一三 130
 死別を体験した子どもによりそう―沈黙と「あのね」の間で、西田正弘・高橋聡美、梨の木舎、二〇一三 130
 悲しみを求める心（一九一六）、尾崎翠、定本尾崎翠全集（下）、稻垣真美編、筑摩書房、一九九八 132
 餃子をつくる 135
 Saving 10,000 Winning a War on Suicide in Japan（自殺者一万人を救った戦い）／directed by Rene Duignan 2013
 136
 心に傷をうけた人の心のケア―PTSDを起こさないために（Understanding your Reaction to Trauma, Claudia Herbert, 1996）、勝田吉彰訳、保健同人社、一九九九 137
 時間薬なんてない 138
 第五部 最後の手紙 139
 悲しみよ こんにちは（Bonjour Tristesse, 1954）、Françoise Sagan、河野万里子訳、新潮文庫、2009 140
 グリーフケア入門：悲嘆のさなかにある人を支える、高木慶子・上智大学グリーフケア研究所編著、勁草書房、二〇一三 142
 悲嘆の中にある人に心を寄せて―人は悲しみとどう向かい合っていくのか、高木慶子・山本佳世子、ぎょうせい、二〇一四
 142
 「最後の手紙」について 146
 寒梅忌 149
 一人で、それから三人で 150
 回復するちから 震災という逆境からのレジリエンス、熊谷一朗、星和書店、二〇一六 151
 寒梅忌 153
 公認されない死 154
 自死は、向き合える―遺族を支える、社会で防ぐ、杉山春、岩波ブックレット、二〇一七 155

- 自死遺族の癒しとナラティブ・アプローチ―再会までの対話努力の記録、吉野淳一、共同文化社、二〇一四、160
- 自死と遺族とキリスト教・「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ、土井健司編、新教出版社、二〇一五、164
- 自殺で遺された人たちのサポートガイド―苦しみを分かち合う癒やしの方法― (Healing After the Suicide of a Loved One, Ann Smolin, John Guinan, 1993)、柳沢圭子訳、高橋祥友監修、明石書房、二〇〇〇、170
- 敦香祭 173
- 自死について 174
- フィルムコンサートの思い出 175
- 美しい自死なんてない 177
- 敦香祭 178
- ともに悲嘆を生きるグリーフケアの歴史と文化、島蘭進、朝日選書、二〇一九、180
- 悲嘆学入門 死別の悲しみを学ぶ、坂口幸弘、昭和堂、二〇一一、183
- 希死念慮について 186
- グリーフケアの絵本 187
- 好きだった人 189
- もう一つのAで始まる日記 191
- カミングアウトについて 192
- 親と死別した子どもたちへ―ネバー・ザ・セイム 悲嘆と向き合い新しい自分になる― (Never the Same: Coming to Terms with the Death of a Parent, Donna Schuurman, 2003)、松下弓月監訳、西尾温文ほか訳、島蘭進監修、佼成出版社、二〇一一、193
- 悲しみの乗り越え方、高木慶子、角川oneテーマ21新書、二〇一一、195

寒梅忌

196

親と死別した子どもたちへーネバー・ザ・セイム 悲嘆と向き合い新しい自分になるー (Never the Same: Coming to Terms with the Death of a Parent, Donna Schuurman, 2003) 松下弓月監訳、西尾温文ほか訳、島蘭進監修、佼成出版社、二〇一〇

197

○ 自助グループについて

203

敦香祭

204

君の臍臓をたべたい、住井よる原作、吉田智子脚本、月川翔監督、浜辺美波、北村匠海主演、東宝、二〇一七 205
『君の臍臓をたべたい』に学ぶグリーフワーク 209

自死で大切な人を失ったあなたへのナラティブ・ワークブック、川島大輔、新曜社、二〇一四 210

自殺者の遺族として生きるーキリスト教的視点 (Fierce Goodbye: Living in the Shadow of Suicide, G. Lloyd Carr, Gwendolyn C. Carr, 2004) 川越敏司、新教出版社、二〇一〇 212

カウンセラー探し

213

自死遺族として生きる 悲しみの日々 証言、若林一美、青弓社、二〇一一 214

カウンセリング、初回

216

カウンセリング、二回目

218

餃子の思い出

222

君は月夜に光り輝く、佐野徹夜原作、月川翔脚本・監督、北村匠海、永野芽郁主演、東宝、二〇一九 223

第七部 梅の残り香

227

寒梅忌

228

敦香祭

229

凍りついた香り (一九九八)、小川洋子、幻冬舎文庫、二〇〇一

230

自死遺族の文学について	232
「自殺」か「自死」か	233
公認されない死	234
語り継ぐということ	235
死者を巡る「想い」の歴史、山本幸司、岩波書店、二〇二二	236
寒梅忌	237
自殺の思想史——抗って生きるために (Stay: A History of Suicide and the Philosophies Against It, Jennifer Michael Hecht, 2013)、沢李歌子訳、みすゞ書房、二〇二二	238
敦香祭	241
あとがき	242

別れにし程を果てとも思ほえず恋しきことの限なければ

平時望の妻（後撰和歌集）（『死者を巡る「想い」の歴史』、山本幸司、岩波書店、二〇二二）

第一部 烏兔の庭

一切の知、喜びから遠ざかるわびしい思考の反芻。

登るよりは下る方が楽であるとしても、思考とはまさに、斜面に逆らって思考することはなかったか。

——国家に抗する社会 (La société contre l'Etat, 1974) / Pierre Clastres、渡辺公三訳、書肆風の薔薇、一九八八

烏兔以前

1/7/2002

ロサンゼルス空港、トム・ブラッドレー・ターミナルにて。

今年は何年ぶりかでこうしてノートに思いつくことを書いていこうと思う。

大学でもレポート以外ほとんど文章は書かなかつたから、こうして、ましてキーボードでなくペンで書くのはずいぶん久しぶりのことだ。文章を書こうと思いついた理由はいくつかある。

― 今年は人生の大きな転機になるかもしれない。その過程を、その場面を、書いておきたい。

― 去年の転職で大きな転機は一部すでに始まっている。そのことも書きのこしておく必要がある。

― 大学卒業後、自分の内面だけではなく、世の中のできごとについて、いろいろ考えてきたが、心のなかで言葉にすることはあつても文章にすることはなかった。そろそろいろいろな思いや考えを形にしてもいいし、できるだろう。

文章の目的は原則として内面の吐露ではない。日常生活や社会事象の観察や分析を自分の言葉で表現していきたい。

最近読んでいる日経新聞夕刊一面のコラム、とくに鷲田清一や宿澤広朗のような文章を書いてみたい。

二〇〇一年七月の転職で生活は大きく変わった。まず生活面でかわったことをあげておこう。

― 車で通勤するようになった。

― 図書館に定期的に行くようになった。

車通勤の意味は大きい。車の中は安心する。自分だけの空間だから。仕事が終わりに乗った途端、半分家に帰った気がする。思い返してみると、前は日常のストレスの半分くらいが電車通勤に起因していたのではないか。

スシ詰め、混雑、他人の視線、体臭、人の波、パソコンを抱えての階段の上り下り。今のところ仕事が辛くもなく忙しくないせいもあるが、日曜の晩に「明日も出かけるのか」とため息することがなくなった。「行かなくちゃ」と思う必要がない。乗ればいいのだ。

6/3/2002

ホームページを開こうか？ 何を書く？ 日記、小説、読書記録、エッセイ、コラム？

今の自分には書きたいことはあまりない気がする。いや、それは間違いだ。書きたいことはあるのだが、書けることではないのだ。自分の身を削るように心情を書くのは好まない。そうかといって、身を削らない程度のことを書いて楽しめるほどの余裕もない。

11/28/2002

大阪泊。

十一月二十八日になった。ブロードバンドで夏川りみのライブを聴きながら、ウェブサイト「烏兎の庭」を正式に開く。

開園日はこの日にしたかった。

夏川りみの紅白歌合戦出場が決まった。大晦日に「涙そうそう」が聴ける。

書く、ウェブに書く

12/1/2002

インターネット上に文章を書くようになり数ヶ月が経つ。書きながら、これまでとは文章を書く気持ちが変わっていることに気づいた。その違いを一言で言えば、文章が手元からいつまでも離れていかない。

文章は書かれた途端にテキストとして自立し、書き手から離れていくということはどこかで聞いたことがある。出版される本の場合を考えれば、よくわかる。一度書かれた文章が本として出版されれば、改訂版が出されるまでは、内容を訂正することはできないし、何らかの理由で流通を停止させたり、出回った本を回収したりすることは可能としても、それで世界から抹消できるわけではない。本を出した事実はなかなか消すことができない。

これに対しウェブ上の文章は、いつでも修正することができる。気に入らないものは削除することもできる。もちろん閲覧されたコンピュータに保存されていることもあるけれど、本の回収や出版停止と比較すると削除の完全度が高い。買っておいた本をあとで開いたら、一つの章だけ消えているようなことが、ネット上では起こりうる。複写や保存をしていれば別だが、そうでなければ、あるいは削除された後にはじめて見る人にとつては、初めからないも同然。

閲覧者から見るとウェブサイトは常に完成されたものとして見える。作者にとつても、サイトにアップロードしたわけだから完成したものであるけれども、すぐ次の瞬間に書き換えることもできる未完成なものでもある。完成と未完成が同時に存在する。これは従来の本を最終地点とした文章表現にはなかった特質と言っているのではないだろうか。

画家のなかには、一度売り渡した作品さえ、手直しをする人もいる。音楽でも演奏するたびに少しずつ変化することがある。文章の場合、印刷という技術のために、やや硬直していたかもしれない。いずれにしても、ネット上の文章表現は「未完の旅路」を実践可能にする。

「文章は書かれたときに作者を離れる」という考え方からすれば、文章による作品は「書かれたもの」。これに対してウェブ上の文章は、「書かれ続けるもの」ということができる。著者が生きていて、更新する意欲がある限り、作品は著者から離れていかない。

著者の考えが変わってその気になれば、内容を完全に書き換えることもできる。この意味では、原理的には、つねに著者が現在もっている思考と一致させることが、ウェブ上では可能になる。

角度をかえてみると、インターネットには時間がない。歴史がないと言ってもいい。つねに現在しかない。更新履歴をほとんどのサイトが記録しているのは、それがなければ、いつどこが変更されたのか、作成する側もわからなくなってしまうから。日記のように時系列的に文章を書いている人が多いのも、ウェブの非歴史的な側面に無意識のうちに抵抗しているのかもしれない。

ウェブの非歴史性は、欠点でもなければ長所でもない。コンピューターとネットワークの技術革新によってもたらされたインターネットがもつ特徴の一つにすぎない。他のメディアにないせつかくの特徴だから、ウェブ上で書くときには活用しない手はない。気に入らないところはどんどん修正して、思いついたことをどんどん書き足していけば、「いま」の私が考えていること、知的関心の世界をそのままネット上に再現することさえできるかもしれない。

もちろん、これは過去を切り捨ててることを必ずしも意味しない。昔のことを懐かしい思い出として、そのままの形で記憶をとどめようとするように、ある文章を初めに書かれたまま残しておきたいと思うこともあるかもしれない。それを選ぶのは、つねに時間の先端にいる現在の自分。その意味でも、ウェブ上の文章はつねに「現在」にある。

独立した世界を文章によって次々と創りあげていく小説のような形式の文章とは異なり、私がつばら書いているエッセイは、同じ主題を何度も考え直し、何度も何度も書くような形式をとる。その点でウェブの現在性は、批評文という形式に適しているといえるかもしれない。

また、おそらく最も重要な点として、一度や二度の推敲では思い通りの文章が書けない文章初級者には、何度も書き直しができる特徴は何といってもありがたい。

太陽を盗んだ男（一九七九）、長谷川和彦監督、沢田研二主演、キティ・フィルム、東映、二〇〇

〇一

12/1/2002

世代論は紋切りすぎと承知のうえで、それでもこの映画からは強烈に七〇年代の臭いがしたと、まず言いたくなる。

ウルトラマンレオ、王貞治、秋葉原ラジオ会館、ボブ・マーレー、カルメン・マキ、マツダ・サバンナRXT、ラジオの深夜放送、メーデー、幻のストーンズ武道館公演、過激派、パニック、公害。

一九七九年に公開されたこの映画からは、「七〇年代」の不安と恐怖、倦怠と退廃とが凝縮されて伝わってくる気がする。そう感じるのはいきつと幼いながらも七〇年代を自分の肌で感じていたから。街の風景や小道具にも、どこかで見たことのあるような懐かしさを感じる、それから、言い知れない嫌悪感も。

あとのバブルに沸いた八〇年代とも、喪失感にあふれた九〇年代ともどこか違う。子どもこのころに見聞きしたもの、味わったもの、かいだ匂いが映画を見ながら、筋書きとは別に心の中に充満してくる。それは筋書きの面白さはもちろんこと、細部へのこだわりのせいだろう。

細部にこだわる場面がある一方、監督やスタッフへのインタビューは筋書き、細部ともにつまみたくめちやくちやになっっている場面を明かしている。これまでに何度も見ているのに不思議と「こんなことない」と疑問に思うことはなかった。この映画はリアルな作品とずっと思っていた。ずっとだまされていた。そして、特典ディスクによって、それに気づかされてしまった。

次回からは見るたびに、「言つてたとおりここは変だな」「あのコメントはこの場面のことだな」など、脚注を思い出しながら見てしまいたい。こうなると特典ディスクも考えもの。確かに、キャストやスタッフについての膨大なデータは、いままで知らなかった日本映画や俳優についていろいろ教えてくれて面白かったけれど。

脚本や撮影に工夫あるように、登場人物の造形に作品の魅力の一端がある。城戸誠は、なぜ、一体何のために原子爆弾を作るのか。肝心な

点が明かされないため、主人公の内面は謎めいたまま。

監督の述懐によれば、企画の段階では主人公を被爆者という設定にして、そこから激しい憎悪や破壊衝動を引き出そうとしたらしい。出来上がった作品では、城戸誠の過去はまったく触れられていない。そのことがかえって、彼の奥底にある深い闇の不気味さを際立たせている。

菅原文太演じる山下警部は、最後に、ほとんど手遅れとなってから、城戸誠の空虚を見抜いた。

お前が一番殺したがっているのは、お前自身だ

城戸誠の空虚は彼に過去がないことに由来する。彼は何者でもない。何者でもないことに耐え切れず、何かを破壊することでしたか、自分を確かめることができない。だから、彼は原爆を作り、政府を脅し、東京を消した。

では、東京を消滅させずに、彼が自分自身だけを消し去っていたら、どうか。問題は片付いた、と言えるだろうか。彼一人がいなくなっただけでも、彼一人がいなくなっただけではすまない。彼が生きて、存在していた一つの世界が終わることに違いはない。

人命は地球より重い。これも「七〇年代」を思い出させる言葉の一つ。彼に、自分の生命の重さに気づかせるには、どうすればよかったのだろうか。彼に自分が目を背けていた過去を直視させればよかったのか。

この映画には、印象に残る台詞が多い。

ローリング・ストーンズなんて来やせんよ

山下警部の台詞は、心地よく酔いはじめたときに出てくる私の物真似の定番。

みんな、プールから出ろっ！

夏の盛り、混んだプールに出かけると、いつもこう叫びたい衝動にかられる。

この映画は七〇年代に暮らしていた実家に帰ったときによく見る。一度、いま住んでいる家で見たことがある。でも、覚めた気持ちにしかならなかった。

七〇年代に住んでいた家で過ごすとき、そこには七〇年代の思い出がたくさんあるはずなのに、最近の記憶もたくさんあるから、あらゆる記憶が入り混じり、言い知れない複雑な気持ちになる。

『太陽を盗んだ男』を見ながらリビングを見渡すと、部屋全体が「あの頃」に戻る。七〇年代の思い出だけが少しずつ膨らむ。けれども、いつも、それが言葉になりそうになる直前に、ジュリー扮する城戸誠のフーセンガムと一緒に弾けてしまう。

私の七〇年代は、そんなふうに、風船が弾けるように、弾頭が爆発するように、一瞬の閃光とともに終わった。

エッセイとは何か (L'Essai, Pierre Glaudes et Jean-François Louette, 1999) / 上澤

和義訳、法政大学出版、二〇〇三

8/1/2003

新聞で鷺田清一による書評を読んだ。「公理的な知と臆見(おっけん)(ドクサ)のすきまで思考する精神」という彼のまとめでも充分にエッセイの真髓を理解した気になったけれど、「クールな分析を貫いているのに、とても熱い本だった」という鷺田の感想に誘われ、原本を図書館で借りてきた。

私がこれまで書いてきた文章は、エッセイとジャンル分けされるものかもしれない。読みながらそう思った。そして、これから書いていく文章をエッセイと分類されるものにしていきたい、読み終えて、そう思った。

グロードとルエット、二人の著者が分析するエッセイの特徴には、私がこれまで書いてきた文章にあてはまるものがいくつもある。身近な出来事が社会や思想の問題につながる、俗な表現の採用、意図的な文法や用語のずれや逸脱、まったく違う話題への跳躍など。

こうしたことは、特別意識したものではなかった。書いているうちにそうした文章になってきた。著者二人はエッセイは文章のジャンルである以上に文章を書く気質である、と結論している。私にも、そうした気質があるのかもしれない。

エッセイは、きわめて逆説的なジャンル。さらにいえば、逆説のうえに逆説を重ねるような文章。まずエッセイはきわめて同時代的。伝統的な修辞や学問的な表現ではなく、口語や俗な表現が好んで用いられ、書き手本人やその周辺を含めて、その時代に現れた人物、事件、流行から話題が広がる。その一方、エッセイは同時代の学説、俗説、ジャーナリズムの主流に逆らう主張をする。その意味ではきわめて反時代的。

同時代的で反時代的ただけではない。エッセイは、自分の趣味や過去の分析、身近な出来事の考察から、できるだけ普遍的なものにたどり着こうとする。その意味では超時代的。その普遍的な何かは、論者によって、真理と言われたり、良識と言われたり、常識、知恵、経験、思想などとされる。

同時代的で、反時代的で、にもかかわらず超時代的。このような逆説のうえに逆説を重ねるエッセイの本質を、図式を反転して、普遍性を基点にして観察すると、エッセイはある種の再現芸術、と思われてくる。

それまでに積み上げられてきた知識に、新たな発見や考察を付け加えることが求められる学術論文とは違い、エッセイは何も新しいことを言わない。エッセイの書き手はよく、自分の書いていることを「あたりまえのこと」「わかりきったこと」という。それは、彼らが自分の表現していることは、真理、良識、常識、言ってみれば普遍的な知恵と考えているから。思い切って教養と言ってもいいかもしれない。

言っている中身には新しいものがない、ということとは、新しさを見せるのは、解釈と表現だけということでもある。クラシック音楽の世界では、楽譜は新しくならない。しかし新しい時代には新しい解釈と表現が、優れた演奏者により生みだされる。

エッセイの世界に即して言えば、どのような出来事から話を広げるか、どんな言葉で表現するか、どの作品から引用するか、書き手の個人的体験をどのように織り込むか、こうした表現の工夫が、新しいエッセイを魅力的にする。しかし、書かれている本質はすでに多くのエッセイストによって言い古されている。

要するに、エッセイにとつては文体がすべてと言ってもいいかもしれない。この点は、グロードとルエットによっても、詳細に論じられている(第五章 エッセイの語用論、恍惚)。もちろん、ここで文体というのは、明晰さやわかりやすさや、論理的な一貫性だけを意味しない。むしろ、そうした割り切れるもの、一直線なものからの逸脱が「読者を驚かせるとともに魅了する」。

本書は、これまで学問的なジャンル分けが困難とみなされていたエッセイを、きわめて学問的な方法で分類し、分析していく。ところが、途中にはエッセイ的とも呼べるような脱線があり、面白い。例えば、フランスのエッセイの現状について書かれた次の部分。

最後に、ここ二十年を特徴づけているのは、もしかすると別の現象かもしれない。「民主主義の中心部に自らの考察を書き込もうとする意志」を表明する知識人たち(歴史家、哲学者、学者)が、大学の仕事の傍らで、大衆化の目的のために、エッセイを使っている。ある。彼らは自分たちの狭い専門領域から外に出ているが、しかし同時に――ガリマール社の「エッセイ」シリーズの監修者エリック・ビーニュによると「倒錯的效果」として――、「エッセイが生きる生はメディアがそれに許可しているものだ」。

(中略)

書くことよりも理解されることに気を遣っているような、ああした新しいエッセイストたちが無数にいる時代にあつては、このジャンルの活力を物語るような、形式に関わる実験が敢行されているテキストはそれだけです。第三章 歴史(2) 近代的な形式)

エッセイの専門化ないし情報化と、大衆化ないし商業化が同時進行するという奇妙な出来事は、遠い国でも同じらしい。こうした状況は、もちろんエッセイの本質からは遠ざかるものだろうし、学問のためにも、エッセイのためにもなりはしないだろう。

こうしたことから、著者の二人は本書で展開された文学的な研究の次に社会的な研究をエッセイに対し行う必要があると示唆している。どんな社会階層が書き手となっているか、どんな広告によって宣伝されているか、どんな読み手が、どんな期待をもつて読んでいるか。そして読み手は読み終えて何を手に入れたと思っているか。こうした問題は、日本の出版状況でも研究する価値があるに違いない。

ところで、エッセイを直接いいあてる日本語は私には見当たらない。それでもエッセイを批評と随想という二つの言葉で呼び分けることはできると思う。批評は自己の外側、本や絵画、映画、事件、世相について書いたエッセイ、随想は自己を直接主題にするエッセイ。

批評は、英語で言えば“critique”。エッセイではないけれども、実際上の意味に即して言えばクリティークは、文学や芸術などの作品を分類、分析、評価することであり、日本語ではむしろ評論と呼ぶ文章に近い。

批評にしる随想にしる、肝心なことは、題材から自己の奥底へ、そして、自己を含んだ人間という普遍性へと視野を広げていくこと。批評ならば対象から、随想なら身の回りの出来事や自分自身の体験から、それぞれ自分の内面深く潜行する。内面の深海は自己の特殊性を越えた、人間の普遍性に広がっている。そこには時代も、社会階層も国境もない。深層水は、上空の気候や天候には関係なく、どこでも暗く、冷たい。そして自然の栄養に溢れている。

エッセイは単に文学の形式ではない、ということが、著者二人の出した結論。それはエッセイを書く人の気質以上に、エッセイを書く者の気構えに関わる。

エッセイはそれ自体一個のジャンルというより精神の特定の性質かもしれないと直感してもらえただろうと思う。……そしてこれは、少なからぬ要求なのである……。 (「結論」)

エッセイは書き手の気質であると同時に、書き手に要求される態度でもある。言葉を換えれば、エッセイとは書こうとしなければ書けないものであるけれども、書こうとしても書くことができない、書き終わって、書いてしまっているもの。

つまり、自分ではエッセイのつもりでも、他人からは何も試みてないように見えるかもしれないし、自分では言い古された、わかりきったことを自分なりに言いなおしているだけでも、他人の眼には超人的な試練に打ち克っているように見えるかもしれない。この点でもエッセイは逆説的。

こうして考えると、エッセイストとは自称できるものか、という問題が最後に残る。私は試しています、と自己言及するなら尊大に響く。せいぜい言えることは、私は試すことを試しています、ということではないだろうか。

エッセイストを名乗るならば、右肩に二乗を表わす数字が要る。

神戸市街地 定点撮影 1995-2001 復活への軌跡、関美比古、高橋勝視写真、加戸玲子、中井久夫、森反章夫、毎日新聞、二〇〇二

9/24/2003

三宮の小さなバーで飲んだときに、マスターがしきりに「それは震災の前のことやね」「それはあとのことやね」と言うのが耳に残った。そのときは、それだけ時代を分ける大きな出来事だったのだろう、という感想以上はなかった。図書館で写真集の棚を歩いていて、本書をみつけた。写真を見ながら、マスターの言葉の重みがようやくわかりはじめた。建物は復旧されても、ほんとうの復興はまだまだこれから。

いま、神戸へ出かけると街はほとんど元通りにみえる。高速道路もある。駅も建て替えられている。駅前の百貨店も何事もなかったようにきれい。知らない人が来たら、わずか60年ばかり前に大震災があったことを想像することができないくらい。

定点観測された写真を続けて見ていくと、復旧の技術が圧倒的な力と速さで、瓦礫と一緒に被災の記憶や心の傷まで無理やり整地してしまつたようにみえる。

人の心は建物のように新しい技術で建て直せばすっかり元通りというものではない。むしろ、外観だけが繕われてしまい、心の傷は皮膚の内側で鬱血しているのではないか。

無理に足を運び 目についた名もない花を踏みにじる。

「そして、神戸」(内山田洋とクールファイブ、千家和也作詞、一九七二)で歌われているような、生々しい傷跡を直視することができる、あるいは、そうしなければならぬような場所が残っているほうが、傷を隠してしまうよりも、長い目で見れば人間にとって意味があるのではないだろうか。

見えない傷跡や化粧された傷跡を見えないふりをしながら推しはかる想像力。マーサ・ヌスバウムがいう「共通の必要や傷つきやすさへの意識」や、ルソーのいう「共苦」という概念は、こういう精神の働きを指すのではないか。

震災に限らない。「あの前」「あの後」としか言わずに、涙を隠して朗らかに暮らしている人は少なくない。相手の一言から、その重みが想像できなければ、言葉がわかるとはいえない。

浮彫としての文章——「烏兔の庭」開園一年を迎えて

11/28/2003

個人でウェブサイトを開いて一年が過ぎた。ウェブ上で記録や文章を公開するようになってからも一年半が経つ。最初は、図書館での本やコンパクト・ディスクの貸出記録、やがて少しまとまりのある文章。それでも、しばらく新聞のコラムを真似た社会時評のような文章を書いていた。

それがいつしか、書評でも、本を読んだ感想だけではなく、その本に出会ったきつかけや、読む前に、知る前に抱いていた想像や偏見など個人的ないきさつを書くようになっていく。本の感想以外の文章では、さらに直接的に、自分の内面の状態や思索の過程について書いている。

実のところ、そのような文章を書くつもりは、まったくなかった。内面の思索について書きたくないからこそ、公開という方法をとって、できるだけ自分の外側にある事柄について客観的に叙述するつもりだった。それがどういうわけか、自分自身の思想について文章を書き、公開することになっていく。

これはどういうわけか。いくつかの優れたエッセイと出会ったことが大きな影響を与えていることは間違いない。しかし、そればかりでもない。それらは重要なきつかけになっていくとしても、伏線はずっと前から引かれていたように思う。

その起点は、いったいどこまでさかのぼるのかはわからない。いま言えるのは、少なくともこの一年のあいだ、書くという行為そのものを通じて、書く文章が変わってきたということ。書くということは、思っていた以上に、不思議な性格や、見えない力をもっている。それだけかわかってきた。

文章を書き始める前に、「書きたいことはあるのだが、書けることではない」と私は書いている。にもかかわらず、無機質な記録からはじまった文章は、いつのまにか内面的な事柄や、私的な事情まで書くようになっていく。

これらは「書きたいこと」だったのだろうか。そうとも思われない。むしろ、書きたいことはまだ何も書いていないような気がする。それ

どころか、これまで書いてきたことはすべて嘘のような気さえする。

事実と反するという意味ではない。ほかに書きたいことがあるはずなのに、それを隠して、わざわざ違うことばかり書いている。つまり、書いてきた文章は、すべて虚構ではないか。そんな気がしてならない。

それでは、ほんとうに書きたいことをわかつているのか、というところ、そうでもない。確かに「烏兎以前」の文章を読み返せば、「書きたいこと」が何であったのか、何であるのか、想像することはできる。けれども奇妙なことに自分自身のことなのに、それはあくまで想像であって、何の確信もない。

『庭』の一連のの文章を読む人は、とりわけ私自身を個人的に知る人ならば想像するかもしれない。私がいう「書きたいこと」はあのことだろう、このことだろう、と。でも、それはすべての外れのように思う。なぜなら、書いている私自身がまるであつていないのだから。

確かに、私の文章には文意だけでなく含意があり、それを読み取ることが可能だろう。しかし文章を書いた、あるいは「書きたいこと」を書かない私の真意は、推測することができても判定することはできない。言葉を換えれば、推測はあくまでも読み手のスタイルに属する問題であつて、書き手の私のスタイルには関係がない。

文章を書くことは版画の版木を彫るようなもの、あるいは、浮彫を彫るようなもの、近頃、そんな風に思いはじめている。ほんとうに書きたいこと、それは確かにある。けれども今はまだわからない。だからほんとうに描きたいものから遠いところから少しずつ彫りはじめている。

ひよつとしたら最後まで、ほんとうに書きたいことを書くことはないのかもしれない。浮彫とは、そうして外側を彫りつづけた結果、彫りこまれていないところに、ほんとうに描きたいものが浮かび上がらせるものとすれば。

浮彫では、ほんとうに見せたい絵の部分を彫つてはいけない。文章は浮彫だとすれば、ほんとうに書きたいことを書いてはならない。それでも、書きたいことの輪郭近くに彫刻刀を当ててしまうことがある。遠いところばかり彫つていてもいつまでたつても形は見えないから。あるいは、書きたいことがわかったような気になったとき、思い切り縁取りの線を切り込もうとしてしまう。そんな時には、間違つて彫つてはいけないところに刀を刺すこともある。『庭』という一連の文章を貫く比喻に従えば、誤つて裏庭に鍬を叩き込んでしまうようなことがある。

傷口がぱっかり開き、血がにじむ。時には、血が噴き出してくることさえある。言葉は刃物であるということは、単なるたとえではなく、

本当のことと知ったのは文章を書くようになってからのこと。その傷は、読み手には必ずしもはつきりとは見えないかもしれない。あるいは、私が気づかないうちに刃先が読み手の裏庭を切り刻んでいることもあるかもしれない。

書かれていないことが書かれていること。この考え方は私が大学院の修士課程でルジャン・ジャック・ソーの国際関係思想を研究しようとしたときの接近法に関わっている。この考え方は、けっして神秘主義的ではなく、言葉と文章の本質を突いてみると、今ではさらに強く思う。同時に、書かれていないことを研究することはけっしてできないとも、今になって思う。せいぜいできるのは批評することだろう。ともかく、ルソーを学問的な対象として研究することからは離れてしまったけど、書かれていないことが書かれていること、という主題は、自己の思想を浮彫として描くという、より切実な課題となつて、戻つてきてしまった。

書くこととは、書いていること以外を書かないこと。そして、書いていないことを描くこと。言葉遊びのような言い方になるが、私には、少しも奇妙ではない真理に感じられる。一年を過ぎて、文章に対する私の思いは変わった。こんな立体的な、あるいは逆説的な考えは、以前は少しもしていなかった。自分で文章を書くようになり、その習慣を通じて他人の文章や自分の文章を読み返して、文章というものが、これまでとはまったく違つて感じられるようになってきた。

それにしても、私が書く一連の文章はどんなジャンルに属する文章だろうか。少なくとも、小説ではない。私的な部分について書いているけれど、私小説でもない。日記でもない。日々の行動はまるで書かれていないのだから。

確かに、ここに書かれている文章は、記録。といつても運動の記録ではない。食事の記録でもない。買物の記録でもない。恋愛の記録でもない。そうした行動面での記録を捨象して一人でいるときに炭酸水の泡のように浮かび上がってくる言葉。それをすくいあげた記録。単純で、純粹で、基礎的な思考の記録。

単純、純粹、基礎的、といつても思考そのものがそうなわけではない。思考そのものは複雑で、泥まみれで、場当たりの現実には埋没して行われている。行うというほど自覚的ではない。もつと自然で、止むに止まれぬ発想。その意味では、私の文章は初稿においてはほとんど自動書記といえる。思いつき、書いてしまう文章。それを他人が書いた文章を添削するように推敲する。

言葉を換えれば、記録は、現実には即しながら現実を離れて、つまり私に密着しながら私を離れて、虚構として記録される。そうして事実を

基にした虚構の言葉が、読み返し書き直すことを通じて、折り返し、自分の外見、運動、食事、恋愛、そうした生活の現実に戻元され、生活が変わっていく。つまり、ここに書かれた文章は、私自身の思索を批評の対象にしている。その意味では、私批評といえるものかもしれない。

ところで、書くことは記録すること。書かれたものは記録されたもの。思想は、英語、フランス語でも受動態のソート、パンセと言われる。書かれたものに完成度が高ければ、作品とも呼ばれる。確かに私も、作品といえるような完成度をめざして、文章を推敲している。

けれども、作品、すなわち書かれたものは、私にとっては二義的なものにすぎない。書くこと、その行為にもっと大きな意味がある。言い換えれば、記録された結果ではなく、記録する過程に意味がある。書いた文章によってではなく、文章を書いているとき、言葉を選んでいくときに、私の考えは変わっている。

文章は、思索の果実を絞った残りかすのようなもの。そう気づいたとき、他人が書いた文章に、救いや模範のような過度の期待をしなくなった。文末が疑問形で終わろうと、断言で終わろうと、思索そのものは、作者自身が飲みほしてしまうのだから。

書きたいことを書きたいように書く。それがほんとうの自由というものかもしれない。今の私にとっては、書きたいことを書かないでいること、それでいて何かを書き続けることが、心に静けさをもたらしている。そういう自由もあつていいだろう。

そうして私は彫り続ける。

あらげずに、あらげずに

こんな表現が、もう指先を切りつけて、ほんのかすかな傷口がうつすらと血をにじませている。

谷間の女たち、森山啓、新潮社、一九八九

森山啓 石川近代文学全集9、森英一評伝、解説、石川近代文学館、一九八五

ふるさと石川の文学、金沢学院大学文学部日本文学研究室編、北國新聞社、二〇〇三

3/19/2004

森山啓との出会いは偶然。北陸での仕事の合間に時間ができて、小松市内を歩いたときに図書館で記念室を見た。それまでは、森山の名前すら知らなかった。そこで読んだ自伝の一部や談話から、森山啓の作品だけでなく、森山啓その人に興味をもった。

けれどもその後、森山の作品を読む機会にはめぐまれなかった。図書館に所蔵されている作品はほとんどない。もともと小説よりも随筆やエッセイを好んで読む。そうした作品があるのかどうかもわからない。読みたい本は他にもたくさんある。そうこうしているうちに小松に出張してから、一年近くも経ってしまった。

その間に、初めて金沢へ行く機会があった。といっても夜遅く到着して、翌朝に仕事を片付けそのまま帰京してしまった。このときは待ち時間に小松空港近くの航空プラザを見た。そして先月、もう一度、福井へ出かけた。街をみる時間はこのときもなかったけれども、空港で前に来たとき、目にとまりながら買わずにいた『ふるさと石川の文学』を買った。

昨年は初めて北陸を訪れたときには北陸について漠然としたイメージさえ持っていなかった。ましてや北陸の文化や文学については、何の予備知識もなかった。自作のプレイリストに、「遠きにありて思うもの」と副題をつけておきながら、室生犀星が石川の人であったことも、彼の名前が金沢の街中を流れる犀川に由来することも知らなかった。

室生犀星の詩集も読んだことがない。泉鏡花の小説も読んだことがない。それでも、そうした有名な作品が北陸で生れたことを知っただけでも、金沢や福井について、文芸の花咲く土地という印象を私に植えはじめた。

『ふるさと石川の文学』が採りあげるのは、石川県出身の哲学者や文学者だけではない。古代から現代まで石川県を舞台にした作品も紹介

する。作家や作品の紹介の合間に、兼六園や旧制第四高等学校など、石川の文学を理解する鍵となるいくつかの場所も紹介している。

北陸の地域や文学について、いくらかの予備知識を得てから、『谷間の女たち』を読みはじめたのは好都合だった。島村藤村の『破戒』や『藤村全集』の一部や、『北村透谷選集』を最近になって読みなおしたこともよかった。彼らを含めて、明治の自然主義文学は、学生時代の森山を魅了し、彼の文学の苗床となった。

こういうめぐり合わせは不思議というほかない。もしも、昨年、森山啓記念室を見てからすぐに『谷間の女たち』を読んだとしても、時代背景も舞台設定も理解できず、これほど深く作品を味わうこともできなかっただろう。

『谷間の女たち』は、四歳のときの最初の記憶から、昭和の初めに結婚して、戦中に作家になることを決意するまでを回想する作品。一言でいえば、自伝的な小説であり、小説的なエッセイでもある。森山は、いわゆる私小説家ではない。農民や女工を主人公にした小説も書いている。それでも彼自身の生涯、とりわけ少年時代から大学時代までは、何度も小説にとりあげられている。

ときには「愛別」「美しいもの・醜いもの」のように杉村夏也という名前を与えられ虚構に仕立てられ、ときには「北窓ひらく」のように、学生時代の逸話とまったくの空想とがからめられた青春小説にもなる。いずれも『石川近代文学全集』に収録されている。自分自身の十代が、森山にとつてもっとも重要な主題であったことは間違いない。

『谷間の女たち』は、そうした若い時期の作品とは同じ主題を扱いながらも作品がもつ雰囲気はだいぶ違う。単なる自伝ではない。そうかといつて、まったく作者の視点を排除した虚構の物語でもない。幼少期を過ごした大正、昭和初期という時代を回顧するエッセイでもない。『谷間の女たち』は、それらの要素が折り重なった作品。自伝的小説には複合的な作品という意味もある。この小説が複雑な構造をもっていることは、読みはじめてすぐ気づく。

『谷間の女たち』は、八十歳を過ぎた森山が、自分の過去を回想する体裁をとっている。その形式だけをみれば自伝。しかし、回想される逸話を読んでもみると、その描写はいま目の前で起きているかのように鮮やか。

それでいて、ときどき今の著者に戻り、心労を重ねる母親や、風変わりと両親から疎んじられた姉を、後から得た医学的知識で診断したりしている。この部分は、随筆のようにも読める。さらに当時の医療や社会制度を批判的に考察する部分もある。この部分は社会批評的。

また、語り手は森山自身であるけれど、物語をすすめていくのは明治の終わりから大正、昭和のはじめまで北陸に生きた多くの女性たち。母親、姉、近所に暮らす同級生や女学生のお姉さん、病院の看護婦たち、学生を下宿させる未亡人、そこへ集まる主婦や一人身の女性たち、保養先の年上の美しい女性、そして、のちに妻となる恋人。彼女たちの描き方は、実物を回想しているというより、物語の登場人物としてそれぞれ特徴的に描かれている。

登場人物では数少ない男性の一人である父親にしても、冒頭に書かれる「何たることある」という威勢のいい口癖が八時髭を触る手つきとともに厳格さを印象づけるために繰り返し効果的に登場する。これがなくなる時は、父親が衰えるとき。この点でも、単なる自伝や随筆ではなく、小説と呼ぶべき作品にみえる。

文学作品には、ある時代やある場所を写實的に記録するはたらきがある。『谷間の女たち』を読むと、北陸地方の方言や、今ではもうない旧制高校の様子が、手にとるようにわかる。戦前の社会というと、これまで見知った情報の偏りから、封建的、陰湿、閉鎖的と一面的な理解に陥りやすい。活き活きとした記憶の再生を読んでいると、かつして一つの言葉では括れない一つの時代が見えてくる。

あるいは、一つの言葉で表すとしても、必ずそこに表と裏があるというべきか。女性が虐げられる封建的な家族制度の裏に、温かい父親や夫の姿や開放的な性がある。男女別々の厳格なエリート教育制度の裏に、抗しきれない性欲や同性愛がある。

自伝であり、小説であり、随筆であり、批評である、という『谷間の女たち』の特徴は、言葉をかえれば、作者の視点が複眼的、多角的ということ、小説のなかに登場する自分自身さえ客観的に見ているということ。

もう一度、自伝的小説とは何か。文学理論のなかでは、小説とは何か、物語とはどこが違うか、ということも、簡単には説明できない問題らしい。小説とは虚構、作り話、ととりあえず理解するにしても、それが事実を回想する自伝と組み合わせるところに、矛盾した響きがある。それだけ書く難しさを感じさせる。

自伝とは自分がみたものを自分が見たように書くこと。文章さえ書ければ、それは難しいことではない。また、自分のことを客観的にみることも、できないことではない。たとえば履歴書は、自分のことを客観的に時系列にして書いた文書。文章を書く能力と、経歴をたどる資料と少しの記憶力があれば、自伝や履歴書を書くことは、さほど難しいものではない。

自伝的小説とは、自分がみたものや、考えたことを、他人がみたように、他人が考えたように書くこと。これは、やさしいことではない。さらに、その他人がみたように書いたものを、自分の視点で読みなおし、考えなおす。これをするためには自分自身を何度も裏返さなければならぬ。

『谷間の女たち』は、そのような多層的反省と呼べるような構造になっている。母の自死に号泣した自分。その原因は栄養不足や自分への看病がもたらした極度の疲労だったことに気づく自分。それを責める自分、同時に母の慈愛と自分を行きずりにしなかつた気丈さに感謝する自分。母を取りまいていた家族、社会や歴史について、知識を広げて、考察を深める自分。それらを何度も文章にした自分。そして、それらすべてを齢を重ねて思い返す自分。

過去の、とりわけ幼年時の辛い体験を言葉によって再構築することは、精神医療の世界でも認められている療法のひとつらしい。うまくいかなかったことを言葉で説明して自分を納得させることは、日常的に誰でもすることだろう。とはいえ、日々の暮らしのなかで、失敗を合理化するだけならともかく、幼い身にふりかかった不幸を言葉にすることは、悲しみを吐き出すだけでも、そう簡単なことではない。そのうえ森山の作品は、忍耐強く長い年月をかけて生み出された点で、医学療法や処世術とは一線を画している。まして単なる体験談とはまったく異なる。

作品は一度きりの回顧ではなく、また過去から現在へ向かう不可逆的な一方通行でもない。回想は過去と現在のあいだを何度も往復する。焦点は、歴史や社会を広く眺めて巨視的になったり、地域や家族を見つめ微視的にもなる。この視点の動き、すなわち文章がなめらかであること、そして眼差しの温かき、すなわち人々への愛情が文章にあふれていることが、森山の文体の特徴と言つていいだろう。

母親を太陽にして、その周囲を多くの女性たちが惑星のように周回している。その意味で、この小説は自伝的でありながら、自分が中心にいる天動説にたつてはいない。かといって、母親への追慕から逃れられない地動説でもない。作品のなかでの森山自身は、母親を中心にして、多くの女性たちのあいだをめぐる彗星のような存在。

ふだん、めったに小説は読まないけど『谷間の女たち』にはぐいとつかまれたまま引き込まれた。それは小説としてよりやはりエッセイとして読んだからかもしれない。いずれにしても、本書は筆者が一人称で書きすすめる独白体。エッセイにしろ小説にしろ、私が好んで読む文章には、この形式が共通する。

『石川近代文学全集』のなかでも、『谷間の女たち』のあとに続く時代を回想したエッセイ「霜柱二十年」や、敗戦直後の女工の暮らしや労働争議を一人の女工の独白体で描いた「貧者の愛」は、一息に読み終えてしまった。

「貧者の愛」は、敗戦直後、生きる意欲も術も失った若い女工が、働き出した職場で出会った年上の女性に惹かれ、彼女に導かれて女工の待遇改善のための運動に目ざめていく過程を、彼女が日々記す手記として描く。二つめの手記では、運動の成功と挫折の後、結婚して工場を離れてから、労働運動だけでなく生き方の範を示した女性を回想する。

春野さんは、旧制の女学校を出て、東京の音楽学校を中途退学した人だったことを、わたしは手帖で読んで始めて知った。貧乏のための中途退学で、それ以来ずっと働いて家計をたすけてゐた。人の身の上をきくのがためになると云ひつゝ、自分のことはあまり云はな
い人だった。でも争議がすんでから、わたしと一層気のおけない仲となつてからは、映画をみたいとか、本を読む暇がほしいとか、ピク
ニックに行きたいとか、音楽をききたいとか、好きになれそうな男が一人だけあるとか、鮎を食べたいとか、無邪気ないろんな欲望をわ
たしに告げられた。そしてどんなに無邪気な欲望を口にしても、何かしら思想的な空気のなかに生きてゐる人だった。春野さんは新しい
人だったのに、手帖のなかには、ずるぶる古いやうな形の文章も書かれてゐる。その一つに、

すぎにしかた恋しきもの——枯れたる花、自由の夢。

ゆくすゑ恋しきもの——枯るゝことなき花、自由の夢。

といふのがあつたが、春野さんこそ、わたしの思ひのなかで、「枯るゝことなき花」となつた。

「何かしら思想的な空気のなかに生きてゐる人」。森山啓こそ、そのような人に私にはみえる。

文学作品という芸術を、ほとんど直観で書く人もいる。森山は、そういう意味での芸術家ではない。彼の小説は、はつきりと、あらかじめ見出された思想を自覚的に表現した作品。しかし、森山にとって思想とは高邁な芸術論や社会変革の理論ではない。自然に対する畏敬であり、人間に対する愛情であり、その意味で思想という言葉よりは信念という言葉がふさわしいかもしれない。

今年は森山啓の生誕百年にあたる記念の年。彼の誕生日は、三月十日。

『谷間の女たち』も『石川近代文学全集』も、図書館の書庫で眠っていた。記念すべき年、記念すべき月に、北陸に芽吹いた「枯るゝことなき花」が目の前で咲いている。

少年時代の画集、森忠明文、藤川秀之挿絵、講談社、一九八五

5/22/2004

図書館のリサイクル文庫で手に入れたのは一年前。読み終えたのは数ヶ月前。できればまとまった感想を書きたいと思っていたのだけど、何も書き出せない。このままでは最初の感想が薄れていくので、一言でも書き残しておく。

森忠明は、NHKの少年ドラマシリーズでドラマ化もされた『きみはサヨナラ族か』（金の星、一九七五）の原作者。ドラマのほうは覚えていない。原作を読んだのは高校生の頃。なぜか覚えてはいないけれど、題名だけはその前から知っていた。それ以来、何度か読み返している。

『サヨナラ族』の後に書かれた本書は、同じように少年時代を描いた短編集。時代や舞台はほぼ同じ。一九七〇年代の東京西部。中央線と団地、大通りと歩道橋、商店街と喫茶店、遠くに見える山と雑木林。そんな風景は『大きい一年生と小さな二年生』（古田足日）に始まった、私にとって児童文学の一つの典型。

登場人物も似ている。学校ではさえないけれども、自我に目覚めて、試行錯誤をはじめる小学六年生、しつかりもので、ちょっと気になる女の子、風変わりな友人たち、そして息が詰まりそうな学校。題名にもあるように、絵や写真も何度も登場する。

何より決定的な共通点は、どの物語の底にも流れている、生き残ってしまった後ろめたさ。もう少し詳しく言えば、その気持ちの中身は、喪失感や悔恨、記憶だけに残る映像、そして、前向きとはけっして言えないけれども、何とか生きていこうとするかすかな希望。

希望という言葉を感じることも一種の偶像崇拜かもしれない。中学時代、国語の教科書で読んだ「故郷」（魯迅）の終わりにそう書かれていた。森の作品は、絵や写真というアイコンに託しながらかすかな希望を描く。

生き残ってしまった後ろめたさを感じてしまう時、つまり、この物語に描かれるような、痛ましく、切ない、多感な少年時代には、偶像が希望を描き出すのかもしれない。いや、描き出していたにちがいない。

「生き残った傲慢さに耐えかねる苛立ち」

6/14/2004

「九・一一以降」という言葉をよく聞く。「アウシュヴィッツ以降」「ヒロシマ・ナガサキ以降」という言葉もある。その後には、「何も確実なものがない」とか、「詩を書くことは野蛮」とか、喪失感を表す言葉が続く。

九・一一や、アウシュヴィッツもヒロシマ・ナガサキも、事件に遭遇した人だけでなく、同じ時代に生きた人すべてにとり強い衝撃だったことは間違いない。そうであるとしても、表現すべきは事件後の喪失感だろうか。九・一一よりも前には、何か信じられるものがあつたのか。アウシュヴィッツ以前は、人間は絶望と無縁で、明るい希望のなかに生きていたのか。ヒロシマ・ナガサキ以前、世界は幸福だったのか。

その前と後とで世界が一変したように感じる強烈な出来事は確かにある。そうした出来事に会って気づかなければいけないことは、それが起こる前から「終わっている世界」に生きている人々はいたということ、その事件が起きるまでも世界はまったく平和でも、幸福でもなかったこと、自分は過去の不幸の上に今の安寧を築いている、そして、そのことにあれほどの衝撃を受けるまで、何も気づくこともなく生きていた自分の厚顔無恥ではないか。

これまで何度か「生き残った後ろめたさ」という言葉を使った。この言葉が表すような感情がモチーフになっている文学作品も、少なくともない。しかし、この言葉は少し感傷的すぎるようにも思う。「後ろめたさ」という言葉には、自分が生き残っているのは、まるで自分の意志と無関係な出来事にしてしている。まるで生き残るべくして生き残ったという響きさえある。いったい、何の資格があつて生き残っているのか。言葉をかえれば、「後ろめたさ」という表現は、生き残っていることを過度に肯定しているようにみえる。生き残っていることは、「後ろめたさ」を感じるところではない。十分に傲慢ではないのか。

正義は実現されず人間は墮落し、いい人ばかり若死にする。それでも生きていけるのは、どういうわけか。それを肯定できる根拠は何か。

「後ろめたさ」というよりも、「生き残った傲慢さに耐えかねる苛立ち」というほうが正しいような気がする。それは自分を赦すことでも励ますことでも、まして誉めることでもない。いずれも自分自身に対してすれば傲岸不遜でしかない。

では、自分をどうすることか。今は、自分に耐える、自分をでは支えきれないほどの苛立ちさえにも耐えること、としか言いようがない。

おとなになれなかつた弟たちに……、米倉齊加年文・絵、偕成社、一九八三

6/28/2004

『どの本よもうかな？ 中学生版 日本編』（日本子ども本研究会編、金の星、二〇〇三）で紹介されていた児童書。図書館で書庫から出してもらった。この物語も、ずっと気になっていた。「生き残った後ろめたさ」あるいは「生き残った傲慢さに耐え切れない苛立ち」が主題になっている。戦争が舞台になっているけれど、必ずしも戦争が主題ではない。さらに普遍的な問題を扱っていると思う。

生き残る意味。正義は実現されず、不正、不公平、差別が横行する。いい人は早死にし、救世主は現れない、そんな世界に生き残る意味について考えることは、文学の普遍的な主題とについていい。ところが、日本語で書かれた文章では、絵本から専門書まで、この問題をとりあげるときに戦争、とりわけある特定の戦争を舞台にすることが不均衡に多い。

そうして生き残る意味、言葉をかえれば「ヒューマニズム」の問題が戦争と短絡的に結び付けられてしまい、かえって、この問題について考える間口を狭くしているような気がしてならない。

戦争に反対することと、生き残る意味を考えぬくことは、即座に同じにはならない。同じになる場合もあるかもしれないが、そのためには多くの思索と決意がいる。まして、前者が後者を含むわけでは絶対でない。

歴史は、むしろ後者がしばしば前者を呑み込んでしまうところに大きな逆説と不幸がある。だからこそ後者の「ヒューマニズム」が普遍的な問題として人々の表現の対象になってきたのではないか。

読む側はもちろんのこと、作者の側でも自分がみた、あの戦争の悲惨さを描こうとしているのか、戦争によって引き起こされる「ヒューマニズム」の危機という普遍的な主題を描こうとしているのか、自覚的であることはむしろ少ない。本書も、作者自身はあとがきで強調していることから、あの戦争を主題にしていると自分では思っているようにみえる。

しかし、自分が弟の死を早めたかもしれないという自責の念は作者の意図を越えて、より普遍的な問題に突き刺さっている。題名に戦争を指す言葉はなく、「弟たち」と複数形になっていることも、彼自身の体験だけを物語にしたのではないことを示す。この点に気づかなければ、

この絵本は、教科書に出ている戦争悲話の一つに終わってしまう。

確かに戦争は、被害の規模においても、凄惨さにおいても、他の不幸な出来事とは比較にならない。そのために経験を共有した人のあいだでは象徴的な意味を帯びる。しかし、集団的な象徴性とはときに幻想化し、本質を見誤らせる。

生き残る意味を問う場面は、戦争だけにあるわけではない。戦争以後も、そして、おそらくはそれ以前でも、あふれているというほどではないにしても、日常生活にはありふれている。

つまり、弟のミルクを飲んでしまうようなことを人間は日々繰り返している。だから私はこの絵本を読んでも泣けなかった。それどころか背筋が凍るような戦慄を覚えた。これは、いまの私自身だから。

なぜ、戦争を描く物語に引きつけられるのか、同時に、なぜ、そうした物語に引きつけられながらも、何かもの足りなさや、ときには反発さを感じるのか、ようやくわかったような気がする。

戦争を描く物語は一つの入口、少なくとも、あの戦争を知らない私にとって、そこは出口ではない。

第二部 草の上に腰を下ろして

ちいさな部屋にちいさな灯をともして

ぼくは悲惨をめざして労働するのだ

根深い心の悲惨が大地に根をおろし

淋しい裏庭の

あのケヤキの巨木に育つまで

——保谷、田村隆一、言葉のない世界、一九六二

裏庭（一九九六）、梨木香歩、河合隼雄（解説）、新潮文庫、二〇〇一

9/17/20.04

記録的な猛暑。夏休みというのに子どもたちは外に出て遊ぶこともできない。陽が傾くまで、涼しくした部屋で退屈しのぎをするために『千と千尋の神隠し』を買ってきた。去年の夏休みには『となりのトトロ』を見た。繰り返し見るうちに、子どもたちはすっかり台詞や仕草まで覚え、配役をして「トトロごっこ」をすることもある。

『千と千尋』は見たことがなかった。映画はほとんど見ないのに宮崎作品だけは好んで映画館で見ている。それでも『耳をすませば』まで。世間一般で評価が高まることと反比例するように、いつのまにか足は遠ざかっていた。それでも、数々の賞を受賞したこの作品は気になっていて、いつか見てみたいと思っていたところ。照りつける夏の午後をしのぐにもようどいい。優れた映画は、絵本と同じ。繰り返し見るほど、味わいが深まる。アカデミー賞受賞作にも期待が高まる。

幻想的な世界を子どもたちは堪能した様子。私はあまり楽しめなかった。発想、構想、技法、いずれをとっても画期的な作品であることはわかる。けれども受賞作品という先入観も手伝い、どの場面でも何が高い評価につながったのだろうか、つい分析をしてしまう。そのため最後まで物語に没頭することができなかった。そして見ている間、どういうわけか、二年前に読んだ『裏庭』（梨木香歩）のことを考えていた。

ネットで調べてみると、『裏庭』と『千と千尋』を比べている人は少なくない。いわゆるファンタジーという分野で共通しているし、女の子がいなくなるという設定も似ている。もつとも、『千と千尋』には下敷きになった児童文学作品が別にあるらしい。『千と千尋』に残るもの足りなさやもどかしさを解消するために『裏庭』の文庫本を買った。なぜ没頭できなかったのか、なぜ『裏庭』を思い出したのかもわかるかもしれない。以前読んだ本は図書館で借りた単行本。ちょうどクアラ・ルンプルールまで出張することになったので、時間はたっぷりある。長旅のあいだは、幻想的な物語に浸るといい。

『千と千尋』には、もどかしさだけでなく、明らかに不満が残った。斬新な発想や、最新の技術によるアニメーションであることは間違いない。けれども、ところどころで陳腐な場面が私には気になった。そもそも、白い竜という設定は、あまり評判は芳しくなかった映画『ネバー

エンディングストーリー』で見た覚えがある。子どもが竜の頭に乗って飛行する場面は、その映画だけでなく『まんが日本むかし話』でも見た。『風の谷のナウシカ』で、メーヴェを翼に飛ぶナウシカを背後から追いかける画面や、やはり飛行する怪物と洞窟で格闘しながら落下する場面のほうがずっと新鮮に感じられた。あちらは劇場で見たからとか、そういう映像に感動しやすい年頃だったという理由だけではないような気がする。

活劇以外にも、この作品では登場人物や背景にも過去の宮崎作品からの引用が見られる。そういう意味では、発想、構想、技法のいずれにおいても、『千と千尋の神隠し』は、これまでの宮崎作品の集大成といえるかもしれない。受賞したのは、この一つの作品というよりも、この作品に結晶した、これまでの数々の作品を通じたアニメーション映画への貢献、と考えたほうが納得できる。それでも、まだ不満が残る。その不満は、おそらく『千と千尋』の主題に関わりがある。そして、『裏庭』の主題にも。

『千と千尋』では、名前が重要な鍵になっている。自分の名前を失う、新しい名前を手に入れる、あるいは勝手につけられる、古い名前を覚えておく。大切な名前を忘れる、思い出す、呼びかける。名前に関連したさまざまな経験を通じて、千尋は自分の存在を確かめていく。気になることは、彼女が忘れていて、そして思い出し、心を込めて呼びかける名前が、人間の名前ではないということ。

この物語の主題は、人間と自然との関係。人間どおしの関係、あるいは自己と自己との関係、すなわち内面的自我の問題ではない。それはそれがかまわないが、自然と名前を結び付けることに、私は疑問を感じる。

名前をもつのは人間だけ。人間だけが名前をつけ、名前を呼ぶ。動物や植物、山や川にも名前はあある。それは人間のつけた名前。動物や自然がつけた名前ではない。つまり、名前は人間の存在にとってのみ不可欠なもの。動植物や、まして山川は、名前がなくても存在することができる。名前をつけられる前から存在している、と言ったほうがいいかもしれない。

『千と千尋』では自然のものが擬人化され、その名前に重要な役割が与えられている。その点が、私には少し不自然に感じられる。それが明らかにされる場面は、妙に性急で、説明がまわりくどいように感じた。

これまでに見た宮崎作品の多くは、人間と自然との関係を主題にしている。ときには対立、ときには共生が暗示され、必ずしも結論は一義的ではない。むしろ、その迷いを残す終わり方が、物語の後に思索をうながす余韻となっていたように思う。ところが『千と千尋』では説明が

多すぎて、見た後の余韻が少ない。

もつとも、娯楽作品としては十分に面白いし、現に子どもたちは喜んでいる。この作品から、自然と人間の関係について思いを深める人もいるに違いない。このような幻想的な寓話からは、ほかにも思索を深めるきっかけが見つかるのかもしれない。まだ一度しか見ていない私は、自分の関心にひきつけてしまいがち。

作品に自然との関わりではなく、人間関係や、さらには自己のあり方について思索のきっかけを求めてしまうのは、いつてみれば私の癖。問題は私にある。『裏庭』を思い出して、もう一度読んでみたいと思ったのも、きっとそのせい。

再読した『裏庭』は、初めて読んだときはだいぶ印象が違う。二年前には内容は盛り沢山である一方で、まとまりきららずに不安定な構成にも感じられた。ゆつくりと読みなおしてみると「裏庭」という概念をめぐるさまざまな要素が整然と配置されていることがわかる。前回は、裏庭という妖しく切ない響きに魅惑され、隅々まで行き届いた構成に気づいていなかった。今風の文章には、前回と同様とどころ閉口したものの、それも全体にわたって一貫しているようにも感じられた。

『裏庭』でも名前は重要な役割を与えられている。このことも前は気づかなかった。ここでは名前は人間の名前。しかもかつては親しく呼んでいたのに、辛い思い出を残しているために、いまでは声に出して呼ぶことができない名前。その名前を思い出し、もう一度声に出して呼べるようになるまで、主人公の照美は裏庭をさまよいて歩く。その過程で、彼女は今まで気づきもしなかった自分自身の残虐性や凶暴性を思い知らされる。

名前を呼ぶなくなってしまったのは、悲しみにくれていたからだけではない。名前を失くした「片割れ」を見殺しにしたのは、彼女自身。忘れようと封印していた悲しみに気づくとき、彼女は怒りに我を忘れるような自分の凶暴性も知る。

この場面は、映画『風の谷のナウシカ』の一場面を思い出させる。父を殺されたナウシカは、怒りを暴発させ何人もの人を殺してしまい、泣きながら、「怒りにまかせて何をかわからない」と老練の戦士ユパにすがりついた。

裏庭は心の傷。「傷を恐れてはいけない」「傷に支配されてはいけない」「傷を育てていくこと」。これら三つの言葉は、それをつぶやく三人の魔女とともに『裏庭』を支える支柱になっている。傷についての三つの言葉が柱とすれば、裏庭こそが庭、すなわち、傷ついた心こそが

人間、という考えが、柱を支えるこの作品の土台をなしている。

これらの言葉は、近ごろ流行している「癒し」という姑息な安心感とは違う。心の傷を直視し、それを携えて生きていくことを促すから。しかし傷とは自分が受けた傷ではなく、自分が切りつけた傷でもあることに気づかなければ、これらの言葉はやはり安直な清涼剤で終わるに違いない。

心は癒されるものではないということに気づくだけでもやさしいことではない。まして傷ついたのは自分ではないということに、ほんとうに心から気づかされることは、どれほど辛いだろう。しかも、それをしなければ、傷を育てることも、裏庭を耕すこともできない、というのでは。全ての人が私と同じように感じるわけではないだろう。誰もが裏庭に分け入る庭師になるわけではないように。私の心は、私の裏庭。私は私の庭の庭師。それを知るために、『裏庭』をはじめて読んでから二年の間、読むこと、考えること、そして書くことを続ける必要があった。そのことも、二度目の『裏庭』は教えてくれた。

教えてはくれたけれども、これからどうしたらいいのか、私にはわからない。途方に暮れて、庭の片隅に腰を下ろす。もうどこへも出て行くことはできない。はじめからここが私の庭。表も裏も私の庭なのだから。

もう一つ、これからの思索の種として心の奥底深くに埋め込まれた場面。

裏庭に奥深く分け入る旅の終わりに、照美はかつて別れた自分の「片割れ」に再会する。このとき、「片割れ」は別れたときの姿でなく、別れてから時を重ねた姿で現れる。ということは、つまり、この「片割れ」は思い出ではない。いま、生きている。

亡くなった人は年をとらない。よく言われることであるし、まぎれもない事実。ところが、ここでは亡くなった人が自分と同じように齢を重ねている。悲しみにくれていたり、その気持ちを封印したままでは、そう感じることはないだろう。

傷を育てる、裏庭を耕す、ということは、この真実を実感するための苦労かもしれない。それにしても、事実としてはありえないこういうことが、物語の一場面ではなく、真実として実感されることがほんとうにあるだろうか。わからない。

草に腰を下ろし、空を見上げる。こうするよりほか今は何をすればいいか思いつかない。目の前には静かな川の流れ。遠くからオルガンの音が聴こえてくる。「汝の大いなる罪を嘆け」。川上の礼拝堂で誰かが弾いているのだろう。聖堂は、木々の生い茂る黒い森のずっとむこう。

音色だけが低く響いてくる。

しばらくはこうして草に腰を下ろすことも悪くはないかもしれない。罪とは、「こうして草にすわればそれがわかる」（八木重吉）というものとすれば。たぶん救われるということは、罪を意識した者だけに訪れるものではないか。罪を感じなければ救われる必要も赦される必要もない。そこまでは今でも思いつく。そこから先は、やはり途方に暮れる。草に腰を下ろして考えるしかない。

草の上に寝転べば、心は空に吸い込まれる。吸い込まれる心は、かつて抱いていた、そして、今の今まで持っていると信じていた、無垢な心。草に腰を下ろすことは、無垢であることの終わり。

無垢の終わる先に何かがあるのか、その先に、もう一度無垢を取りもどすことができる場所があるのか。まったくわからない。

今は、ただ途方に暮れているだけ。陽が傾き、闇が近づいている。しばらく、このまま草に腰を下ろすことにする。

鉢かつぎ、あまんきみこ文、狩野富貴子絵、西本鶏介監修、ポプラ社、二〇〇四

9/25/2004

『千と千尋の神隠し』を見たあとで、この物語は昔話「鉢かつぎ姫」を下敷きにしているという説があるウェブサイトで知った。ちょうど同じ頃に、狩野富貴子の挿画作品を探していたところ、図書館の検索で本書を見つけた。

狩野は、『もうひとつのピアノ』（山崎玲子、国土社、二〇〇二）で知ってから、『あいつのリンダバーグジャケット』（森忠明、教育画劇、一九九三）と『のれたよ、のれたよ、自転車のれたよ』（井上美由紀文、ポプラ社、二〇〇一）などを読んだ。前者は、森忠明が得意とする少年時代の切ない記憶の回想。後者は目の見えない少女が思い切って自転車に乗るまでの手記。

狩野の絵は、柔らかな光線と穏やかな表情のなかに、子どものかわいらしさだけでなく、怯えや意地などが込められている。大胆な構図も印象に残る。例えば本書では、知っている人なら長谷寺とすぐわかる回廊の場面や、鉢が割れ、鉢かつぎの顔がはじめて現れる場面。

あまんきみこも、小学三年生のとき国語の教科書で読んだ「白いぼうし」や「すずかけ通り三丁目」の『車のいろは空のいろ』（ポプラ社、一九六八）で親しみがある。この作品では登場人物に尊敬語を使い、古文の現代語訳の調子に乗せながら、原作の雰囲気も伝えている。

『鉢かつぎ』は典型的な継子物語の一つ。鉢は目に見える徴となつて主人公に差別をもたらすだけでなく、彼女の個性の一部として彼女の命を救う役割も果たす。物語では目に見える徴、いわゆるステイグマとされているけど、目に見える何かである必要はない。実際、鉢がとれたあとでも意地悪な兄嫁達は姫の魅力を理解しようとしなない。

鉢は、母親がいまわの際に娘にかぶせたもの。なぜ母親はわが子に災いをもたらすかもしれない鉢を与えたのか。ここでも鉢は目に見える徴というより、この世から立ち去る者が残る者に伝えたい思いととらえることができる。

自分がいなくなれば、やがて新しい母親が現われるだろう。継母だからといって必ず意地悪とは限らない。優しくしてくれるかもしれない。そうしたらもう自分のことは忘れてしまうかもしれない。自分とともにひとときの間を過ごしたことを忘れずにいてほしい、この世を去る者もつ当然の思いが、「鉢」という形になつて姫にとりついたのでないだろうか。

いや、鉢を目に見えるものにしてるのは、去っていったものではなく残された者。そうとらえたほうがいいかもしれない。自分を残していった母親の気持ちを思いやるからこそ、姫は生き残っても、生き残らされた徴を強く感じる。だから姫は「鉢」から逃げることはできない。無理にとろうとすれば、かえって自分自身を苦しめることになる。

そして「鉢」を姫の脱ぎ去ることのできない一部と気づいた人が現われたそのとき、初めて「鉢」は目に見えないものになる。

Goodnight, My Angel: A LULLABYE, lyrics by Billy Joel, illustrated by Yvonne

Gilbert, Scholastic Press, 2004

The Saddest Time, written by Norma Simon, photographs by Jacqueline

Rogers, Albert Whitman & Company, 1986

11/3/2004

シンガポールの書店で、ビリー・ジョエルの一曲を絵本にしたものを見つけ、驚いた。詩に絵をつけた絵本は珍しくないけれども、ポップスやロックの歌詞に絵を添えた絵本というところまで思いつかない。葉祥明が絵を添えた『さとうきび畑』（寺島尚彦詩、二見書房、二〇〇二）くらい。

“Lullabye”は、ビリー自身の娘、アレクサが発した素朴な質問をきっかけにしていると聞いたことがある。

私が死んだらどうなるの？ お父さんが死んだらどこへ行くの？

誰もが一度は、いや何度でも抱く疑問。大切な人がいれば、疑問は不安になり、切実になる。この質問に正しい答えはない。正しい答えはあるかもしれないが、生きている間はけっしてわからない。だから答が正しいかどうかよりも、その答に共感できるかどうかが問題になる。

人は人の心に思い出として残る、というビリー・ジョエルが娘に贈った答えには、私も共感できる。きつと、そうなのだろうと思う。作品や業績は思い出の付属品でしかない。生身の人間と関わった生身の記憶。だから思い出は生きているといえる。

挿絵は英語絵本によくある写実的な画風。それほど気に入った絵ではないけれども、この歌詞が絵本になっているだけでも十分うれしい。

“The Saddest Time”は「人は人の心に思い出として残る」という考えを、大切な人を亡くした子どもたちが体験した具体的な挿話に託す。

挿話は三つ。仲良しの叔父さんを病気で失くした少年、クラスメイトを突然の交通事故で失った子どもたち、そして大好きなおばあさんを失くした少女。

本書のテーマは、もつとも悲しいときをどう過ごしたらいいかという具体的な助言。自分よりも悲しんでいる人に寄り添う、思い出を語り合う、その人と一緒にしたことを一人になってもしてみる。いずれも何でもないようできておもしろい。残された人それぞれが秘密にしておかなければならない別れであれば、なおさら。それだけに上手にできた時には思い出が生きていることを真実として実感できるに違いない。

これまでも英語の絵本では、死別や離婚後に読むという具体的な場面設定がされた絵本を見たことがある。今年の四月、シリコンバレーの書店で見かけた“*If Nathan Were Here*” (Mary Bahr, Karen A. Jerome) は、今でも記憶に残る。ネットを通じてならすぐ買えるとわかってはいるけれど、まだ購入にはいたっていない。次に書店で見つけたらすぐ買ってしまおう。

英語で読むと、特に表現が淡々としたものに感じられる。冷静な筆致は、合衆国では、メンタルケアがより制度化されているという背景も影響しているのかもしれない。

Griefing、つまり悲しみの作法というものは、確かにあると思う。私生活に公的な意味づけがされているわけではなく、にもかかわらず社会生活が私生活のすみずみまで入り込んでいる現代ではさらに必要とされているだろう。また、そこに悲しみ方の難しさがある。委ねられるほど自然の治癒力は身近にない。そうかといって社会制度も完全ではない。放っておいても、いじりすぎても、悲しみはいびつな形で心を蝕みかかない。

絵と字の両方で語りかける絵本は、「悲しみの作法」を学ぶ、いわゆる『グリーフケア』の教材にふさわしいかもしれない。映像と言葉の立体的な経験を通じて、頭にも心にも偏らず死を受け入れる方法を学ぶことができるから。

絵を感じながら文字を読む、絵を読みながら言葉を感じる。絵本を読むということはそういうこと。そこに特別な思い出があれば、読書はなお深いものになる。

岸辺のふたり (Father and Daughter, 2003) ' Michael Dudok de Wit' りちだややん
訳、くもん出版、二〇〇四

悲しう本 (Michael Rosen's SAD BOOK) ' Michael Rosen文' Quentin Blake絵、谷川
俊太郎訳、あかね書房、二〇〇四

2/28/2005

絵本の世界も、狭いながらも業界をなしている。二冊の絵本は、絵本業界では昨年来ちよつとした「話題の本」になっていると言っている。二冊は接近法は異なるものの、主題には通じるものがある。死とは何か、悲しみとは何か。愛する者との別れは人に何をもらすか。生き残るとは、どういうことか。こうした主題は私自身をつかんで放さないでもいる。

二冊ともすぐ読みおえたものの、感想を表すような言葉はすぐには見つからなかった。何を感じたのか、自分でも説明がつかない。正直、当惑した。何度も読みなおしてみても、その当惑した気持ちについて考えてみた。

この二冊を読んで私が感じたのはたぶん救いようなない気持ち。それは、これらの絵本を読む前から感じていたものから変わっていない。むしろ、その気持ちは補強された気がする。

『悲しい本』は、楽しかった頃の記憶で終わっている。その楽しかった時間は過ぎてしまった。つまり、作者の苦悩は最初のページに戻る。最後のページは、残念ながら私には希望や癒しには感じられない。悲しみには終わりがなくことを暗示しているように思えてならない。

悲しみは軽減される、つまり慰められることはあるかもしれないとしても、けっして終わることはない。一度知ってしまった悲しみには、最終的な治癒や解決はありえない。なぜなら、終わりに終わりはないから。

悲しみのなかに生きること、深い悲しみに向き合うことは難しい。だから人は、いや私は悲しみを解消しようとするのではなく、悲しみを無理に忘れようとしたり、悲しみを感じさせない境遇から気づかぬうちに逃げようとしたりする。そうでなければ、せいぜい悲しんでいる自分を

なぐさめるだけ。

だけど、ほんとうに悲しいのは残された者ではない。去っていった人こそ、ほんとうに悲しいに違いない。彼らは悲しむことすらもできないのだから。残された私は悲しみを誰かと分かち合うこともできる。それに気づかないうちは悲しんでいるとは言えない。それに気づいた時、ほんとうに悲しんでいる人に寄り添い、その気持ちを分け合えたとき、そして、純粋な悲しみに出会えたとき、同時にその悲しみが溶けていく。そんな予感がする。

『岸辺のふたり』は一人の女性がそんな純粋な悲しみに長い時間をかけて出会うまでを描く。この結末にはわからないことが多い。

純粋なかなしみは、人生の終わりにしか見出されないものだろうか。それほど長い時間逃げようとしたり、忘れようとしたりしなければ、純粋な悲しみにはたどり着けないのだろうか。この物語でも結局のところ、悲しみには生きている限り終わりが無い。そう思うと、やはり絶望的な気持ちになる。

疑問はほかにもある。人生の終わりに純粋な悲しみに出会うということは、この絵本にあるように、悲しみに出会う前の自分に戻るといったことなのだろうか。それではなんのために生き残らされた長い時間を過ごしていくのか、その間に感じた幸福は、悲しみというゼロの掛け算をしたような意味のないものなのか。

父と同じように自転車と並べて走った夫や、干潟で遊んだ子どもたちは、それ以前に出会った悲しみの前ではただの通りすがりに過ぎないのか。とすれば、純粋な悲しみをいくつも抱えている人は、いったいどこへ戻っていけばいいのか。

少女のまわりで流れた長い時間は、去って行った父親の側では流れてはいないのだろうか。父親のまわりに時間が流れていないとすれば、彼女は少女に戻らなければ父親に会うことはできない。かといって父親に再会するとき少女に戻るとすれば、父親と別れたあとの時間に意味がなくなってしまう。彼女にとって、生き残った意味がなくなってしまう。

ふと思いつくのは、しばらく前読んだ梨木香歩の幻想的な小説、『裏庭』。この小説では別れた「片割れ」のまわりでも時間が流れていた。だから別れたあとの時間にも意味が持たされている。私には、このほうが真実味がある。少なくともこれから生きていかなければならないという気になる。生き残る、そのことに意味が与えられているから。

もし、再会するとき少女に戻ってしまうというのであれば、父親が旅立ったときに一緒にこの世から去っていけばよかつたということになりかねない。寓話としても説話としても、そうあつてほしくない。

見方をかえると、悲しみの最終的な癒しは、もし、そういうものがあるとしても、人生のさまざまな苦楽を乗り越えて、自分の生命を全うした人だけでもたらされるという教訓を『岸辺のふたり』は残す。そう考えれば、この物語は生きる希望を残すともいえる。でもその場合も、この先の長さが見通せないだけに、やりきれない気持ちかともなう。

少なくともこの二冊を読んで希望や癒しを私は感じることはできなかった。それでも、慰められはしたかもしれない、同じように悲しみをもちつづけている人がまだほかにいることを知つたという意味では。

何度も何度も繰り返し読んだのだから、理由はまだわからないけれども、二冊に引き込まれたことは間違いない。古傷が疼くような読後感ではあつたけれど、実りある読書だつたといえる。

心から悲しいと思えることが幸せ

言葉にすれば奇妙だけど、はじめてそんな気持ちを味わつた。

そう思つてから『悲しい本』を読みかえてみると、ろうそくの炎を見つめる父親は、希望を抱いているわけではないにしても、悲しみに沈んでいるのでなく、心から悲しめる幸せをかみしめているようにもみえる。

『岸辺のふたり』と『悲しい本』について

2/28/2005

今月は一本しか文章が書けなかった。例年、辛い季節だけれど、今年はいつになくきつかった。業務では予期せぬ出張や宿泊が続き、予定していた休日もとれなかった。そのせいで後半には風邪をひき、週末まるごと寝込むことになった。

二冊の本の感想は合間をみて少しずつ書いた。最初の金曜日に最後の頁以外の全体の構成、連休に第一稿、月末に結語部分を添えた。最後に付け加えた二つの段落を書くことができたのは、ある新聞記事のおかげ。記事は二月二日付読売新聞「人生案内」。

自宅で購読しているのは日経新聞。出張先では読売を読むことが多い。理由は「人生案内」を読みたいから。出久根達郎をはじめとして、文章上手の回答者が質問者に応じながら、読み手にも考えることを残す、気の利いたエッセイを書いている。

幼い頃の苦しい出来事が大人になってからよみがえるようになったという女性からの相談を受けて、心療内科医の海原純子は、次のように書いている。

(前略) 今になって昔のことが思い出されて憂うつになってしまうのは、これまであなたがおさえこんできた様々な感情が、そろそろおもてに出たいと言っているサインのように思えます。つらい気持ちに目をむけるだけの力がない時は、感情をおさえ「感じない」ようにして生きるものです。今のあなたは感情をうけとめるパワーがなかったので、当時のことを思い出すのだと思います。思い出すまま、ノートに書き出し、十分泣いてください。

心の底から苦しいときには悲しむことさえできない。「心から悲しめることが幸せ」という言葉は、この記事への感想でもある。この記事を読んだおかげでようやく感想が書き上げられたことを書き残しておく。

こうして書き上げてみると、「書きたいことはあるのだが、書けることではないのだ」と書いた日のことがずいぶん昔に感じられる。

ジエニー・エンジェル (Jenny Angel) / Margaret Wild / Anne Spudvilas 著 / ももこ
ちすみこ訳、岩崎書店、二〇〇一

3/6/2005

『ジエニー・エンジェル』は、冷たいかなしみのなかにぬくもりが流れている。エンジェルという名前の少女は、きつと自分の祖先は天使だったと思っている。天使の子孫だから病気の弟を守ってみせる、けっして死なせはしない、そう信じている。

天使であつても人の生き死にを自由にできるわけではない。そのことはトルストイの「人は何で生きるか」で知った。でそれは、人の生き死にを決めるのは、何だろう。

人はそれを運命といたり神の呼び声といたりする。呼び方はどうでも、たいていの場合、ただ死の訪れを合理化しているに過ぎない。死を受け入れるために必要なのは言葉ではない。

ジエニーは、これから何度も屋根の上に座り考えるだろう。言葉による説明を受け入れるだけでなく、あきらめずに考えつづけなければ、答は得られない。それでも答が得られるものか、私にはわからない。

トルストイの民話集に収められたもう一篇「愛あるところに神あり」では、靴屋のマルツインのもとへある日突然、答が訪れた。その答が誰にでも訪れるものなのか、それも私にはわからない。

ぬくもりのなかのつめたさ。この絵本も『悲しい本』の一冊。でも、そればかりでもないような気もする。何とはなく、繰り返して読んでしまったのは、最後のページに夜の冷たさのほかにぬくもりがなお残っているからに違いない。母親、友だち。ジエニーは一人きりで悲しみのなかにいるのではない。

そういえば、靴屋のマルツインも一人きりでいるときには悲しみから逃れられなかった。小さな窓から外を見はじめたとき、彼をとりまく空気も変わりはじめた。答を解くかぎは、このあたりにあるのかもしれない。

吉田満著作集（上下）、文芸春秋、一九八六

「戦後」が失ったもの、戦争とは何だろうか 鶴見俊輔座談、晶文社、一九九六

4/8/2005

日経新聞の書評で、千早耿一郎『大和の最期 それから』（講談社、二〇〇五）の書評を読んだ。少年向けの『戦艦大和のさいご』は確か実家の本棚にあっただけれども、吉田満の名前は記憶になかった。

『大和ノ最期』を上梓してからも、文筆家ではなく日銀職員という一経済人でありつづけたこと、戦後にキリスト教徒になったこと、高度成長期を通じて戦中派の思いを亡くなるまで語り続けたことなど、書評で知った吉田の境遇に興味を持ったので、『大和ノ最期』から読んでみることにした。

二冊を交互にめくっているうちに『大和ノ最期』が収められた上巻よりも、そのあとに書かれた批評や随想が収められた下巻に、いつの間にか引き込まれていた。『大和ノ最期』は、強烈な印象を残す作品であることは間違いない。若い兵士の切迫した心理や壮絶な海戦の様子が、読み慣れない文語体のおかげで熟読を強いるので、切実に伝わってくる。とはいえ、『大和ノ最期』は吉田にとって出発点でしかなく、到達点ではなかった。

『大和ノ最期』は、初めは米国を明瞭に敵と表現していることからGHQにより出版不許可となり、発表後も、左派からは戦争を賛美しているといふと非難され、右派からは敗北主義とみなされ、なかなか正しい評価を得られずにいた。彼の真意は、沖縄への特攻を挑んだ天一号作戦や、まして太平洋戦争全体や戦争全体へ評価を下すことではなく、学徒兵の戦場での心理と行動を思い出し、正確に記録することにあった。そうした精神的な作業をしなければ、戦後は始まらないと吉田は考えていた。

その執筆意図を見抜いていたのは、出版を不許可にする一方で戦場心理の優れた記録として軍の機関紙に掲載した米軍と『大和ノ最期』の出版を最初に企画した当時創元社に身を置いていた小林秀雄だった。

自分の過去を正直に語る為には、昨日も今日も掛けがへなく自分といふ一つの命が生きてゐることに就いての深い内的感覚を要する。

従つて、正直な経験談の出来ぬ人には、文化の批評も不可能である。（『正直な戦争経験談』（『戦艦大和ノ最期』初版跋文）『著作集

上巻』「付録」（『小林秀雄全集 第九巻』、新潮社、二〇〇一）

『大和ノ最期』は冷静な記録、小林の言葉を借りれば、「正直な経験談」でしかない。それを書き上げた吉田は、文化の批評家ではなく、ふつうの職業人として戦後を生きはじめた。そのために、いったん書き上げた過去を彼はすべて否定しなければならなかった。特攻作戦から生き残つたという大きな矛盾は彼に自己否定を迫つた。

それから何度も、彼は同じことについて書いている。なぜ若者は死ななければならなかったのか。彼らが遺したものはいったい何か。生き残つた者に託されたものは何か。そもそも、なぜ、彼らが死んで、自分が生き残っているのか、そこにどんな意味があるのだろうか。

上下二冊に収められた作品の数は個人全集としては必ずしも多くはない。しかし、深い思索の上に書かれた硬質で密度の高い文章が続く。

体験は、だが結局それだけのものでしかない。一つの体験が真に血肉となるには、さらにそれが他の体験によつて超えられることを要する。終戦が来て、平和が訪れ、身边が平静にかえるに従い、私は自分に欠けていたものを、漠然と感じはじめた。死に望んでの、強靱な勇気とか、透徹した死生観とかが、欠けていたのではない。

静かに緊張した、謙虚に充実した、日常生活が欠けていたのである。死と面接したとき、そこにあるのは死の困難ではなくて、ささやかな自己である。そこで役立つのは、死相にこわばつた自己ではなくて、柔軟なならかな自分である。ただあるがままの、平凡な自己である。

私は、あの器械的な動物的な死が奪われて、なごやかな、明々白々とした日常しか残されていないことに、愕然とした。すべてが、光明に、淡々といとなまれてゆく、つねに自己をみつめ、一日の生に悔いなきを期し、一瞬一瞬に自分を超えること、そのみが、死に備える途と思われた。したがつて、生を全うする途でもあった。（『死と信仰』『下巻』）

過去に向かって生きる。吉田の生きる態度を一言でいえば、そうなる。それは過去にこだわることではない。過去をみすえて現在を生きること。時間は前に向かってしか進まない。過去の出来事を真剣に受け止め、心の礎とすることが、過去に向かって生きていくこと。森有正にしろ、過去相に生きる、と言いかえても間違いではないだろう。

過去相に生きるということは、楽器の弦に似ている。片方の端を押さえながら、もう片方を手前まで強く弦を張る。きちんと押さえられていないと、ずるずると現在へ近づいてきたり、突き刺しておいたつもりでのピンがいきなり飛んできたりする。しっかりと張られた弦からは、太く重い音がする。

過去に一方の軸を置き、弦を現在までまっすぐに引く。過去をみすえながら現在の状況を顧みる。押さえつけられた過去もじつとしたままではない。過去は何度も解釈しなおされる。例えば『大和ノ最期』に寄せられた批判や賛同について、客観的な分析をしたうえで、あらためて自分の問題として受け止めなおすようなことを吉田はしている。

なかでも「戦後日本に欠落したもの」と、それに続く鶴見俊輔との対談、さらに鶴見の批判に応えながら自分の考えを深めていく「死者の身代わりの世代」は、吉田が真摯な思索者であったことを十二分に感じさせて余りある。

しかし、この真摯であること、生真面目であることが、吉田の、あるいは彼が代弁をつづけた戦中派の弱さでもあるように私には思われる。鶴見は、戦中派は個人の政治的アイデンティティーの問題を国家へと横すべりで同一化させたこと、それゆえ、目の前にある現政府、現政策に対する批判能力を失ったことを指摘した。言葉をかえれば、真面目であるがゆえに、体制に従順で、目前の課題に――それが自らの命を賭す特攻であつても――過剰なまでに忠実だった。

戦争中、健康な若者は応召されて、大学生であれば士官候補にもなることができた。言ってみれば「祖国のために死ぬ権利」を充分に行使できる立場にあった。だから真面目な人ほどその権利を行使し、その義務を果たそうとした。「横すべり」の一因はエリート意識にある。

これまでに読んできた軍隊経験の文章と比べると『大和ノ最期』はむしろ異色。胡桃沢耕史や水木しげる、山口瞳といった人たちの描いた戦中派は、吉田ほど生真面目ではないし、祖国のことばかり考えているわけでもない。

当時は戦争に積極的に反対することも消極的にサボることもできる時勢でなかった、と吉田は戦後からの気安い批判に反論する。それは、その通りだろう。その一方で、自分なりに祖国に献身しているつもりでも、当局からは役立たずとみなされた人々が存在したことも確かだろう。役に立てないどころか、病人や老人、障害者に女性、そして子ども、庇護が必要な人々は戦局が悪くなるにつれ、とくに戦場となった沖縄では守られる国民とはいえないような仕打ちを受けた。

ある人が真面目に努力すればするほど、そして成果をあげればあげるほど、それができない人は虐げられるという皮肉。こういう傾向は、国内の価値や政策、情報が一元化されやすい現代の国民国家の総力戦の下ではブレーキがかかりにくい。

生き残った者と吉田が自省するとき、生き残れなかった者とは誰のことを指すのだろうか。「祖国のために死ぬ権利」を実際に行使できた戦友か。それとも、戦友にすらなれなかった人たちをも含んでいるのだろうか。

辛くして我が生き得しは彼等より

狡猾なりし故にあらじか

この岡野弘彦の短歌にこめられた苦い思いを、吉田はずっと胸に秘めていたのではないか。没後、吉田を特集するドキュメンタリー番組を制作した吉田直哉が著作集下巻の附録の「生きている問いかけ」で回想している。この痛切な自問を欺瞞的な感傷で終わらせないためには、生き残った者とは弱者を踏み台にした強者であるという自覚がなければならぬ。

私は、このことについて、吉田満を批判しようとは思っていない。この問題は、別な意味で生き残りである私自身に向けられる。戦中派が戦争の生き残りであるように、私は戦後社会の生き残りの一人。

私が生き抜いてきた学校社会や、今も身を置いている企業社会にも、精神的な土壌としては、戦争中に似たものがあるように思う。課題に對し努力することに過剰な価値がおかれて、努力しない者やできない者は「落ちこぼれ」のダメ人間で、抵抗する者は「腐ったみかん」と非難される。メディアも教育も情勢を追認し、補強する。

受験戦争と管理教育、会社主義に過剰労働。それをとりまく希薄な人間関係。こうしたとげとげしい、ある種の戦場ともいえるような戦後社会の病理のなかで、ある者は抵抗して敗れ、ある者は脱落し、ある者はそこから無言で立ち去った。ガラスのような彼らの心情を戦争に散った兵士たちの強靱な精神と比べることは、英霊に対する冒瀆かもしれない。そうであるならなおさら、彼らの頼りない立場について思いを寄せないではいられない。

彼らは何かを守るのでもなく、何かに戦ったのでもない、ただひとりくずれさつていったにすぎない。そう片付けることはたやすい。それではそんなもつとも弱い者を見過ごし、見捨てて生き延びてきた私は何者だろう。狡猾でなくていったい何だろう。彼らをただの敗北者として忘れ去ることが、あるいは過去の思い出としてだけ記憶にとどめておくことが、私にどうしてできるだろうか。彼らのことを忘れることはできない。では、忘れずにいてどうすればいいのか。吉田満が散華の世代の声に応えようとしたように、私は彼らの遺した問いに応えたい。彼らは何を遺し、生き残った私に何を託しているのか。

戦後すぐにそのように自問した吉田と違い、私はずっとこの問題を避けてきた。私に吉田を批判する資格はない。生き残るだけではなく、忘れようとしただけでも私は狡猾の誇りを免れない。私は、しばらく煩悶している。

感想を閉じるためにもう一度、吉田満の思想について。祖国愛という抽象的で不定形な感情を政策という大きな枠組みではなくて、個人の日常の水準において、どのような具体的な実践に落とし込むか。そのあいだに方向性の相違、強度の落差が生じる困難。

吉田がこのような問題に直面したのは、祖国愛と国家のあいだだけではなかった。

そして私の危機もここにある。私はこのように信ずる——ということ以外に信仰の姿はない。このように信ずることも出来、またあのよう信ずることもできる——これは断じて信仰ではない。私は文字通り暗きにさ迷っている。カトリシズムの堅固な克己と努力の信仰もすて難い。プロテスタンティズムの真摯な捨て身な信仰も本物だと思う。いかなる相違も表裏として見れば一体に過ぎない。例えば形式とか戒律とかいうが、真の信仰があれば人は形式には墮さない。逆に信仰がなければ自由な発意もマナーリズムに陥る。形式は情意に逆らうことも甚だしい。そして常に空言化の危険を伴う。しかしもしそこに信仰が保たればそれは弱い人間性にとって恰好の器である

かも知れぬ——だが、このような観察は断じて信仰の立場ではない。（「底深きもの」『下巻』）

抽象的な信じるという気持ちだけでは信仰とはいえない。信仰は、必ず制度を伴う。ところがその制度は、個々人の自由な信仰を規制する恐れをもっている。この問題は、吉田が苦しんだカトリックとプロテスタントという、ある宗教の宗派間のみ存在する問題ではない。個人の心情と集団の制度のあいだの緊張は、国家、企業、家庭、地域など、人々が暮らす場所のどこにでもあり、また人々が真摯であるほど、厄介なことに問題は深刻になる。

では、適当に不真面目であればいいのか。真面目でありすぎることは、確かに問題かもしれないとしても、ほどほどの不真面目はいつたいどの程度のものか、定義できるものだろうか。

鶴見俊輔は、吉田との対談のあとで次のように書き残している。

それぞれの人が、自分のくらしのスタイルを少しでもかえて、そうしてつくったわずかのズレから、自分ならびに自分たちの未来をのぞくということが、誰にでもできる最小のことであり、根本的なことだと思います。それぞれの人という道徳めいていやなので、むしろそういう風が、人から人へと吹きとおるようでありたいと思つています。状況にせまられてそういう風がおこりそしてつたわりやすくなると思つています。

鶴見は「道徳めいていやなので」と断り、真面目になりすぎないように注意しながら、ほどほどの不真面目を定義しようとしているようにみえる。「風」という言葉は快く響くし、鶴見の伝えたいところもわからなくはないけれども、これで充分とも言えない。

私ならば、どう表現するか、表現したことを「日常の思想」としてどう実践するか。問題はそこにある。いつまでも悲嘆に暮れている場合ではないとわかつてはいるけれども……。

雨ふり花 さいた、末吉暁子文、こみねゆら絵、偕成社、一九九八

弔いの哲学 シリーズ 道徳の系譜、小泉義之、河出書房新社、一九九七

4/22/2005

『雨ふり花 さいた』はこみねゆらの絵を見ようと借りてきた小学校高学年向けの小説。作者の末吉の名前は知らなかった。どんな話かわからないまま、出張にもつていく鞆に入れた。

小泉義之の本は、出張前に偶然図書館で手に取ったもの。彼の名前は『現代思想 二〇〇四年十一月号 特集 生存の争い 医療・科学・社会』（青土社）にあった立岩真也との対談で知った。立岩真也は、気になる本や言葉をネットで調べているとよく当たる。『自由の平等簡単で別な姿の世界』（岩波書店、二〇〇四）は読んでみたけれど、少しむずかしかったので感想は残していない。小泉の本もやさしくはないけれど、薄いのですぐ読み終えた。充分とはいえないまでも、ある程度の基礎知識があるおかげで、社会学よりも思想史のほうが、私には読みやすい。

帰路のフライトを待つあいだに『雨ふり花 さいた』を開いた。読みはじめてすぐ機内で読むにはちょうどいい幻想的な物語であることに気づいた。

主人公は小学六年生の女の子。家族にも学校にもなんとなく溶け込めないでいる。こういう物語によく出会うのは、どういうわけか。児童向けではありふれた設定なのか。私ははみ出した劣等生ではなかった。むしろある時期までは正反対の立場を装っていた。けれども、こういう物語を読むと、胸がしめつけられる。私のなかにあつて押し殺していた、「引きこもりたかった自分」が疼くのかもしれない。

タイム・トリップという設定もめずらしいものではない。以前、同じように海外出張の機内で宮部みゆき『蒲生邸事件』（一九九六、文春文庫、二〇〇〇）を読んだことがある。平凡な受験生が、二・二六事件に遭遇する話。タイム・トリップを通じて「家族」をあらためて「実感」という意味では、舞台はまったく違うけれども、映画“Back to the”にも共通するものがある。

読みごたえのある物語という意味では、本書もエンターテインメントといえるけど、推理小説や娯楽映画よりも、文学的ともいえる主題、つまり、生と死についての真剣な問いかけを含んでいる。

ユカにとって、生と死の問題は、本当は身近なものだったのに、六年生の彼女には、まだその問題をまじめに考えるきっかけがなかった。それに考えようとしても、生と死はあまりにかけ離れていて、つながりようがないように思っていたのかもしれない。

身近にある生と死、遠い歴史の彼方にある生と死。夏休みの不思議な体験は、死について考えるきっかけを彼女にもたらし、やがて彼女は自分自身の「生」について考えはじめる。

まるで無関心でいて、しかもつながりようがないと思われていた生と死の間をとりもつのは、名前。梨木香歩『裏庭』のように、本書でも名前は重要な役割をもっている。

人は誰でも名前をもっている。名もない人という人はいない。けれども、人間はつい、知らない人は「名もない人々」といつて、「その他大勢」にまとめてしまう。過去の人々については、特にそうなりやすい。

名前を知ったり何気ない逸話を聞いたりして、顔も知らない昔の人物が急に身近に感じることもある。そうすると博物館に展示されている人形も、ただの人形にはみえなくなってくる。名前を知ることが、その人を知りはじめること。というよりも、名前を知るとき、もうその人を「知っている」ことになる。

もちろん、名前が名前として響かなければ、人を知ることにはならない。店内の呼び出し案内は、たいてい人の名前に聞こえない。でも、知っている人の名前は、聞こえる。この物語でも、知らない人の名前が聞き覚えのある人の名に変わっていく。そうして、忘れられない名前になる。

そのとき過去は、名もない人々がいた現在とは切り離された「むかし」ではなくなる。あの人が生きていた、そしてその名前が今も自分のなかに息づいている「時」になる。

小泉義之の本にも、同じことが書かれていた。次の文章は、そのまま『雨ふり花』の解説にもなる。

だからこそ、死者の名を唱えることは、死者を亡霊化しない唯一の道なのである。もしも亡霊が名で呼び出されるならば、それは亡霊でも死者でもなく生者であることになるからだ。亡霊を追い払って忘れるには、死者の名を唱えさえすればよい。(V 忘却論)

死者の名を唱えれば死者が甦るとか、自分が救われるなどと小泉は言いたいのではない。彼の主張は、おそらくもつと控えめ。名前も知らない人の死について、同情したり責任を感じたりすることはやめようということ。なぜならばその思いは、どれほど深くても、名のある人々を「その他大勢」にくくることになるから。私がまずしなければならぬのは、名を知っている人の死を思うこと。

死者を弔うためには名前を呼べばいい。だから小泉は、死者を悼む作品についても否定する。そうした作品は、確かに存在するとしても、書き上げて捨てられるために書かれる。書いても書いても、死者を悼むことはできない。書ききれない気持ちが残る。書ききれないままに残る気持ちは名前に集約される。つまり、名前によって示される。その真実を知るために、表現者は作品を創りつづけるのではないか。小泉の考えを私なりに書きなおせば、そうなる。

だから、私は思う。書ききれないことを明らかにするために作品は書かれる。

ユカは三人の死にめぐりあわせ、そのうち一人の死を救う。あとの二人は、どうすることもできなかった。怒ったり、悲しんだり、自分を責めたり、どうしても何も変わらない。「雨ふり花」は次々と咲いていく。だから彼女にできることは、二人の名前を記憶にとどめておくこと。そのことに気づいたとき、彼女自身も救われた。もう忘れてもいい、という気持ちにさえなれた。

単行本なので、こみねの絵は表紙カバーをのぞき、すべて白黒。遠い記憶のような、ゆうべ見たばかりの夢のような、ぼんやりした色あい。これが色つきになったとき、夢も記憶も、人にはどうでも、自分の心のなかでは真実といえるようになるのかもしれない。それを「証しする」というのだと思う。言葉には出さなくても、ユカは確かに証しした。

こうして心に描かれ、「証し」される真実は、小泉が徹底的に排除した妄想とは違う。妄想は想像力の飛躍をとまなう。真実は、想像力の途切れのない折り重なりと隙間のない積み重なり。

土佐日記（九三五頃）、紀貫之、鈴木知太郎校中、岩波文庫、一九七九

5/22/2005

『用いの哲学』（小泉義之）は、最終章で紀貫之「土佐日記」を肯定的にとりあげている。誰かを悼む気持ちで創りあげても作品で死者を弔うことはできない、書き上げた作品を打ち捨てるのが死者を弔うことになる、だから、作品は捨てられるために創造される、という考えを小泉は「土佐日記」から引き出している。

古文は高校以来、読んだことがない。「土佐日記」は確かよく知られた冒頭を読んだだけ。今ごろ平安時代の古典が読めるものか、不安をおさえて、ともかく『土佐日記』を手にしてみた。読んでみると意外と読みやすい。もちろん、小泉の解釈やいねいな解説のおかげもある。忘れたように思っていた古文の勉強はいくらか身につけていたらしい。これは、代々木ゼミナールの土屋博映先生のおかげ。

私が気づいていなかった『土佐日記』を読むうえで大切なこと。これは日記ではない。日記という形を借りた虚構、つまり日記体の小説。土佐の国司をしていたことや娘を亡くしたことなど、書かれている内容は事実に基づいているけれども、文章は旅の途中で書き上げられたものではないらしい。かなりの時間をおいてから書かれ、しかも緻密に構成され、たとえば、終盤には緊張感を高めるように短い文が繰り返されるなど、文章も周到に推敲されているという。だから「土佐日記」は記録ではなく、作品といえる。

作品とは何か。これまでの読書から学んだことをまとめると、作品には明確な始まりと終わりがあり全体を組み立てる構成がある、そして全体を貫く一つの視点、ビジョンがある。ビジョンとは文芸にあつては文体のこと。「土佐日記」はこれらすべてを備えている。とくに文体という点では、「土佐日記」は画期的で衝撃的できえあつた。公文書はほとんど漢文で書かれ、和歌以外にはひらがなの使われていない時代に、紀貫之は、あえてひらがなを使い、しかも女性の立場から日記体を書いた。

なぜ貫之は女性になったつもりで、ひらがなを使って作品を書き上げたのだろうか。もし、文体が形式だけの問題であるならば、まったく正反対の試みもできたはず。つまり、職業でしか用いない漢文を使って、内面的な感情や私的な出来事を表現する方向もとれたのではないか。なぜ、それをしなかったか。解説は、日本語に対する強い意識があつたと説明している。

職業で使う言葉では表せない気持ちがあったのかもしれない。それにしても、平安人というと、宗教としては仏教が盛んだったし、「土佐日記」にも記されているように事細かな行事や慣習のあふれていた時代。子を亡くした悲しみは宗教や有職故実では和らげられなかったのか。とすれば、私が抱いていた平安人像とはだいぶ違う。

職業で使う言葉では表現できず、宗教や儀式でも解消できない気持ち。それをふだん使っている言葉で表現しよう、できると思うことは、言文一致に匹敵する革命的な発想といえる。もつとも、要所は定型詩である和歌で締められており、「土佐日記」は同時代の約束事から完全に逸脱しているわけではない。約束事を守りながら、新しいスタイルを探求している。

ここから先は憶測。日常語で心境を表現したいという発想には漢語をふだん用いない妻とその感情を共有したいという意識があったのではないだろうか。「土佐日記」は女性の立場から書かれている。つまり、作者は亡くした子を生んだ母ということ。子を亡くした母の思いを推しはかる気持ちだが、文体を選択する背景にあつたのではないだろうか。

少なくとも、自分がふだん使わない言葉で書くことは、自分の奥底で発酵する悲しみを客観的に見るレンズの役割は果たしたに違いない。

また「土佐日記」では、妻と思われる旅の同行者も娘を悼む歌を収録している。貫之は、そのような場面で同行者を持ち出すことにより、悲しみが一人きりのものではないことを暗示しているのかもしれない。

ところで現代の日本語では文体はどうなっているだろう。狭い意味での文体、書き言葉の言葉遣いという点では、ブログでも本でも文章は会話調に傾き、その傾向は日々強まっている。日常語で感情を表すことは当然のこと、そこには何の疑問もないようにみえる。書き言葉はよそよそしい。話した言葉をそのまま写し取った文章が、そのまま気持ちを表していると思う人のほうがきつと多い。

全体の構成や一貫したビジョンという点はほとんど見失われているように見える。これにはたぶん理由がある。作品という囲われた世界は息苦しいものと多くの人が感じているのではないか。そこまで考えなくても、壮大な物語に浸っている時間がないのかもしれない。この点は、私自身にもあてはまる。閉じた作品世界が、誰かを排除したり抑圧したりする、イデオロギーという硬直した精神構造を生むという懸念もあるかもしれない。

反書き言葉、反作品という今の文体の特徴は、ブログという表現形式に象徴される。いつからでも始まり、決まった終わりはない。外へと

出ること、外から来ることもできる。それを開かれた表現形式と呼ぶことに、異論はない。そういう形式に向いている内容もあるだろう。

作品という構造をもちながら、硬直した性質から逃れることはできないか。そのためにはまず、ビジョンそのものが柔軟で、それでいてしつかりと地に足がついていなければならぬだろう。

小泉義之は、作品は捨てられるために書かれるという。捨て去るためには、何かの形がなければならぬ。言葉に形がないとは思わない。定義や概念は、言葉の形のことではないか。そして、作品は定義された言葉によって積み上げられるものではないか。

言葉に形を与えるのは、言葉を形あるもの、そして言葉によって表される気持ちや形あるものとして見る眼。スタイルを決めるのは形ではなく眼、ものの見方のほう。今はとりあえず、そういう結論にしておく。ビジョンをどう見出すかは、これからの宿題。

一つ残る疑問。作品に終わりはあるだろうか。形のうへでは終わらせることはできる。しかし、物語の終わりは、作品の終わりではない。書き上げた作品は、書きなおすことができる。そして、作品は書き続けられるだけではない。作品は読まれる。読まれつづける。読まれ続ける限り、作品に終わりはない。

旅程は淡々と語られる。天候に左右され、海賊に怯える当時の船旅の様子は伝わるけど、描写は詳細ではない。京が近づくにつれ、さらに風景より心理描写が増える。それは帰り着いたときにどんな気持ちになるか、すでに予期しているせいかもしれない。

意外と読みやすいとはいっても、全文を読み終えるにはそれなりに苦労した。貫之にとつてようやく帰り着いた場所が悲しみを新たにする場所に過ぎなかつたように、あらかじめ知っていても苦労して読み進んでたどりついた結末は、思っていた以上に痛々しい。

貫之は離れていた我が家に残る松の木を見て、帰ってきた喜びをかみしめながら、帰らない命に悲しみを新たにした。ろうそくの炎を眺めながら、楽しい誕生日の思い出とその誕生日が二度とめぐってこない悲しみを感じた男の気持ちに通じる。

忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず、とまれかまれ、疾く破りてむ

紀貫之はこう言い切れるまで、作品を書き続けなければならなかつた。書き上げたときの彼の気持ちはどうだったろう。なお残る悲しみと

徒労感だったろうか。それとも、何か違う気持ちだったろうか。よくわからない。

つまり、ここから私の読みがもう一度はじまる。それは、「土佐日記」を読みなおすのではなくて、「土佐日記」を読んだ私を読みなおすことになるだろう。

千年前に生きていた紀貫之という名前が、教科書の中から、私のなかに棲みついた。

田村隆一エッセンス、青木健編、河出書房新社、一九九九

6/4/2005

田村隆一は荒川洋治『詩とことば』と『吉田満著作集』で知った。気に入る二人の紹介であれば、相性があう確率は高い。没後に編まれたアンソロジーを読んでもみると、これまで気に入った本に共通する何かを感じる。といっても、面白く感じるのは詩より散文。なかでも「死せる海軍予備学生への鎮魂賦（オード）」に、マイケル・ローゼン『悲しい本』から吉田満、『弔いの哲学』（小泉義之）、そして、紀貫之『土佐日記』までたどり着いた今年のこれまでの読書を一点に凝縮する言葉を見つけた。

そして、これらの死の統計のなかに、林学生「死」も数えられてしまうのである。だが、ぼくらは、量の世界にくりこまれることをあくまで拒否する。質としての死を、林学生ノートから読みとらなければならぬ。質としての死は、あらゆる遺族や、その生をともにした精神的な血縁者の胸底に現存している。さもなければ、死者のおもかげが、いまもお親しいものの胸中によみがえりはしないのである。そして死者をよみがえらせるためには、生き残ったものは質としての「死」を経験する以外にない。ということは、量的な世界を生きるばかりではなしに、質としての「生」を生きることなのだ。

真の平和は、政治的なスローガンや、擬芸術的なメッセージからは、けっして生まれはしないのである。なぜなら、平和は、受動的に守るものではなくて、人間の固有の手によってつくものだからだ。人間が、あたえられた固有の、つまり、質としての条件のなかで、全的な自己表現の道を見出さないかぎり、なにものをも創造することはできないのである。

ここで「質」と言われていることは、「名前」と言い換えても間違いではないだろう。

詩にも気に入ったものはある。初期の詩集『言葉のない世界』（一九六二）の「保谷」。以前住んでいた町の名前に惹かれて読んでみた。

この言葉もまた、今までの読書と思索を代弁してくれているように思う。

ちいさな部屋にちいさな灯をともして

ぼくは悲惨をめざして労働するのだ

根深い心の悲惨が大地に根をおろし

淋しい裏庭の

あのケヤキの巨木に育つまで

このまま「第二部 草の上に腰を下ろして」の表紙に掲げておこうと思う。「第一部」の表紙には、ピエール・クラストルの言葉が掲げられているのに、第二部には何もなくてさみしい感じがしていた。こうして詩人の言葉で読みなおすと、昔住んでいた街の名前もちがって響く。

星に帰った少女（一九七七）、末吉暁子、こみねゆら絵、偕成社、二〇〇三

レヴィナス 何のために生きるのか、小泉義之、日本放送出版協会、二〇〇三

未完の菜園 フランスにおける人間主義の思想 (Le Jardin imparfait: la pensée

humaniste en France, 1998) 'Tzvetan Todorov' 内藤雅文訳、法政大学出版社、二〇〇

II

7/23/2005

今月初め、久しぶりに大阪に行った。夕方、駅前の大型書店を散歩。『吊いの哲学』で知った小泉義之の本を見つけた。レヴィナスには、これまで関心がなかったけれど、興味をもった小泉の書いた本ならと思い、手にとってみた。

『シリーズ・哲学のエッセンス』は、薄くて軽い。これまでに『ベルクソン』（金森修、二〇〇三）と『アウグステイヌス』（富松保文、二〇〇三）を読んでいる。入門書といっても、従来の新書に多かった伝記や著作の要約とは違う。主要な著作や根本的な問題意識を一つ選び、集中的に紹介する、言ってみれば一点突破型の入門書。

従来の入門書に多かった全体照射型では、ややもすると表面をなでるだけに終わることがある。一点突破方式は、思想家の世界を小さな穴からこじ開ける。読み終わると、広大な世界を見渡せる入口に立った気になる。

とはいえ、問題意識やこじ開け方に共感もてないと、我田引水に読めるかもしれない。そう思うくらいならば、このシリーズは読まないほうがいい。初心者に宛てた入門書というより、それぞれの著者が自分のために書いた覚書のように、私には思える。

「何のために生きるのか」という問いに、小泉は出し惜しみせず、レヴィナスの回答を序章で掲げる。暫定的な答えも究極的な答えもあらかじめ出ている。私はすでに生きている、そして、どう生きても私は最後には死ぬ。この問題に悩むのは、問題の立て方が悪いから。答えが

すでに出ているのだから、答えにあわせて問題を立てなおしたほうがいい。小泉は、レヴィナスの言葉を手がかりにして問題のたてなおしを試みる。

最初の序章と最後の小伝を読み、そう一人合点した。そして、本文は読まずにそのまま帰った。あとで図書館で借りて中身を読みなおしてみると、レヴィナスの言葉遣いはなじみにくく、小泉の筆運びも歩調をあわせづらくて、何度か読みなおすことになった。薄い本なのでそれもしやすい。

『弔いの哲学』は、末吉暁子の児童書『雨ふり花 咲いた』と一緒に読んだ。今回も、『レヴィナス』を読みあぐねていたとき、図書館で、夏休みにあわせて星にちなんだ本を集めた棚で『星に帰った少女』を見つけた。『雨ふり花 咲いた』のあとで、こみねゆらの挿画を添えて新装復刊された本。原著が書かれたのは二十五年以上前。ちょうど私がこの本の対象となる年齢だった頃。読んでみると、不思議なことに『レヴィナス』に書かれていることまで、わかってくるような気がしてきた。

主人公、マミ子は六年生の女の子。両親は離婚して、働く母親と二人暮らし。孤独感や疎外感を、タイムスリップを通じた出会いが埋めていくところは、『雨ふり花』と同じ。

気に入ったのは書名。読み始める前には主人公が「星に帰る少女」に出会う話と想像していた。そうではない。「星に帰った少女」とは、主人公、マミ子のこと。読者は、マミ子とともに、自分で自分を見る目ではなく、他者の目を通じて自分を見る目を知る。しかもその目は、ずっと遠くでありながら、もつとも身近なところにある。他者の目は他人の目とは違う。幸福か不幸か、それは自分にしかわからない、自分にしか決められないことなのに、人は他人の目で判断してしまいがち。そのとき幸不幸は量で測られる。何かがあるかないかで測られる。父親がいないこと、働く母親の帰りが毎晩遅いこと、それ自体は不幸なことではない。マミ子はそう思っている。でも気にしていること自体、他人の目から自分を見ている証拠。

他者の目は、自分のなかの自分以外の視線。それは、幸不幸を量ではなくて、質で観察する。善悪、真偽、多寡では測れない質によって、自分の外から自分を見るとき、はじめて「この世に一つだけの存在である私」に気づかされる。

それでは「この世に一つだけの存在である私」は、どこから来たのか。『星に帰った少女』は、家族の歴史の物語でもある。小泉の論考に

従えば、家族、少なくとも両親のいない人はいない。人間は二つの命から、それを足すのでもなくそこから引き出すのでもない、「複雑なやり方」で一つの命として生まれる。

家族がある人も、ない人も、ある人はある人なりに、ない人はない人なりに、そして、家族を失くした人は失くした人なりに、自分の命と家族の歴史を思う。そこにもまた他人の目で量を比較してしまう傾向があり、それとは違う、他者の目で質を自覚する志向がある。

自分が「星に帰った少女」だったことに気づいたマミ子は、幸せをほかの人と比較することをやめて、「幸せの質に」ついて考えはじめる。そして自分の幸福の質として、家族の新しいあり方を受け入れることができた。

『弔いの哲学』もそうだったように、小泉がレヴィナスの言葉を通じて伝えたいことは、彼が書いていることよりもずっと控えめのように感じる。名前も知らない人々の死を同じ人類というだけで悼んだ気になるのはやめよう、名前を知っている人の死を思うことからはじめよう。『弔いの哲学』で彼が呼びかけたことを、私はそう読んだ。

血のつながりを重んじるとか、人は子どもを生まなければいけないとか、そんなことは言っていない。一人の人は二人の人から生まれる。そしてもう一人の存在がなければ一人を生むことさえできない。

その生物的事実を謙虚に受け止めよう。そこから人間の共同性に向かい、それを頭で先取りするのではなく、少しずつ想像力を積み重ねていくことができるのではないか。『レヴィナス』の第三章を、私はそう受け止めた。

ところで、マミ子という名前は、絵本『きょうはなんのひ？』（瀬田貞二文、林明子絵、福音館、一九七九）にも登場していた。書かれた時代はほぼ同じ。『星に帰った少女』のほうが数年早けれども、両親の離婚、働く母親などを舞台設定にしている分、新しい家族像にみえる。もちろん、それは書かれた時期より書いた作家の年齢が影響しているのだろう。戦後日本で絵本の礎をつくったともいえる瀬田の描く家族は、理想的というより現代の視点からは保守的にさえみえる。

両親とともに一軒家で暮らし仔犬までもらったまみ子が、夕暮れにアパートでひとり母親の帰宅を待っているマミ子を何かを持っているかいないかで比べ、まして、それをもとに見下すようなことをするならば、彼女は幸福な人間とはいえない。幸福は幸せな環境ではなく、幸せに生きる人格のことだから。どちらのマミ子にも喜びがあり、かなしみや苦しみも、それぞれにあるはず。それは量の比較ではわからない。

瀬田がある幸せな家族を描いたときにも、その環境を当然や当為とするつもりはなかつただろう。

文学的な表現は、徹底して質の表現をもとめる。人の名前や、場所の名前の固有性にこだわる。個別的な状況と個人的な主題を突き詰めていくことで、普遍的な何かを伝えようとする。哲学的な表現は、量の表現にかたむく。学とは、普遍的な問題を普遍的な言葉で表現する方法だから。

それでは、思想的な表現とは何か。文学ほど名前にこだわらない。そうかといって、哲学ほど抽象的な表現を好まない。あいだで揺れる。質が、ここで問われる。

大型書店を歩いていたら、『未完の菜園』（トドロフ）を見つけた。原題を直訳すれば「不完全な庭」。図書館で借りて読みはじめたけれど、きつとこの本の感想は書かない。本を読んで感想を書けるものとそうでないものがある。書けないとは読み終えられないということ。この本はいつまでも読み続ける一冊になりそう。

序章で、思想の中途半端さと、それゆえに人間主義的であることが指摘されている。

本書も本書なりに思想史の性質を帯びている。私は思想（panse、原文ルビ）とはいうが、哲学とはいわない。思想の領域は哲学よりもはるかに広く、実践にはより近いが、それほど専門的ではない。私が特定しようとする精神の系譜は、哲学的であるよりもむしろヘイデオロギー的である。そうした系譜の一つ一つは、哲学的なところはあがるが哲学に限られない、政治的・道徳的観念、人類学的・心理学的仮説の集合体である。このように、思想そのものの研究を選ぶことにより、私はすでに人間主義の系譜に肩入れしているのである。というのも、思想が自由ではないとしたら、思想は切り離して検討される価値はないからであるし、思想は文化的共同体、社会階級、歴史的時代、あるいは人種の生物的必然性による機械的な産物ではないからである。（序章 知られざる契約）

イデオロギー的、とっているのは、客観的、価値中立的な立場に対して、個人的であることを恐れないという意味だろう。

『シリーズ・哲学のエッセンス』が採用する一点突破型の書き方も、哲学というよりは思想的なアプローチといえる。その思想家は、なぜ、

その問題にとり憑かれたのか、どのようにして取り組んだか。採り上げる紹介者たちもまた、無味乾燥な教科書を書く姿勢と異なり、どうしてその思想家と向き合わなければならないのか、その動機付けを大切にしている。

とりわけ小泉は『弔いの哲学』でも、思想家に対する好き嫌いや、批判する擁護するという立場を鮮明にしていた。『レヴィナス』でも、彼はレヴィナスの思想そのものよりも、思想に対する態度に最終的に注目している。本文のあとに続く結論。

レヴィナスにしても、何箇所かで、生き残ることの罪について語ってはいる。そう語らざるをえなかったのも仕方のないことであろう。しかし、レヴィナスは、その罪を徹底的に考え抜き、共に死ぬことはなくとも共に生きていく人間の共同性に賭けて、生涯をまっとうした。(レヴィナス小伝)

ホロコーストで家族や親族をほとんど亡くしたというレヴィナスが、人間の繁殖について語る、そのことを語りだすまでの内的な発展と、それを語りながら生きた姿勢を、小泉は重視する。それこそが、思想の本質と彼が考えているからではないだろうか。

私と私でないものから生れた、私であり、私でないものたちと過ごす、もう一つの庭が私にはある。

私であり、私でないもの。そう、私の名前は彼らの名前で、同時にもちろん、私は彼らではない。

「不完全な庭」が、もう一つの「不完全な庭」と交わり、合成でも分割でもないやり方で新たに生み出される「不完全な」しかし「一なる存在」である庭。そして、その庭が育ち新たな庭が、また生まれる。

その一連の出来事が起こる場所を、他人はどう呼ぼうと比べることはしない。私自身は、家庭と書いて、Homeとルビをふつておく。一つ、心に刺さった言葉を書き写しておく。

「そう……。ママはね、いつかわたしの母とおなじように、まだ小さいあんたをのこして死ぬんじゃないかと、そんな予感がしてしかたがなかったの。母をなくしたころのわたしの年に、あんたがだんだん近づいてくるのをみると、こわかった。……日記があんな風に

海にしずんでくれたのは、あたしにとっても、身代わりになってくれたような感じがするの。……それにしても、あんたが助かって、ほんたによかった……」

ここでは母親が、自分が母親を失くした年齢に子が近づくことを怖れている。

同じように、親しい人が亡くなった年齢に子が近づいていくのを、怯えながらその成長を喜ぶ人もいる。

If Nathan Were Here, written by Mary Bahr, illustrated by Karen A. Jerome, Erdmans, 2000

10/2/2005

“If Nathan Were Here”は‘griefing’は、いわゆる「悲しみの作法に」についての絵本。もう一步踏み込んで言えば悲嘆の分かち合いを描いている。

物語の結末は、楽観的すぎるように見えるかもしれない。悲しみを分かち合うことを、グリーンフィングの終わりや目的ととらえれば、そういう見方になるかもしれない。しかし、分かち合うことは、きつと悲しみの終わりではなく、より深い悲しみのはじまり。

名前の与えられていない主人公が、Nathanの姉、Mary、Kateに対して、PotterさんやBrickley先生のように振舞えるようになるのは、やさしいことではない。自分の悲しみをぶちまけることもできないし、相手の悲しみを飲み込むこともできない。また、傷を舐めあうことも違う。分かち合うということは、いま生きている人とともに生きていくこと。

つまり、分かち合うことで、悲しみは消えてなくなるどころか、生きていくかぎり続いていく。それに気づくことは、実は悲しいことではない。きつとその正反対。

本書の結末は、もう一つ、分かち合いを暗示している。それは死者との分かち合い。いなくなったあの人が、今、ここにいたら、どうするだろう。そう思いをめぐらせることは、死者の無念を思いやり、その遺志を受け継ぐこと。これは死者を忘れてもできないし、悲しみに沈んでいてもできない。死者との分かち合いは、過去を見すえながら、未来に向かうこと、つまり過去相に生きること、ともいえる。

夕風の街 桜の国、こうの史代、双葉社、二〇〇四

10/28/2005

この本の感想を書くときは、この物語についてどう思うかよりも、この物語を読んだあとで何を思ったかを書いたほうが良いように思う。著者もそう期待している。

そして誰より「夕風の街」を読んで下さった貴方、このオチのない物語は、三十五頁で貴方の心に湧いたものによって、はじめて完結するものです。これから貴方が豊かな人生を重ねるにつれ、この物語は激しい結末を与えられるのだと思います。そう描けていればいいと思っています。（「あとがき」）

小説でもマンガでも映画でも、すぐれた作品とは針穴のようなもの。具体的な表現から普遍的な何かが見えてくる。具体的な出来事を誇張する拡大鏡ではない。普遍的とは、どこにでも当てはまるということではない。どこにでもあるということに過ぎない。

そう考えると、あとがきの期待は言わずもがなにも見える。でも私がそれに気づいたのはごく最近のこと。作品は小さな出来事や埋もれた人々を拡大して見せるものと考えている人は、今でもきつと多い。とくに本書のように、戦争を題材にすると、あまたの体験談の一つに数えられる、「そういう人もいたのか」で終わることがある。体験を直接していない人は、特にそういう感想をもつ傾向があるように思う。

一方、体験した人は、実際はこうではなかったと表現と体験を比較するだけに終わりがち。それでいて、直接的な体験談は体験を誇張しただけのネタや語りになりやすい。大切なことは、見聞きしたり学んだりしたことも含めて体験がどう表現されているか、その表現から何が導き出されるか。

こうのは作品が陥る罠をよく知っているのだろう。あるいは、彼女自身多くの戦争物語や体験談が内容は多種多様であるにもかかわらず、ありきたりな表現で画一的な読後感ばかりを押しつけているようであるうんざりしてきたのかもしれない。だから彼女は、その罠を避けて、複雑な

感想をもたらすために緻密な作品をつくりあげた。

本書に続く「広島」と「戦争」の物語、『この世界の片隅に』（双葉社、二〇〇九）のあとがきで、実際、ここのは書いている。

わたしは死んだ事がないので、死が最悪の不幸であるのかどうかわかりません。他者になった事もないから、すべての命の尊さだの素晴らしさだのも、厳密にはわからないままかも知れません。

そのせいか、時に「誰もかれも」の「死」の数で悲劇の重さを量らねばならぬ「戦災もの」を、どうもうまく理解出来ない気がします。（あとがき）

網の目のように張り巡らせた伏線、繰り返される同じ構図、行ったり来たり複雑な時間の流れ。密度の高い作品は、読んでいるうちに、物語のこちら側、すなわち、読者である自分の内側にある何かへ読者を誘う。

ここまでは、言わずもがなの蛇足。ここからが感想。三十五ページの白紙のなかに私が見たもの。同じ体験のなかにある多様と別の体験のなかにある相似、そして、その先にある多様。どちらもこの話には書かれていない。でも、想像してしまうほかの人たちのこと。

「夕風の街」では、皆実と打越は結ばれずに話が終わる。今度は、打越が生き残った後ろめたさを背負う番。

愛する者を失い、ヒロシマという街の名前の重みと生き残る後ろめたさを受け継いだ打越は、どのように戦後を生き抜いただろう。「桜の国（二）」の遠景に登場する髪の薄くなった男の表情から、いろいろなことが想像できる。

少なくとも「心願の国」（原民喜）のような悲痛な結末ではない。物語の中のこととはいえ、それだけでもほっとする。

もし皆実が生きのびていたとしても、それで即“happily ever after”というわけではない。気持ちを受け止めたはずの打越がふとついたため息を耳にしてしまい、皆実が絶望的な気持ちになるというドラマも想像できる。そして、そのわだかまりを乗り越えて絆を強めるドラマも。

戦争体験、被爆体験と括ることができても、内容は人それぞれに違う。この物語でも皆実と母親の八月六日の行動は違う。とすれば、その受け止め方もそれぞれ違うはず。

皆実^{ミナト}は生き残ったことに後ろめたさを感じて、それが恋愛をためらわせていた。同じように後ろめたさを感じていても、ためらいより恋の喜びを先に感じる人もいるかもしれない。

恋は、するものというより、してしまうもの。そうして、戻れないところまで行つてから、本来、健全な恋愛感情を、後ろめたさを忘れていたことと、生きる喜びに囚^{とら}わらずも満たされてしまったことの二重の罪悪感を感じてしまう人もいるのではないか。

つまり、「私が忘れてしまえばすんでしまう事だった」と皆実が思ったことと同じことを、「私はどうして忘れていたのだろう」と、後になつて戦慄とともに気づく人もいるだろう。生きのびることで精一杯の生活をくぐりぬけた人には、そういう人のほうが多いかもしれない。

今年の夏、被爆六十年の特集記事のなかで、在米被爆者の記事に目がとまった。敗戦後、いろいろな経緯から渡米した人のなかには、終戦直前、広島や長崎にいたことを黙っている人も少なくないという。意図して隠してきたというよりは、語る暇もなく過^すぎしてきたというほうが実情に近いのではないか。

彼らは秘密の露見と病気の発症の二重の恐怖に怯えている。記事では触れていなかったけれど、皆実と同じような生き残った後ろめたさを抱えた人もいるに違いない。忍^{しの}び寄る病い、老いの恐怖、そして、目には見えなくても消えていない偏見。それを和らげるのは、身近な家族の理解と記事は伝えていた。

このような多重の苦悩を抱えているのは被爆遺族に限らないのではないか。秘密を隠しとおさなければいけないという切迫感、同じ病気にとりつかれているのではないかという不安、そして生き残ろうとした自分の狡猾さと、自責の念を封印して生き続けている自分の傲慢さに耐えかねる苛立ち。

そんなふう^にに幾重にも重なる苦悩を抱えている人は戦争以外の場面にもきつといる。そして、その数はおそらくは少なくないし、現代では増えてきているのではないか。彼らは白紙のページで、名づけられるときを待っている。

社会的弱者は、共通点を見つけて名前をつけることで、団結したり、制度的な救済を受けたりできる。しかし、名前は両刃の剣。もともと一人一人違うはずの体験や境遇が名前をつけることで一括りにされてしまう怖れもある。

個人の体験から抽出したはずの名前が一人歩きしはじめ、学問の用語や政策の文言になり、個人個人をくく^くり、縛るようになる。やがては

メディアの言葉、さらに流行の言葉になり、人々を分類し、区別し、切り分ける刃物になる。

そして、言葉が消費され、疲弊し、磨耗し、衰退するとき、一人一人の体験は消えていないのに、言葉は捨てられる。経験が置き去りにされる。癒えていない傷跡に、さらに切りつけられた深い傷が残る。

在米被爆者の場合、救済制度がある日本が遠いために、ヒバクシャという名前だけ重くのしかかっているようにみえる。

あるいは、こう考えることもできる。ある人々に名前がつけられるのは何か問題を抱えた人が無視できないほど多くなったから。つまり、このような場合、名前ははじめから個人を救うためではなく、集団を囲い込む目的でつけられる。この場合、名前は個人の質ではなく集団の量を表わす。

こんなことなら、名前をつけられないでいたほうがいいのではないか。

ヒバクシャ以外にも、アダルト・チルドレン、不登校、ニート、LGBT、それから、自死遺族も。

どの言葉も、社会的な弱者一人一人を守るために作られたはずなのに、いつの間にか、たくさんの人をまとめてポイと投げ入れるクズ籠になっている。名前があつて助かった人と同じくらい、名前をつけられて苦しんでいる人もいるのではないか。

読後、まだ名前のついていない感情があなたの心の深い所を突き刺します。

本書の帯にある言葉。この作品の魅力を的確に表現している。白紙のページを見て湧いてきた感情はこうして感想を書き残すことで、形が与えられ、名前がつけられる。こうのが予告したとおり、私の中に湧きあがった感情は激しいものだった。そう思える人は豊かな人生を重ねてきたという 作者の言葉を信じたい。

つけられた名前は、もう一度、白紙のページを開くときに、名前のない感情にもどる。そうして何度でも名前は白紙に戻る。言葉は名前のない感情に帰る。言葉にならない生々しい感情が、読み返すたびに湧きあがり、名前を求め。

この本は、何度も忘れ返し、何度も読み返す作品になる。そう描けている。

死者と生者のラスト・サパー、山形孝夫、朝日新聞社、二〇〇〇

2/3/2006

本を読んでいて、その本を読み終わらないうちに引用された本の方が気になってくることがある。図書館の、いつもは行かない社会問題の書棚で見つけたある本を読みながら、紹介されていた二冊の本がどうしても読みたくなった。

一冊は『絶望のきわみで』（シオラン、金井裕訳、紀伊国屋書店、一九九一）。シオランの名前ははじめて知った。気になって借りてきてみたものの、期待していたほどのめりこむ読書にはならなかった。

絶望と死の誘惑にとりつかれた青年が自分自身の極限状態の内面を描写する。こういう文章は出会い方によってこちらもとりつかれたり、どう読んでも覚めた読み方しかなかったりする。

似たような文章をむさぼるように読んでこともあるけれど、この本では表現に感心しながらも、心はなぜか奪われなかった。ただ、元の本でも引用されていた次の部分は、原著のなかでもひとときわ輝いているように感じた。

ある経験をなめたあとでは生きつづけることはできない——そんな経験というものがある。その経験のあとでは、もう何ものもどんな意味すらもちえないように思われるのだ。生の限界に達し、この危険な極限のあらゆる可能性を激烈に生きたあとでは、日常の行為や仕事は、一切の魅力を、一切の魅惑を失ってしまう。それでもなお私たちが生きつづけるとすれば、それはもつぱら、この限界なき緊張を客観化によって軽減してくれる書くことの恩恵によるのだ。創造とは、死の爪の一時的な予防である。（「もう生きられぬ」）

書くことは極限の心理に最後に残された行為、最後の藁の一本。シオランが本書を書いた二十代前半までだったら、私はむしろこの部分を見逃して、そのほかの部分に心が残っていたかもしれない。いまは絶望の描写よりも、いかにしてそれを描写する気になったかという心持ちの移り変わりが気になる。

もう一冊はある学者の自伝的エッセイ。山形孝夫は、初期キリスト教を研究してきた宗教人類学者。記録を見ると、名前を意識せずに彼の書いた聖書の図説書を読んだことがある。

山形はキリスト教の文化人類学的な起源や死生観に関心を寄せてきたらしい。このような関心から、彼は新約聖書に描かれたイエスの病氣治しの伝説に焦点をあててきた。本書では彼の研究の原点が四十年以上前の八歳のときに体験した母親との死別にあったことが明かされる。そのことに彼は、おそらく自分を守るために自分自身でも気づかないようにしてきた。そのために、そのつながりも、その事実さえ、言葉にされることはなかった。

本書のなかで山形は、初期キリスト教の雰囲気を残す砂漠の修道院に滞在した経験を通じ自分を自分たらしめている原点にもどっていく。

心の旅路は、外側ではイエスの治癒伝説と、それを生み出した古代ヘブライやギリシア世界の死生観に向かいながら、内面では幼いころに亡くした母親の面影に遡る。その大きな流れにあざなうように、宗教学者として成長していった大学時代、アメリカ留学やエジプトやレバノンでの調査、そのときの時代背景がさまざまな逸話とともに語られる。やがて宗教学の研究と自分の原体験をたどる心の旅は、ギリシアの教会での神秘的な体験を通じて一つに結ばれる。

山形がたどるキリスト教は、常識的なキリスト教のイメージとはだいぶちがう。彼が調査に向かったのは、現代のイスラムでもなく、古代文明のピラミッドでもない、初期キリスト教の面影を残すコプト教の聖地としての砂漠とナイル河。

そこで山形が見出したキリスト教は「多源的な一神教」と呼べるような姿をしている。一神教と多神教とか東洋の宗教と西洋の宗教とか、正統と異端などという区別には、何の意味もない。キリスト教という名前さえ、あとからつけた政治や学問の言葉にすぎない。人間の信仰は、もつと深く、もつと広い。ナイルからギリシアまでの地中海沿岸の人々が育んだ、人知を超えた世界との交信。

異端として切り捨てられたものに温もりを見出し、また、正統として生き残るものに厳しさを見出しながら、山形は宗教の古層に近づいていく。それは、彼自身の奥底にある信仰の古層でもある。ここでは、生きる者と死せる者が再びめぐりあう。

山形は、死者は消えてなくなるとは考えてはいない。しかしキリスト者でありながら、肉体の復活を信じてはいないと断言する。死者は、生き残る者の心に生きている、彼はそう考えている。しかし、それ以上は謎に包まれたまま。

記憶とは何か。記憶の森の中で、死者はどのように生きつづけるのか。（「終章 ラストサパー」）

最終章を締めくくるこの問いが、本書を通じて、繰り返されている。つまり、本書を読み終えても、明確な答えが与えられるわけではない。彼のいう記憶とは覚えていることがらではない。覚えてないこと、忘れたこと、忘れたいと思っていること、そういう事柄のなかに死者が生きている。

おそらく、人間の記憶は、長い時間の篩のなかで昇華され、その一部は神話のような物語にむかって、つくりかえられてゆくであろう。そのような記憶を語れば尽きないのだが、しかし、すべての記憶がそうなのではない。

むしろ人間にとって重要なのは、長い間蓋をされたまま、意識の底に封じこめられた記憶ではないか。過剰な痛み故に、笑うことも、泣くこともできず、ただ封じこめられるしかなかった記憶ではないか。（「第一章 記憶と忘却」）

あるいは、忘れてしまいたくなるような形で別れてしまった、あるいは、去っていった人だからこそ、記憶の片隅ではなく、記憶のずっと奥底に、落ち葉に埋もれるようにして眠っている。だから、漫然と暮らしては、記憶の森を訪ね歩くことはできない。

最終章に描かれた神秘的な体験はむずかしい。私にはまったく理解できない。言葉で伝えることはできないものかもしれない。それでも、読み終えて、死者を忘れられずにいる一人の人間が、生きている死者にめぐりあうまでには、遠い旅路、深い思索、そして、長い悲嘆をめぐりぬけなければならないことはわかった。

山形の旅が長く辛いものになったのは、母との別れが自死だったから。本書の書き出しで、そのことは淡々と書かれているけれども、その一文を書くためだけでも、悲嘆に満ちた多くのため息があったことは想像に難くない。

家族の自死を経験した者が書いた文章は少ない。自死遺族は語るができない。語ることが許されていないわけではない。彼らは、自ら

語ることを禁じている。おそらくは山形も言うように、過剰な痛みの故に、無意識のうちに記憶を封じこめ、語ることだけでなく、思い出すことさえ止めているから。

悲しみを言葉で表わすことは、臨床心理学においても有益なこととされていると聞く。だから最近では、悲しみや、トラウマを言葉にして語ることが積極的に行われている。

確かにトラウマは吐き出すことで一時的な解放感を得られるかもしれない。しかし目的は忘れてしまうことではない。悲痛な体験を自分の身体に埋め込み、同時に同じ時代に生きるほかの人々と、自分のあとに生きていく人たちに理解してもらうためには、冷静で熟慮した表現も必要ではないだろうか。去っていった人たちの無念を伝えていくためにはなおさら、感情的に言葉つぶてを投げていくだけでは不十分だろう。

日本では、いやおそらく世界のどこでも、自死の文学はあっても自死遺族のその後の人生を描いた作品は少ない。最近では、不幸なことに自死の件数が増加する一方、臨床医学の制度が定着しつつあるために、体験談こそ増えているけれど、体験を思想へ昇華させた作品を、私はなかなか見つけられないでいる。

一つ、これまでの読書から思い当たるのは森山啓『谷間の女たち』（新潮社、一九八九）。戦前にプロレタリア詩人として出発した作家が、八十歳を過ぎて書いたこの作品は、老いをまったく感じさせない青年のような瑞々しい文章で、幼い頃の原体験をふりかえる。

森山もまた、封印された記憶に形を与えるために、長い長い時間をかけた。

森山と山形は、十歳になる前に母親を自死で失くしている。その経験を深めた彼らの作品に現われた彼らの自死の受け止め方にも共通点がある。

精神分析や歴史背景など、大人になった自分の知識によって自死の原因を探求する、しかし原因の探求を通じて何らかの解答を得られても、それをもって自分を含めた周囲の者や自死をした本人も責めない、つまり自死の原因を外部の要因だけでも本人の意思だけでも決めつけない、故人と二人きりで過ごした時間や、二人の間だけに交わされた言葉を大切にする、そして、これらのことを何度でも反芻し、その都度、自分の置かれた環境や時代のなかで、見つめなおす。

要するに、自死で亡くなった人を責めるでもなく、悲しむばかりでもなく、自分の心のなかに生きつづける影として大切にしている点で、

二人の作品は共通している。

こうした心理的な作業は、十分に自覚的ではない部分も少なくないし、自死の原因がわからないがゆえに繰り返され、堂々めぐりになっているかもしれない。もう一つ、二つの作品に特徴的な共通点は、自死についての思索は孤独な独白になっていること。『死者と生者のラスト・サパー』では、調査をした砂漠に隠遁する修道士や、研究にヒントを与えてくれる友人、訪れた土地の人々との交流も綴られている。しかし、母親の追想は、父親や兄弟とさえ、共有されない。

本書のなかでも、誰も聴くことのなかった秘密の告白を聴く人が、たった一人いる。その人は、おそらくイエスがそうしたように、励ましたり慰めたりするのではなく、静かに傍らに座り食事をともにした。心に深い傷を負った人に対してはこのような態度が求められることも、最近では広く知られている。

山形が学問的に探求しようとした「治癒神イエス」は、ヒポクラテスのように外科手術で病気を治す神ではない。不治の病をはじめ、さまざまな理由で社会に見放され、生きていることに「一切の魅力を、一切の魅惑を失って」しまった人々を、励ますでもなく、慰めるでもなく、ただ、彼らの声にならない声を聴く人。遠藤周作の描いた「同伴者イエス」の姿にも、よく似ている。

家族の自死体験は、誰とも話し合うことができない。なぜ、言葉にすることができないのか。それは、生き残った者は、生き残った意味を考えれば考えるほど、立ち去った者が言い尽くせなかった言葉の前に、沈黙するほかないから。

死者の胸のうちの、まるで呟きの反復でしかないような、あるいは、言い尽くすことのできない懐かしい溢れるおもいを死者たちは語る。生者は聴く。生者の心の水平線の彼方に、破片のように残っている物語の、ひとつひとつの空白を埋めるために聴く。死者の呟きに、生者はどのように答えればよいのか……。〔「終章 死者のよみがえり」〕

生き残った者はひとり、死者と交わせる言葉を、かつて交わした言葉を頼りに探しつづける。死者との孤独な默契、と山形は呼んでいる。

孤独を強いる体験が、孤独を通じて死と生についての思索を促す。そのような促しに導かれ、孤愁と悲嘆と絶望に耐えながら、この作品は

書かれたのだろう。

『死者と生者のラスト・サパー』は『谷間の女たち』（森山啓）に続いてようやく見つけた「自死遺族の文学」と呼べる作品。

二つの作品はいずれも、長い年月をかけて封印された記憶の蓋を溶かして書きあげられた。

なぜ長い時間が必要なのか。それは記憶の封印を溶かすために、思索と表現が熱く深いものでなければならぬから。

忘却にたいする記憶の闘いだけが、人間の魂に深みをあたえていくのだ。（「第一章 記憶と忘却」）

記憶の戦いが人間の魂に深みをもたらす。そして、魂の深みが記憶の封印を、それがどれほど強固で重厚であつても、おもむろに溶かす。これから先、生きていくことに何の意味もないと思うような出来事を体験した彼らにとっては、書くという行為が記憶の戦いになった。

その記憶の戦いを、その悲嘆にくれてつぶやく声を、誰も聴くことがなかったとしても、いつかこうして読まれる日を、書かれた文章は、書き手の代りに待ちつづけてくれる。

5/12/2012追記

『死者と生者のラスト・サパー』が復刊された。あとがきが追記されている。著者は被災地にゆかりもある。

本書の復刊を望んだ人も少なくなつただろう。

本書に書かれている「死者の記憶」とは被災、あるいはより一般的に「喪失」してから何十年もあとも残る「死者との默契」。不幸にもそれに共感することができず読者は、この先、十年後、二十年後にも、森有正の言葉を借りれば「祈祷書のように」本書を読み返すことだろう。

藤村随筆集、十川信介編、岩波文庫、一九八九

2/17/2006

『死者と生者のラスト・サパー』（山形孝夫）を読み、感想を書いた。感想のなかに『谷間の女たち』（森山啓）のことを書いた。それで森山啓のことを思い出し、図書館で借りてきて再読した。

森山啓を読んでいたら、今度は島崎藤村を読みなおしたくなってきた。森山の文章を読んでいると大正時代の文学青年が明治時代の文学をどのように読み、心酔していたかが伝わる。藤村は、文学史に残る文豪ではまだなくて、同時代の生きている作家だった。

森山は、藤村や透谷を「大先輩」と呼んでいる。親しみを込めた呼び方には、同時に、彼らの志を受け継ごうという森山の文学者としての決意を感じる。森山は、藤村のなかに自分の気質や境遇と似たものを感じ取っていたのだろう。

藤村の随筆は二年前全集で読んだ。面白いところもあれば、少し古めかしく感じるところもあり、今の時代ではあまり読まれないのではと思っていたところ、古書店で文庫を見つけた。驚きながらもうれしくなり、すぐ手に入れた。

森山啓にとって島崎藤村が大先輩だったように、藤村にとっては、北村透谷が大先輩だった。随筆の選集でも透谷を回想する文章が印象に残る。全集で読んだときもそうだった。本書では、さらに二葉亭四迷、斎藤緑雨、芥川龍之介、有島武郎ら、いずれも文学を志しながらも、病気や貧しさや、得体の知れない暗闇にとらわれ斃れていった人たちへ藤村が送った追悼文も集められている。

透谷の死が、藤村が抱いていた文学への志を決定的にしたと言っても言い過ぎではないだろうし、また後になって詩から散文へ表現方法を転じたことにも、透谷の死をどう受け止め、表現するかという内面的な問題が影響していたように思う。

新生は言いやすい。しかしながら、誰か容易く「新生」に到り得たと思うであろう。北村透谷君は「心機妙変」を説いた人であった。

そしてその最後は悲惨な死であった。「新生」を明るいのとばかり思うのは間違いだ。見よ、多くの光景はむしろ暗黒にして、かつ惨憺たるものである。（「新生」『新片町より』、一九〇九）

この断章は小説『新生』が書かれるより前に書かれている。「新生」はその言葉を題名にする作品を書く前に、またそれを書くきっかけになったといわれる事件より前から、藤村のなかでは重みをもった概念だったことがわかる。そしてその重みは透谷の死に由来していたことも、この断章から読み取れる。

新しく生きる。何から新しく生きるのか。悲しみから、自分の弱さから、古い時代、古い制度から。やがて「新生」は、重層的で多面的な意味をもち、藤村の作品を貫くことになる。「新生」は明るいものではないかもしれない。それでも、「新生」を信じ、それに賭けるしかない。「おそらく彼の生涯は、彼が自分の鬱屈した油濃い体質を克服し、簡素、平俗にいたろうとする苦闘の連続であった」と解説には書かれている。私には、もうすこし具体的な課題が藤村にはあったような気がする。

人生から自ら立ち去った者を悼むエッセイを読んでいると、藤村の文学人生は、自死した人を慈しみ、許しながらも、なお自死を肯定せず、自らも死に引き寄せられながらもその誘惑に抗い、生きることを肯定しつづける登攀の連続だったように思われてくる。

「北村透谷二十七回忌に」では、二十五年以上前にあった尊敬する先達の死を悼みつつも、彼が選ばざるをえなかった選択を批判し、そのうえでなお、その思想に誠実さと新しさを積極的に認めようとしている。

藤村は、自分の詩に対する「否定の悩みではなく、肯定の苦に巣立ったもの」という評価を喜んで受けいれている（「春を待ちつつ」）。「弱いのが決して恥ではない。その弱さに徹し得ないのが恥だ。」という断章も、そのような肯定するための苦闘から生れた言葉の一つと読むことができる。

ところで島崎藤村は、ジャン・ジャック・ルソーを「多くのエライ人の中で、彼は最も吾儕に近い叔父さん」と呼んでいた（「ルウソオの懺悔」中に見出したる自己）『新片町より』『藤村全集 第六巻』、筑摩書房、一九六七）。昔、遠い国にいた偉人ではない。たとえそれが作品を通じてであつても、自分だけに生きる知恵をこっそり語りかけてくれる親しい先達。

私にとって、森山啓や山形孝夫は大先輩、島崎藤村は、大叔父さんにあたる人、そう思ってみたい。

第三部 土を掘る

思い出にするには あまりに重すぎるものや
忘れ去つていくほどに 軽くもないものたち

——博物館、さだまさし、一九八〇

傷口はたぶん坂道みたいさ

上りにするか下りにするか 明日決めよう

——長崎小夜曲、さだまさし、一九八二

徴候・記憶・外傷 (sign, memory, trauma)、中井久夫、みすず書房、二〇〇四

6/30/2006

痛みはその生に固有なものである。

——石原吉郎「痛み」（一九七五、『石原吉郎詩文集』）

トラウマという言葉は知っていたものの、自分の思索のなかで使うことはなかった。むしろそれを避けてきたと言っている。精神医学と、それを担う医療関係者にたいする根強い不信感が私にはある。そのせいで私には基本的な知識さえ欠けていた。精神医学と精神分析と心理学の違いすらわかっていなかった。

日常会話に流布していることに気づいていても、似た状態を示すためにこの言葉は使うことはなかった。二〇〇三年にも、二〇〇四年にも使っていない。ところが、二〇〇五年の冬には使っている。

その頃からだろうか、トラウマという言葉をきちんと知りたいと思いはじめ、ネットでも調べるようになった。そんなときに図書館の新刊棚で、『トラウマを乗りこえるためのセルフヘルプ・ガイド』（オロール・サブローセガン、白川美也子監修、山本知子訳、河出書房新社、二〇〇六）を見つけた。

この本はトラウマやPTSDと呼ばれる概念の歴史、定義、症状、さらには回復の過程までも、わかりやすく説明してくれる。ただ、想定している読者はトラウマから回復する人なので、内容は概説的で実践的。それはそれでありがたい。でも、もうすこし詳しい知識が欲しい。

そんなとき図書館で、これまで歩いたことのない精神医学の棚に中井久夫の名前を見つけた。彼の名前は『「聴く」ことの力』（鷲田清一、TBSブリタニカ、一九九九）で読んでいた。感想に名前を引いておきながら、それ以上関心をもつことはなかった。

なぜそのとき、名前を知った中井久夫の著書がすぐに手に取ろうとしなかったのか、不思議に思う一方で、いま彼の本を読むことは、これまでの読書の流れから導かれる必然の結果であるように思う。

本書は書名が示すとおり、トラウマに関する考察の集成。医学にとどまらない豊富な知識に圧倒されながら、鋭くて、それでいて温かみのある人間観に裏づけられた味わい深い文章に門外漢も次第に引き込まれていった。

わけのわからない痛みに頭を悩ませるよりは痛みは多少増すかもしれないにしても痛む場所を知ったほうがいい。本書を読み終えた直後の率直な感想。

トラウマという言葉を避けていた理由は、それはすでに使い古されて、擦り切れているように感じていたから。中井によれば、トラウマという言葉がいまの用法で使われるようになったのは第一次大戦後。アメリカではベトナム戦争後、日本では一九九五年の阪神大震災を契機に、人口に膾炙するようになったという。

普及してようやく十年程度しか経たないトラウマという言葉を、私は通俗心理学の用語くらいにしか思っていなかった。PTSDという言葉も同様に、どこか胡散臭く感じていた。専門家の外側では言葉は花のようにはかない。咲いたかと思うと瞬く間に枯れている。

本書を読んでみると、トラウマという言葉には、人間存在の基底にまでかかわる深さがあることがわかる。ここから先、気になったことをまとめながらトラウマについて考えなおしてみる。

辛い出来事があったから、時間が経つてもそれを思い出す。通俗流心理学の用語にはそんな平板で単純な意味しかない。中井によれば、トラウマはもつと複雑なもの。

外傷性障害の成立のためには、外傷は必要条件であろうが、むしろ充分条件ではなく、当人の生理的・心理的育成的、社会環境的な無数の要因が働き、そしてそれらすべてが時とともに変化するという複雑な連立方程式をなしているはずである。（「あとがき」）

それでは、トラウマとはいったいどういうものか。本書から得た知見を手がかりに、私自身の観察と考察を加えて、私なりの連立方程式を立ててみる。思い切って単純化してみても、トラウマには、すくなくとも四つの出来事が関わっている。

1. 下地。エッチングの技法で、あらかじめ版下を引つかいておくように、心の素地をざらざらにする出来事。環境的な要因や継続的な状況。これ自体は傷ではない。むしろ記憶の襞といったほうがいい。中井は索引という言葉をあてる。下地に新しい出来事が降り注いでいく。索引に参照先が増える。襞の形によって、何が記憶されるかわ変わる。それが積み重なり記憶の地層となる。積み重なった文様を、個性と呼ぶ人もいる。

2. 衝撃、あるいは断層。ざらついた素地に積もった記憶をかきむしる出来事。素地がむき出しになる。衝撃を抑えるため精神は緊張し、身体は硬直する。他のことを考える余裕がなくなる分、目の前の課題には集中的に取り組む。だから表面的にはこの時期、生真面目だったり努力家だったりして、世間の目からは優秀で有益な人間と映ることもある。こうして感情は押さえ込まれ発露は遅延される。この期間に再び衝撃が加えられると、硬直している表面では何も感じていないように見えても、衝撃はさらに奥深くまで伝わる。

3. 弛緩。外傷をもたらず状況が終了し、ある時間が経過すると、緊張が解けてくる。あるいは、真面目に集中し何かに取り組んだ結果、世俗的な成功を果たして、経済的・精神的・時間的な余裕を確保する。成功した経営者や政治家、芸術家などが晩年になって幼少期の悲惨な体験を語りだすことはよくある。事態に距離を置くと、はつきり見えてくる。衝撃に反応した硬直はそう長く続かない。長く続き過ぎるようなことがあれば、外傷ではすまなくなり人格全体が破綻する。中井が引くフロイトの言葉を借りれば、外傷神経症ではなく人格神経症に陥る。

4. 一撃、またはトリガー。弛緩した、やわらかい状態に突き刺す一撃。必ずしも強い衝撃と限らない。日常生活のありふれた出来事が、梃子のように衝撃に働きかけて記憶の地層全体を転覆する。記憶は混乱する。ある程度層をなしていた記憶は衝撃を亀裂にして入り混じる。直接知覚されるのは、意外にも下地のほうであったりする。衝撃の記憶だけではなく、衝撃以前の出来事が断片的に甦る。この記憶の地層に走る亀裂が心的外傷、トラウマと呼ばれる。

そしてその亀裂が日々の生活のなかで受ける小さな衝撃を受けて活断層となり、精神と身体を震動させることから痛みが生じる。

災害にあったたくさんの人の中でもそれぞれ症状が違うことから、トラウマが複雑な連立方程式であることがわかる。トラウマの症状の有無や相違は、人間の強さ弱さを示すのではなく、個人個人の環境や性質が異なることを示している。

そこに治療の難しさもあるのだろう。どこを対象に治療するのかという点からして容易でない。下地のざらつきを箒で掃いてしまうようなことはできない。それは個性の土壌だから。そうかといって、日常のさまざまな起伏から逃げまわってもいられない。忘れるだけでは、断層はそのまま。地震がいつ起きて崩れるか、わからないから。

たぶん、精神医学に対する私の不信感の一つは、説明という点にある。ある人がある症状に苦しんでいる。精神医学は、同じような症状をもつ人にある共通性に目をつけて症状を説明し、病名を告げる。この説明と病名が、実はトラウマ患者にとっては受け容れ難い。

説明と病名はこういうことは他の人にも起きていることと患者に教える。「苦しんでいるのはお前だけではない」。ところが、トラウマをもっている人にとっては、トラウマこそその人固有の体験であり、本来、説明できないもの。それを他人に鮮やかに説明されてしまうことは、自分に固有性がないものとして扱われているように感じられてしまう。

多くの人々に共通するように見える症状も、本人にしてみれば、自分なりに精一杯試行錯誤の末に下した苦渋の選択かもしれない。それを当然の反応と結論されると、個人としての思考や判断に意味がないように思う。

トラウマをもつ人は、自分は人間として異常かもしれないという不安を持つ一方、そういう不安をもたらした経験が自分を自分たらしめているとも思い込んでいる。そこでは、普遍性の危機と固有性の根拠が同じところに根を下ろしている。

健康な人のなかでは、普遍性と固有性が安定している。人類の一人でありながら、他人とは違う何者か、「自分」であることが同時に肯定されている。超健康な人の中では固有性の肯定が普遍性を凌駕してしまうのだろう。そこから、たとえば、選民思想などが生れる。

芸術家は自分の存在が世界で唯一無二であるという思いが「適度に」強く、その唯一無二の感性を表現に変えられる人、と言えるかもしれない。

ところで、別の文章で、上に書いたことと似たことを中井が書いているところを見つけた。

われわれが自分をどうみるか、それには二つの面があります。ひとつは“one of them”（大勢の中のひとり）としての自分であり（中略）、もうひとつは、世界の中心としての自分です。（中略）一般の精神医学者はどちらかという「one of themとしての自分」を重

視しているようですが、私は、同時に「世界の中心としての自分」とのつり合いがとれていることが精神的に健康である一つの基礎条件と考えています。この「つり合いをとる」ということには微妙な困難があります。（「思春期における精神病および類似状態」（一九七九）『「思春期を考える」ことについて』、ちくま学芸文庫、二〇一一）

自分の読み方が間違っただけではなかったように安心した。

閑話休題。トラウマは意識されない。意識して盛んに語るのとはトラウマではない。自分は外傷患者ではないと思いたがるのが外傷患者の大きな特徴。一言で言えば、トラウマは「語りえないもの」。

外傷的事態は、しばしば「語りえないものをあえて語る」ために、ストーリーは、一般に、現像中の写真のように、もやもやとしたものか少しづつ形をとってくるが多い。（「トラウマとその治療経験——外傷性障害私見」）

もやもやとしたものを言葉で物語に仕立て、納得することが外傷の治療。従来の精神医学はそう考えていた。ところが中井は、そうは考えていない。このあたりに臨床科医でありながら、「健常」と「回復」を絶対視しない、懐の広さを感じる。言葉を換えれば、中井が目指すのは「何とか暮らしていけること」、医学で言うところの「寛解」であり「完治」ではない。

敢えて言えば、言語的な語りとして自己史を統一することは絶対的に必要ではなく、また必ずしも有益でもない。むしろメタ記憶の総体の連続感をほぼ満足できる程度に維持する、あるいは修復することが現実的な目標であり、ある意味ではより高次の目標ではないだろうか。（「発達の記憶論」）

語りえないものは語りえないままであっても構わない。ただ、日常生活や精神状態を脅かすことがないように手なづけておけばいい。

こういう考え方はトラウマを自分自身の拠りどころと考えている人には受け容れやすいだろう。同時にこうした考え方は、そもそも外傷は

治さなければいけない「傷」という考え方からはみ出していく。

中井によれば、心的外傷は病的な症状を示すものであっても本質的には生理的現象。つまり、問題は症状の有無ではなく、程度にある。だからそれを解消してしまうことは、かえって人間性に反する。

外傷性関連障害の症状は薬があまり効きません。統合失調症の症状が消えても残ります。二つの出所は別個なのでしよう。もつとも、記憶がそうそう薬で消えないところに人間の尊厳があると私は思います。（「外傷神経症の発生とその治療の試み」）

確かに悲惨な出来事はトラウマをもたらすけど、記憶の地層が作られるメカニズムは日々また年々、同じように繰り返されている。朝刊で読んだ記事が昼食の話題になり夕食の材料になることもあるし、幼い頃にしていた楽器やスポーツを、大人になってふとしたきっかけで思い出して、新たな気持ちで再開することもある。

傷ではないにしても、心にひっかかっていた何かが呼び起こされ、新しい経験を生み出すことは、けっして珍しいことではない。

トラウマをもつと、その出来事に関連する物や場所を避けるようになる。ところが、場所の回避行動は、一番最後まで残るのに一番自覚が少ないとも書かれている。これはなぜか。場所を回避せずに、それどころか意識せずともそこへ足を向けてしまうことさえあるのは、ある種の精神的な自傷行為ではないだろうか。

記憶のよみがえり、いわゆる「フラッシュバック」は五感のうちのどれか一つに触れる些細なことでも引き起こされる。場所は五感全てに関わる。つまり、場所はトラウマの記憶ではなく、トラウマの体験そのもの、そのときの自分そのものを蘇らせる。

自傷は傷つけることで自分の存在を確かめる行為と聞いたことがある。トラウマをもつ人は、その出来事は自分を傷つけたと同時に自分を形作る土台になったと思うている。だから、前回より大きな危機を感じたとき、自分の存在を確かめるために敢えてトラウマを経験した場所を訪ねてしまうのかもしれない。

それはとても危険なことかもしれない。でも、その人が存在を確かかなものにするためには、必要な、少なくとも時を選べば有効なものかも

しれない。

その「時」と、「誰と」行くかによつて、治癒の助けとなるか、かきぶたをむしることになるかが変わってくる。

トラウマは個性や自尊心の根拠、いわゆるアイデンティティを構成する。中井は、それを肯定するだけでなく、さらにトラウマは人間性の根幹に関わるとまで言う。

ある種の心的外傷は「良心」あるいは「超自我」に通じる地下通路を持つのであるまいか。阪神・淡路大震災の被害者への共感は、過去の震災、戦災の経験者に著しく、トラウマは「共感」「同情」の成長の原点となる面をも持つということができまいか。（「トラウマとその治療経験——外傷性障害私見」）

確かに、そういう一面はあるかもしれない。倫理的な判断力をもっているから、見聞きしたある出来事が許せないものと感じるのだろう。とすれば、トラウマにとつて「回復」という言葉は「忘却」と同じではないし、ましてや、どんな出来事にも何も感じない石のような心になることではない。

痛みと良心というと、『ブラック・ジャック』（手塚治虫）に思い出す話がある。「第二〇四話 消え去った音」（新書十七、文庫十四、一九七八）。航空騒音に苦しむ男は自傷行為を繰り返す。それを止めるため、ブラック・ジャックは大きな音に反応しない鼓膜をつけてやる。ところが男は、自分だけが騒音に反応しないことに困惑する。一方、空港側はすべての住民に「感じない鼓膜」をつけることを画策する。結局、男は、公害と苦痛をほかの住民と共有するため、痛む鼓膜をつけなおしてもらう。

痛みを通じて自分の存在を確かめ、良心のありかを確かめようとするこの男が選んだ道も、精神的な自傷行為、痛みを喜んで引き受けるという意味では、一種のマゾヒズムと言える。

「聞こえない鼓膜」「感じない心」をつけさせようとする人は少なくない。しかし、感じないようにすることは問題の解決にはならない。痛みは、ほんとうの解決を模索する動機付けになることも、この話からわかる。

トラウマにとって、弛緩という時を経ていることも重要。ともかく苦しい状況は過ぎ去り、生きのびている。冷静に考えれば、それだけで十分に幸せなこと。それを肯定することから始めなければ、内巻きの螺旋階段を転がり落ちつづけることになる。

トラウマと良心は地下水路でつながっていると指摘する一方、中井はトラウマからの回復はその出来事についての記憶が「一つの挿話」になり、「しばしば無意味で退屈なもの」になることも言う（「トラウマとその治療経験——外傷性障害私見」）。これは矛盾していないか。

記憶が退屈なものになってしまったら、痛みによって刺激されていた良心の働きもなくなる。もちろん、その刺激が強すぎれば日常生活も脅かされる。騒音のなかに戻った男は、同じことを繰り返さないためには、痛みを耐え、怒りを燃やし、なおかつ、自分を守る必要がある。

どのようにして忘れることなく、そうかといって自分を見失うようなことを避けつつ、ふだんの暮らしを守り、良心にまでつながっているかもしれない自分らしさを大切にできるか。

「傷を恐れてはいけない」

「傷に支配されてはいけない」

「傷を育てていくこと」

『裏庭』（梨木香歩）の奥に住む魔女の言葉を思い出す。はじまりは、もう一度ここから。

それにしても、傷を育てるとは少し奇妙な言い方。確かに背丈を測った「柱のキズ」という言葉はあるけれど、この場合、育つのは傷ではない。

索引の重要項目で心の地層を支えている部分でもあり、良心ともつながっていて、忘れ去るのではなく育てていかなければならないもの。その道筋は、痛みを伴わない記憶と重なる部分も少なくない。

そういうものは、傷という治したり消えていくことを期待する言葉では表わしきれないのではないか。とりわけ成人前の出来事は、あとで刻まれた傷という呼び名よりも、最初からあるものなのだから、原型、もしくは思想史の術語を借りて古層という名前のほうが実感に近い。

人を苦しめる病的な状態を対象にする医学の世界ではともかく、日常ではもう少し穏やかな言葉がほしい。

例えば、種という言葉はどうだろう。心の底に知らない間に埋め込まれた種子。この比喻ならば、芽を出すときの苦しみや、花を咲かせるまでに育てる苦勞も込められる。芽を出す種もあれば、土深く眠ったままの種もある。

種によっては甘い実にもなれば、毒の花にもなる。どう育つかは、水の遣り方と土の手入れ次第。種という言葉は、心は庭という喩えにも似合う。

中井の文章には独特のリズムがある。短い文で具体的な事例を重ねた後、少し長い文で抽象論をまとめる。また、ときおり本筋から離れて箴言めいた一文を差し込む。

これまでの読書では、松田道雄や岡本夏木にどこか共通点を感じる。

三人に共通するのはまず医学。年齢をみると松田と岡本のあいだに二十年の差があり、さらに中井は十年若い。三十年の差はあるものの、一九三四年生まれの中井は戦前の教育を受けているので、言葉づかいに何らかの共通点があるかもしれない。一九三四年生れは終戦の年に十一歳。戦前、戦争の体験をいわゆる成人型記憶にできたのは、ここまでではないか。周囲を見ていて、そう思うことがある。

ほかに、先進国、大国以外の外国語の知識という共通点がある。中井はギリシア語、オランダ語、松田はロシア語、そして岡本はインドネシア語。これは彼らに共通する反骨精神や小さい者、弱い者たちへの温かい眼差しに影響を与えているのではないだろうか。

もう一つ、彼らの共通点は関西人であること。いわゆる標準語で書いてはいても、緩急巧みなリズムには関西弁も何か関係しているような気がする。この点は、医者ではない鷺田清一や、東京から移り住んだ鶴見俊輔にも感じられる。

中井のトラウマ理論を読んでいてありがたいと思うことは、トラウマやその症状を「悪」とみなしていないこと。トラウマは、本質的には病理でないにしても、病的な症状を現わす。つまり、トラウマをもつ人はさまざまな症状に困っている。

ところが、トラウマを俗流に振り回す人、とりわけ人文科学の世界でこの言葉を乱用する人々のなかには、トラウマや、その症状を本人の弱さのようにとらえて責め立てる人もいる。重い病気を抱えている人は、その名前を聞くだけで重苦しい気持ちになるものなのに。

そのことに気づかず、多くの人を苦しめている言葉を嬉々として振り回し、何かを説明した気になっているようなデリカシーのない文章も

見かける。

たとえば、解離。解離は、直視できない痛みからの一時的な退避であり、それをもたらした現実そのものからの逃避ではない。

解離もおそらく、元来は病理的というよりも生理的機構であろう。(中略)レイプの際に解離を起こすことも、その場の生命を救うためには合目的であり、「ひとごと」として済ますことは当面の苦痛をいくらか耐えやすくする。ただ、当面のための配慮しかしないのは、生命的なものの限界である。意識と記憶を持つ人間ゆえの苦しみが後に残る。(「あとがき」)

現実から逃れられないという恐怖感と、おそらくはそれに立ち向かわなければならぬという正義感があるからこそ、解離は起こる。たとえば、行動としては現実逃避に見えたとしても、解離を起こしている人に向かって、現実逃避をするなど言ったところで何の解決にもならない。必要なのは、当面の配慮のあとに残る苦悩を取り除くことだろう。

精神医学の言葉はとくに慎重に扱わなければいけない。病気で困っている人を傷つけないように、それでいて病気の人を特別な存在にしないように。彼らはただ、生理的な反応が「正常」と呼ばれている人よりも激しく、鋭いだけなのかもしれないのだから。

また人文科学では、まだ言語化に過剰なこだわりがある。中井は「長期的には「語るべきか、語らざるべきか」というのは、なお一義的な答えを出せない問題だと思えます。」と述べ、トラウマ体験を言語化することを絶対視していない(「外傷神経症の発生とその治療の試み」)。加えて、「秘密を宝物のように大切にしないさい」という土居健郎の言葉も引かれている(「トラウマとその治療経験——外傷性障害私見」)。

社会科学、とくに法律の世界では、言葉で語らない者は、「権利の上に眠る者」と言われて、法の保護の外に放置されることもある。言葉は、人文・社会科学にとって、音楽にとっての音のように無いことの考えられない道具。

中井や土居の提起する「語らないでいること」は、人文・社会科学の標榜してきた言語化の原則とどう折り合いがつけられるのだろうか。「語りえぬものについては沈黙せねばならない」という断章で、すべてを解決できるわけではない。その先にきつと何かがある。

石原吉郎詩文集、佐々木幹郎解説、講談社文芸文庫、二〇〇五

11./8/2006

クルマ通勤が終わり、また毎日、電車に乗るようになった。昼休みに行く職場の近くの図書館で、大きな本を借りるのが億劫になったので文庫本の棚を見るようになった。

脈絡もなくいくつかの文庫本の背表紙を眺めていると、石原吉郎の名前に目がとまった。これまで読んだことはなかった。

石原の名前を知ったのは、たぶん『詩とことば』（荒川洋治、岩波書店、二〇〇五）。その前に読んだ荒川の本にも、石原の名前があったかもしれない。ともかく、石原の名前は荒川の文章と関連して覚えていた。

だから、石原がシベリア抑留の生存者だったことは読む前から知っていた。荒川の文章で少し興味を持って、読まないでいたのは、そのせい。体験者の直接的な言葉を私はなぜか避けている。

石原の詩やエッセイは、体験をそのまま吐き出した体験談ではない。そうかといって学問的な考察を通した冷静で客観的な記録というわけでもないし、宗教的な体験を経て別の次元に昇華された告白とも違う。

ここでは経験したことが経験したことそのまま言葉にならずに残っている。言葉にはできないような経験が、そのまま、どうしようもなく、言葉にならない言葉になってぼつぼつ噴き出している。

言葉でないような言葉が詩になり、やがてすこしずつ散文になっていく。荒川洋治は、散文を詩と対立するものと考えているけど、石原の仕事眺めると、詩と散文は相互補完的であるし、詩は散文の源泉で、散文は詩が自然に到達する姿の一つのようにも思える。

この見方は、荒川の考えとそう違ってない。詩のことは、言葉にならない言葉を通して言葉で書かれた散文を、荒川は「体験をかきけている」と非難しているのだろう。

詩とは、言葉にならない言葉。石原自身がそう考えていた。

詩における言葉はいわば沈黙を語るためのことば、「沈黙するための」ことばであるといっている。もつとも耐えがたいものを語ろうとする衝動が、このような不幸な機能を、ことばに課したと考えることができる。いわば失語の一步手前でふみとどまろうとする意志が、詩の全体をささえるのである。（「詩の定義」、一九七二）

『詩文集』の冒頭に掲げられた文章が、詩だけでなくエッセイも、石原の仕事すべてについてあてはまる。「失語と沈黙のあいだ」というエッセイもある。

詩が本来こういうものだったとは知らなかった。詩はすでにある言葉を壊してできていると思っていた。ありきたりな言葉をわざとらしくバラバラにしてみせた言葉が、店先にたくさん並んでいる。前は詩を読んでいたこともあったのに、「詩なんて」、といつの間にか思うようになっていく。

読みなれていないので詩は読みにくい。エッセイや年譜を先に読んでしまうと余計に邪念が入る。「言葉になった言葉」としてつい何かを讀みとろうとしてしまうので、なかなか「言葉にならない言葉」を感得することができない。エッセイと詩を何度か往復して、少しずつ言葉になりかけたところにある言葉がわかるような気がしてきた。

詩でも散文でもない断章も多い。ノートに無造作に書かれたこうした断章は、生前に発表されることはあまりない。詩や散文になる途上にある生々しい言葉を作品として、自ら発表していたことにも、石原の言葉に対する考え方が表れているように思う。

「葬式列車」という詩に「いつも右側は真昼で／左側は真夜中のふしぎな国」とある。私も「右側が暗く、左側が明るい」不思議な場所に立つて文章を書き残したことがある。ちょうど二年前の今日のこと。場所は横浜の大栈橋。

そんなことから不思議な親近感が芽ばえて、さらに読み進めてみると、このところ、私のなかでぐるぐるとまわって外に出てこないでいる言葉が、石原の言葉のなかでも巡回していることに気づいた。待つ、ひとり、祈る、そして、加害者でも被害者でもない〈位置〉。

確かに、言葉になって詩やエッセイに書かれている。でも、言葉は、どこにも出て行かないで、作品のなかに漂っている。独りよがりでも、どこにも届かないということではない。独りよがりにさえなれずに、言葉は留まっている。

「ゆるぎされてそこに在る」という言葉を、私はある時教会で聞いた。私はゆるぎされて、ここに在るだろうか。私には、私が「ここに在る」ことにより罰せられているとしか思えない。（「一九五六年から一九五八年までのノートから」）

「ここに在る」ことを否定的にとらえたあとで「へそこ」にいない」ことも肯定されない。そしてさらに「へそこ」に在ること」が「私の虚無」と続く。

待つということが、ただ終りを待つことになっていないか。考えることも表現することもそして、耐えるという意志さえ、「ひとり ただくずれざるのをまつだけ」（岡真史）という孤立無援（高橋和巳）の事態を、せいぜいすこし遅らせることに手を貸しているだけではないか。打開するということが考えられていない。出口のない言葉。

この考え方はたぶん間違っている。でも、それをどう否定していいのか、わからない。私は、むしろこの考えに共感している。

石原が異常な心理状態にあったのと同じように、私も危機的な状態にあるのかもしれない。それはもちろん、客観的に同等ということではない。自分の耐量に対し過剰で異常という意味で、主観的に同等ということ。

石原の言葉に、ほんとうに出口はないのか。もつと彼の言葉を読んで確かめる必要がある。私の言葉の出口を探すためにも。

検索してみると、職場近くの図書館には、全集全三巻（花神社、一九八〇）がある。六百ページを超えてただでさえ分厚い全集は、装丁は質素でも、紙が上質でとても重い。

一冊ずつ借りて持ち帰り、夜に、ひとり、読みはじめた。

線を引きながら読めるように、文庫本は買いなおした。

西田幾多郎の世界、石川県西田幾多郎記念哲学館、二〇〇四

西田幾多郎の憂鬱、小林敏明、岩波書店、二〇〇三

西田幾多郎の思想、小坂国継、講談社学術文庫、二〇〇二

5/12/2007

一人の作家や、一つの出来事、一つの主題に、突然、とりつかれるように興味をもつことがある。図書館にあるだけの本借りてきて読んでみたり、関わりのある場所へ行ってみたりする。

そういうときは、いつも、なぜ、その人物やその事に興味をもったのか、わからないまま、のめり込んでいく。読んだり調べたり、見たり聴いたりしていると、その人について、その出来事についてよくわかってくる。

そしてあるとき、なぜ、自分がそのことに興味をもちはじめたのかがわかる。つまり、こういうときはいつも、答えが先にわかり、問いのほうを後で知る。

西田幾多郎との関わりには、とくにそれがあてはまる。ふと手にした三木清の随筆で西田に興味を持ち、入門書を読み、彼の作品を読み、仕舞いには彼の生れた街まで行ってみた。

西田幾多郎に興味をもつようになったきっかけはムック『西田幾多郎―没後六十年 永遠に読み返される哲学』（河出書房新社、二〇〇五）だった。この本には、西田本人が書いた文章のほか、すでに西田について著作や論文を発表している人によるエッセイや小論が掲載されている。そのなかでも、いちばん興味を引いた文章は、「引っ込みのつかなくなった西田」（小林敏明）だった。

小林は、西田の「哲学」ではなく、西田の「思想」を対象にする。思想とは研究や作品ではない。人の生き方、人そのもの。だから彼は、伝記という思想史の世界では時代遅れとみなされるような方法で西田の思想を探る。

そのような小林の姿勢に共感しながら、西田の思想、すなわち西田幾多郎その人に近づくためには彼の書いた文章をまず自分で読む必要が

あると思ひ、小林の伝記は後回しにした。『西田幾多郎の憂鬱』を先に読んでいたら、その感想を書くことに終始して『善の研究』の感想はきつと書けなかつただろう。

『西田幾多郎の憂鬱』は、読んでみると確かに興味深いとらえ方をしていた。父親との葛藤を軸に、彼の人生に降りかかった数々の悲惨な出来事を通じて、西田の気質から彼の思想の診断する。己に対して厳しい一方、やがて文化の父親としての国家に対し、反発を裏返したように憧憬のような気持ちに集約されていく晩年の政治思想の分析にもなるほどと感じた。

もつとも、細かいところでは不満も残った。たとえば、次のような一文。

言うまでもなく「デル、デス、デム、デン」という定冠詞の活用変化は、今でもドイツ語初心者にとってのトラウマの対象である

この書き方は正しくないように思う。言葉を学ぶ者にとって語形変化は頭痛の種ではあつても、トラウマではない。トラウマとはそのとき感じる苦痛ではない。それは時間を経て感じるもの。もしその言葉を扱えるようになれば語形変化を苦痛と感じなくなるはずだし、もし習得を諦めていけば、語形変化自体を忘れてしまふだろう。落第した試験の記憶が蘇ることはあるかもしれない。それは語形変化と直接的には関係はない。

トラウマという語につまづいたのは、最近の気分のせいばかりではない。それは、西田幾多郎の思想の源泉でもあるから。

西田は、人生を通じて多くの死別を体験している。姉、妻、友、弟、そして息子と娘。それらの死のイメージ、また死に到る病いや戦争の苦しみが、西田の思想に影を落としていることを小林は強調する。

それに同意しながら付け加えると、西田が死や病いについての感受性を深めたのは、体験した多くの死別のなかでも、十三歳の少年時代に姉の病死に根があると私は思う。つまり、いわゆる思春期の体験が、そのあと体験される死別のたびに、悲しみの層を彼の内面に折り重ねて行ったように思われる。西田自身が、十代はじめに姉を亡くしたことが、彼の人格形成に大きな影響を与えたことを書いている。

回顧すれば、余の十四歳の頃であった、余は幼児最も親しかつた余の姉を失うたことがある、余はその時生来始めて死別のいかに悲しきかを知った。余は亡姉を思うの情に堪えず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き処に到りて、思うままに泣いた。（「我が子の死」
（一九〇七）『西田幾多郎随筆集』、上田閑照編、岩波文庫、一九九六）

また西田は、「哲学の動機は人生の悲哀でなければならぬ」とも書いている。

父親との葛藤もそうだけど、西田の思想にはいわゆる原体験という呼ばれるような幼少期から思春期の体験が、極めて重要な意味をもって
いるように思う。そんな思いをもつのは、本を読んだ感想というよりは、冬の寒い日、彼が生まれ育つた街を歩いたせいかもしれない。

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露れているのではないだろうか。

森有正は『バビロンの流れのほとりにて』（一九五七、筑摩書房、一九九九）の冒頭にこう書いた。「生命の稚い日」とはどの期間を指すのだろう。あまり小さくても事態の複雑さを理解できないし、大きければ自力で納得したり收拾したりする知恵が身についている。

個人的な体験や、読書などを通じた客観的な知識から考えると、十歳から十四歳くらいのあいだに、「生命の稚い日」があるように思う。この期間に、西田は姉を失くし、森は父を失っている。つまり、この時期に受け止めた生命のあり方が、その後が続いていく生涯にゆつくりと
顕れていくものと思われてならない。

思想とは人間そのものという考えは、西田幾多郎の考えとも合っている。言葉遣いが難解なせいもあり、西田は専門的にすぎる、術学的な哲学者とさえ思われている。でも、哲学とは本来、日常生活に根ざしているもの、そういうものでなければならぬと西田は考えていた。

記念館の壁に見つけて、書きとめて帰った彼の言葉。

我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生れるのである。（「歴史的な身体」、一九三七）、

日常というと、何か平凡で、退屈で、変わり映えのない生活という響きがあるかもしれない。しかし、西田にとって日常は平凡なものではなかった。強烈な原体験や、それに続く過酷な体験。それが彼にとつての日常だった。

西田の日常には、死別体験が基底にある。それまで当たり前のように一緒に暮らしてきた人が目の前からいなくなる。日常が突然終わる。まるで切り落とされたように日常が終わり、しかし別の日常が否応なく始まる。

切り落とされた日常のあとに、まるで違う日常がある。日常のなかに非日常があるのである。いま現在過ごしている日常こそ、不条理で非日常的な人生全体のなかにたまたまある部分的な時間に過ぎない。

だから日常は、退屈なまま続いていくどころか、いつも波乱含みである。そして、いつ終わるともしれない、もしかすると明日終わるかもしれない、という不安や緊張をつねに抱えている。

最も深く掴まなければならない日常とは、そういう性質の毎日の暮らし。

「哲学の動機は悲哀」と西田は言う。悲哀のうえに、どのような日常が重ねられようと、奥底にある悲哀そのものは変わらない。だから、常に悲哀が日常のなかにある。

西田の見方は、ひよつとすると反対だったかもしれない。日常には日常の苦しみや楽しみがある。そういう日常の出来事の奥底に根本的な悲哀は沈んでいる。日常生活に流されているのは悲哀を見出すことは難しい。でもそれをとらえなければ哲学とはいえない。思想とも言えない。そして、最も重要なことは、いなくなった人の気持ちを理解することもできないということ。

日常の底に沈んでしまった悲哀を、日常に取り戻さなければならぬ。切り落とされてしまった日常を、切り落とされていないかのように生きる。あの人が今でもここにいたら、どんな日常だったろう。

哲学の動機という言葉を私になりに言い換えると、そういうことになる。その意味では、西田の哲学は死者との対話と言ってもいいように

思う。

西田幾多郎のことを考えていると、私はよく夏目漱石のことを考える。二人はほぼ同じ時代に生まれ、まったく対照的な人生を送った。

漱石は東京に生まれ、育った家庭は幸福とは言いがたかったけれども、若い頃には中央で立身出世の道を邁進した。高校教員、大学講師、留学。そうしたいわば知識人としての頂点から離脱していく過程で、漱石は思想を深めていった。

一方、西田幾多郎は地方の片隅に生まれ、四十歳近くになるまでそこに埋もれていた。彼自身の言葉を借りれば「私は三十代は全く北国の隅に落魄していた」（「若かりし日の東圃」、一九四〇、『西田幾多郎随筆集』、岩波文庫、一九九六）。

そのあいだに東京へ出てはみたものの、選科生という冷遇された身分で図書館の閲覧さえ廊下でしければならなかった。当時の様子を回顧した文章の中で「有名な夏目漱石君は一年上の英文学にいたが」と触れている（「明治二十四、五年頃の東京大学文科大学専科」、一九四二、『西田幾多郎随筆集』）。

その後、彼は請われて京都大学へ移り、それまでに書いた論文だけで漱石は固辞した博士号を受けた。西田は、他の文章で参照されるときでも、郷里の銅像でも西田博士と呼ばれることが多い。博士という尊称は、彼の積み重ねた努力に対する人々の称賛を表わしている。

どちらがどうということではない。優劣ではない、それぞれの置かれた環境のなかで、それぞれの方法で思想を深めていった。

西田幾多郎が多くの親族を失ったように、夏目漱石も娘との死別を経験している。悲哀という言葉を通じて二人を読み比べることもできるかもしれない。

西田幾多郎は一八七〇年（明治三年）、夏目漱石はそれよりも三年前の一八六七年（慶応三年）に生まれた。夏目漱石は一九一六年（大正十六年）、第一次大戦が終わらないうちに四十九歳でこの世を去っている。一九一六年、西田幾多郎はすでに『善の研究』を弘道館から発表していたが、岩波書店から上梓するまでには、まだ五年ある。

西田幾多郎は、日中戦争や太平洋戦争が始まった後でも精力的に執筆を続け、一九四一年には昭和天皇に御進講もしている。そして彼は、敗戦の直前、一九四五年六月七日に七十五歳で亡くなった。

漱石が、昭和の戦争を見届けていたら、あるいは、西田が『善の研究』だけを上梓して早世していたら……。その「もし」には意味はない

かもしれない。そうとすれば、単なる後知恵のような見方で西田の思想を分析することにも、意味はないだろう。

記念館の売店で、古書店を探しまわっても見つからなかった『思索と体験』『続思索と体験』（岩波文庫、一九八〇）を見つけた。『善の研究』『哲学論集Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』、それに『随筆集』がセットになって記念館の特製化粧函に入っている。すこし重かったけれども、いい記念になった。

記念館のある丘を下りて、街中に点在する西田幾多郎の銅像を見てまわった。

宇ノ気から汽車に乗り、北陸本線で金沢から小松に出て、飛行機で帰京した。小松に着いたときにはすでに五時を過ぎていた。北陸へ来るたび訪ねる森山啓記念室のある市立図書館へ行く時間はなかった。

しばらく、いや、もしかすると、もう二度とここに来られないかもしれない。そう思いながらも、不思議ときみしい気持ちはしなかった。

記念日反応

2/2/2008/SAT

記念日には、日付で記憶されるものと曜日で記憶されるものがある。

二月最初の金曜日は、私にとって曜日で記憶される記念日。そのなかでも、一日が最初の金曜日にあたる年とそのつぎの年にめぐってくる金曜日の六日は、曜日と日付とあわせて忘れることができない。

何か、自分の人生を根底から変えてしまうような出来事が起きるのではないか。そんな予感がする。それは、もちろん、そういう出来事が実際に過去に、二月の最初の金曜日、それも一日と六日にあたる日にあつたから。

でも、そんな出来事は毎年のように起きるわけではない。何か起きる予感がして身構えたり、過去の出来事を隅々まで思い出そうとしてしまう精神状態は、記念日反応といつてもいい。

『烏兔の庭』を創り始めてから、二月最初の金曜日には休みをとり、思い出の場所を訪ねては、静かにもの思いにふけることを続けてきた。それができたのは、二月以外でもおだやかな気持ちでいられたから。

ところが、昨年から公私ともに多忙になり、休みをとることも、深く思い出に沈んだ時間をもつこともできなくなった。この一年は、ほとんど毎日五過ぎに起床し、十時前には目を閉じる生活を続けている。昼間の異常な緊張感と得体の知れない不安は長すぎるほどの睡眠でようやく鎮められている。

いまは何も書く気がしない。これまでの二月最初の金曜日を書いてきた文章を読み返してみても、何も書く気がしない。この文章を書いているのも、二月の一日でも二日でもない。

二月に文章を書くことは、かなりのエネルギーを消耗する。これまででも、二月の文章にやすやすと書けたものはない。日々の生活で消耗してしまう近ごろの生活では、読書や文章にまわす力がほとんど残らない。

そういう時もある。せめて、そんな時もあるということだけでも、書き残しておくことにする。

生きるかなしみ、山田太一編、ちくま文庫、一九九五

12/6/2008/SAT

職場の近くにある図書館は小さい。図書室と呼んではいけないくらい。通路もせまく、立ち読みもづらい。ここでは背表紙を眺めながら本を選ぶ楽しみがない。だから最近では、新聞の書評や広告で目に止まった本をネット経由で予約してから借りることが多くなった。

この本は例外。一番端にある文学総論の棚で書名に目がとまった。

かなしみは不幸とは違う。貧困、病気、喪失、老衰。本書に集められたエッセイでもそうした不幸なことが書かれてはいる。でも、不幸なことがすべてかなしみを生むのではない。

不幸から逃げようとしても、ますます不幸になるばかり。自分の不幸に向き合ったとき、かなしみがあらわれる。本書に編まれた文章は、どれも不幸を嘆いているのではない。自分の不幸に正面から向き合った者だけが知るかなしみを書いている。

だから「生きるかなしみ」は「人生の深み」と言いかえることもできるだろう。森有正ならば同じ心持ちを苦悩（アンゴワッス）とさらに言い換えるかもしれない。

「幸福な家族はみな似ているけれども、不幸な家族はそれぞれに違った不幸をもっている」などとよく言われる。原作は読んでいないけれどもトルストイがそう言ったらしい。本書の編者、山田太一も引用している。人にはそれぞれ違う不幸があるとすれば、それを裏返したとき、あるいはそこを突き抜けたところに、似たり寄ったりではない、その人だけが見つけられる幸福があるのではないか。

とすれば、自分に固有の不幸を見つめたときに現れるかなしみは、自分に固有の幸福への扉でもあるかもしれない。かなしみを深く感じることが幸せなこと、ということとはあり得ると私は思う。

しかし、己だけにある不幸を見つめることはやさしいことではないだろうし、見つけてしまったかなしみに耐えて生きていくことはさらにむずかしい。

本書に集められた文章は、どれも短い。しかし長さに関わらず、いずれも、かなしみと苦悩に耐え抜いた重みを感じられる。

二月最初の金曜日

2/7/2009

二月最初の金曜日には自分の人生を変えるような特別な出来事が起きる。なかでも最初の金曜日が六日にあたる年は、自分のすべてを根底から変えてしまうような出来事が起きる予感がする。そう思ってしまうのは過去のある年、いや、もうここに正確に書いておく。一九八一年の二月六日、金曜日にそういう出来事が確かにあったから。

だから、毎年、二月が近づくと今年も何か起きるかもしれないと前々から案じてしまう。金曜日が六日にあたる年にはなおさら。もつとも、一九八一年の二月六日に私の身の上で起きた出来事について真剣に考えるようになったのは、ほんの七年前のこと。

それまでの私は、あるときには忘れようとして、また忘れたふりをして、実際、まったく忘れていたときもあったし、あるときは隠そうとして、またあるときにはただただ悲しくなり、そして、あるときには、思い出すことにおびえていた。

七年前に『烏兔の庭』と題してウェブ上に文章を書きはじめてから、二月最初の金曜日には毎年、特別な思い出になるように休みをとり、思い出深い場所を訪ねて一人で歩いてきた。

そのときの私の気持ちは、「すずかけ通り三丁目」（あまんきみこ、一九六八）のなかで、松井さんのタクシーに乗って、思い出を訪ねに行った女性と同じだった。

二〇〇三年二月の第一金曜日には、鎌倉から江ノ電に乗り稲村ヶ崎で降りた。海岸に出て七里ガ浜のやわらかい砂浜を、ずっと鎌倉高校前まで歩いた。そのときはまだ七里ガ浜に西田幾多郎の歌碑があることを私は知らなかったし、すぐ近くに西田の住居が残っていることも知らなかった。彼の本も、その入門書さえまだ読んでいなかった。

その日は、小田急線の片瀬江ノ島駅で缶ビールを一本飲んで帰った。

この日のことは、すぐ文章することはできなかった。一年後の二〇〇四年の二月、一年前の感傷的な散歩のことを思い出しながら書いた。

その二〇〇四年の二月六日には、思い出深い、そして、真冬でも緑の深い学校へ行ってみた。入学試験前の春休みで静かなキャンパスには

梅の花が咲きはじめていた。雑木林の奥にある、中島知久平が終戦の日を迎えた古い屋敷跡で、前の年に一年かけて読み終えた森有正の文庫本を一冊持つて行き、ここで書かれた「暗く広い流れ」を読み返した。この日は、小川の流れる、古い武蔵野の面影を残す公園で、シングルモルト・ウイスキーの小瓶を空けた。

二〇〇五年二月は頻繁に関西へ出張していたのでどこにも行けなかった。二〇〇六年には横浜美術館で版画展を見て、それから海岸通りを歩いた。そして、ここもまた思い出深い山下公園のあたりを歩いた。

二〇〇七年と昨年、二〇〇八年は不思議なことに何をしたのか覚えていない。日記もメモも書き残していない。

思い出せないというのも理由のないことではない。二〇〇七年二月といえば、職場が変わったばかりでまだ二日め、休暇をとるところではなかった。そして、昨年の今ごろは、心身ともに憔悴していた。もう休みにして、どこかへ出かける元気もなく、文章を書く気力もなかった。今年も、あえて特別なことはせず、いつも通りの週末を過ごしている。

朝五時半には起きる。濃いめのカフェオレとトーストに、バナナを刻みヨーグルトと混ぜて朝食をすませる。髪を洗い髭を剃り、六時半に家を出る。大きめのヘッドホンは防寒にも役立つ。さだまさしのアルバム『帰去来』（一九七六）を聴く。「夕風」と「童話作家」は繰り返し。

これは今日だけの特別、つまり毎年の約束事。バスに乗らず、一つ先の駅まで三十分歩く。

定時に退社、駅で日刊ゲンダイを買い、電車で読む。バスを降り停留所の前にあるスーパーで純米酒を一本買う。七前には帰宅する。

土曜日は、遅めに起きてから自転車に乗ってS医院へ。体調と身の回りのとりとめの話聞いてもらい、いつも通り週間分の薬をもらう。週末は昼食のあとつい横になり眠ってしまう。眠れなかったり寝不足であるよりは眠れるだけ眠るほうがいい。十年以上診てもらっているS医院の先生はそう言う。その言葉に甘えて、週末の午後はたいてい昼寝をする。

子どもたちはめいめい思い思いの時間の使い方がわかりは始めてきたのか、親から離れた時間が少しずつ長くなり、それぞれ楽しそうに、また、忙しそうにしている。彼らは彼らなりに、自分の力で充実した時間を過ごしている。

週末はテレビを見る時間が長い。金曜の晩は『ドラえもん』のあとには『奥さまは魔女』、NBAのロサンゼルス・レイカーズ対ボストン・セルティックスの中継もあるので録画しておく。土曜は、夕方から『週刊こどもニュース』『IQサプリ』、そして『刑事コロンボ』。今週は

何度も見たことのある「祝砲の挽歌」だった。全話DVDで持っているのに、再放送もつい見てしまう。

こうして「いつも通り」の週末が、もう半分終わろうとしている。

二月六日の金曜日にあえて特別なことをしなかったのは、この、いまの暮らしが、ずっとあとになって振りかえれば、特別なものだったと思うことがわかっているから。

「いつも通り」と書いたけれど、こんな風に週末を過ごすようになったのは、それほど前からのことではない。この「いつも」は二年前に始まり、まだ二年しか経っていないのに、もうすぐ終わることがすでにわかっている。

三月には、また新しい暮らしが始まり、やがてそれが「いつも通り」になるだろう。いまの時点で、すでにそう予想できることは、世の中全体を見渡してみれば幸運なことに違いない。

そう、この冬、私は職を失った。正確に言えば、まだ条件闘争の最中にあり、まだ職を失ってはいないが、近々失うことはわかっている。でも幸いなことに、もう次の職は見つかっている。それがどれほどたいへんなものか、どれほど続くものなのか、まだわかっていないけれど。

二月六日が金曜日となる冬に、私は、また一つ大きなものを失った。前のときと違うのは失くしたものは取り替えることができるもので、代わりもすぐに見つけられたこと。

考えてみれば、招待状か召集令状なのかはともかく、新しい「いつも通り」を決める手紙が、今日届いたのだから、また一つ、私の人生を一変させる二月六日が増えたことになる。

一九八一年の二月に、私は、とても大きなものを失った。それと引き換えに何かを得ただろうか。何かを得たとすれば、それは、「生きるかなしみ」と名づけることのできるものだったかもしれない。「いつも通り」という言葉はそれ以来私にはもう「しばらくの間」と同じ意味でしかない。何一つ、「いつも通り」に続いていくものはないことをそのとき知ったから。

一九八一年の二月六日に私が得たものに名前をつけることはできるのかもしれない。しかし、結局のところ、その名前は私が失ったものの裏返しでしかない。しかも、あるいは、それなのに、私はあの時失ったものの名前をまだ呼ぶことができないでいる。

呼んでみたところで、誰一人、その声を聞く人はいないだろう。そんな風に思い込んでいるところに、私の心理の致命的な問題がある。

引き換えにもらえるものなど知らない。もしあるとき失うことがなかったら、人生の深みなど知らないまま生きていたほうがよかった。「生きるかなしみ」も人生の深みも、知らないですむものならば、そのままでいたかった。

私が問いたいことは、「しばらくの間」ではない「いつも通り」というもの、どんなときにも、同じように自分を支えてくれる「日常」というものはありえるのかということ。

我々の最も平凡な日常生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生れる

西田幾多郎は言った。きっと、その通りなのだろう。

「信じる」「信仰」と呼ばれる境地がそこに交差しているのかもしれない。でも、それはまさしく「いつも通り」、確信ではなく、予感でしかない。

一つの「いつも通り」、一つの「日常」が終わろうとしている。次の「いつも通り」、次の「日常」がはじまるまでの猶予期間は長くない。何か手がかりが見つけられるとは思っていない。いまの私にせめてできることがあるとすれば、この、あまりにも短かった「いつも通り」を見届けることだろう。

今日は小春日和の一日だった。あの日も、こんな風に穏やかな天気だった。だから、何も知らずに校庭でサッカーをしていた。

途中でボールをぶつけて眼鏡を壊し、あわてて家へ帰ったことを覚えている。

そこで、私は唐突にその報せを聞かされた。

奇妙な風景

9/26/2009

この夏、奇妙な光景を目にした。

大勢で墓地へ出かけて、墓石のまわりの雑草を抜き、新しい花を生け、水をかけ、線香を焚き、手を合わせた。

奇妙だったというのは、墓の前にいるあいだ、誰ひとりその墓が誰の墓なのか口にすることがなかったから。そこに眠っているはずの人はどんな人だったのか、そんなことはもちろん、その人の名前さえ、誰も口にしなかった。

この八年の間、それまで送っていた生活よりも多くの本を読み、音楽を聴き、何よりたくさん文章を書いてきたけれども、結局のところ、そんなことは何ひとつ私の身には役に立っていないことに、私は気づかされた。

いつになったら、その名前を、声に出して、呼ぶことができるのだろうか？

その異様な沈黙にかすかな憐憫を感じながらも私はやはりその雰囲気や許すことができなかった。その沈黙に追従する人も許せなかった。そして、誰より、その沈黙を破ることができずに沈黙を通した自分が許せなかった。

自分を許すことのできない存在とみることとは、自分を誰よりも優れた存在とみなすことと同じくらいに精神衛生上いい兆候とは言えない。

この夏は、ずっとこのことを考えていて、ひどく疲れてしまった。

第四部 硝子の林檎の木の下で

今は幸福をつかんだ君を

想い出にかえて時に身をゆだねながら

一人きりでも何かが見えてくる

初恋は終わらない

———初恋—HATSUKOI— 角松敏生、一九八六

ある土曜日のこと

10/16/2010

先週の土曜日、数ヶ月ぶりで昼寝をせずに一日を過ごした。体調がよく、買い物に出かけて餃子づくりの支度をした。実際に餃子を作ったのは、小学五年生になった息子。キャベツやニラのみじん切りからひき肉をこねて、合間に米をとぐことまでほとんど一人でやってくれた。餃子を皮につつむ頃には娘も二階から下りてきた。私はオフコースの古い曲を聴きながら缶ビールを呑んでいた。それはとても幸せで、同時に、とても悲しいひとときだった。

心の底から悲しいと思えることが幸せ

幸福は、私にはそういう形でしか現れないものなのだろう。

日本人の死生観を読む——明治武士道から「おくりびと」へ、島蘭進、朝日新聞出版、二〇二二

3/18/2012

著者は宗教学者。日本では、宗教を信じている人は多くないのに、霊魂の存在を信じている人は意外に多いと本書で島蘭は指摘している。

私はどうか。信じたとは思っていても、心霊体験もないので、霊魂の存在を信じていることができない。

さて、本書の主題である死生観。一口に死生観と言っても、三つの視点がある。

一つめ。自分の死に対する考え方。自分が死んだら、自分という存在はどうなるのか、という問い。二つめ。ある共同体で死はどのように受け止められ、死が生き残った人たちにどのように伝えられ、受け継がれているか、という問い。三つめ。身近な人の死をどう受け止めるか、という問い。

本書の構成を見ると、武士道の追究や、がんを告知された宗教学者の自問は一つめの死生観。柳田邦男や折口信夫の民俗学研究は二つめ。三つめの死生観は吉田満を取り上げた章にあたる。

本書は通史的な見方をする一方、死生観の視点については三種類が混在しているので、全体としてのまとまりはわかりづらい。本書はもともと入門書だから、それでいいのかもしれない。それぞれが興味をもった視点に読書や考察を深めていけばよいのだろう。

私が興味をもつのは、三つめの死生観。吉田満にとっての特攻隊の仲間、森有正にとっての父と長女、石原吉郎にとっての収容所の仲間、山口瞳にとっての幼い頃の友人、森山啓や山形孝夫にとっての母親。西田幾多郎にとっての姉と息子。これまでの読書は、身近な人の死別体験を書いた人の作品が少なくない。

私がキリスト教に関心をもっているのも、イエスの教えより、イエスの死を受け止め、生涯をかけてイエスの遺志を語り継ごうとした使徒たちの思いを知りたいから。

第一の死生観、すなわち、自分が死んだらどうなるかという問いに対し迷いはない。死んでしまえば私が意識している「私」も、「私」と思っている私もなくなるのだろう。私がすでに生まれたときの記憶を失っているように、いま現在の記憶も存在しているという意識そのものも

失われるのだろう。そう思っているし、そう期待している。

霊魂があるとすれば、死んだ人はどこへ行くのか、霊魂はどうなるのか。「風になって見守っている」とか「心のなかで生き続けている」など、最近ではよく言われている。

もしも、死者の霊魂が自分の心のなかに宿るといふのなら、故人がかかえていた怒りや悔しき、成し遂げられなかった夢や無念さも一緒に受け継ぐことになる。それを引き受けなければ「心のなかにいる」とは言えない。自分に都合のよい思い出だけが心に残っているのであれば、それは死者ではない。偶像というものだろう。そこからは独善的な感傷しか生まれえない。

死者の思いを受け継ぐということは、簡単なことではない。もはや語りかけることのない死者の思いを過剰に受け止めてしまえば自滅してしまう。かといって忘れてしまえば——忘れることができるとしても——遺志は受け継がれることがない。

私はどうか。死者の思いを受け止め、引き継ぐことができるのか。

そんな段階に届いているとはとても思えない。

私はまだその事実を受け入れることさえできていないのだから。

だから、亡霊にさえ会うことができないのだろう。

働きすぎに斃れて——過労死・過労自殺の語る労働史、熊沢誠、岩波書店、二〇一〇

9/15/2012

苦く重い読書だった。そうなることはわかっていたのに、本書を手を取ったのは、やはりこの問題に対し私は潜在的に関心をもっているのだろう。多くの事例を詳細に紹介し、著者は「無念の人びと」の声なき声を聴くことを読者に求める。思いがけずに手に取り、読みはじめてはみたものの、壮絶で悲惨で、また憤懣やるかたない気持ちにさせる事例のすべてを読むことはできなかった。

列挙された事例の中で「富士銀行一般職の過労死」（一九八九）と「電通社員の過労自殺」（一九八一）はよく覚えている。やはり特別に意識をしなくても、こうした事件の記事を目に留め記憶にとどめている。事務社員を過労死させるまで働かせるとは、一体どんな会社だろう。それが日本の大企業の実態なのか。この国でサラリーマンになるということは、そういう世界で生きていくことなのか。当時、学生だった私はとまどった。

そうした事件をいくつか知ることとなり、始めるまえから私は企業労働に絶望していた。かといって、サラリーマン以外の職業もいくつか試してみてもみたものの、いずれもうまくいかず、結局、同級生からはほとんど周回遅れとなった二十代の終わりに私は賃金労働者になった。

著者が繰り返し説く「あれは私の体験だったのだ、私の身の内に起こったかもしれないことだったのだ」という言葉に励まされて、同時に問いつめられるようにして、なんとか読み終えた。著者の言葉が響いたのは、そう思う出来事が少なくとも、これまでに二度あったから。

一度めは学校を出て、会社員になりたての夏前。大学の同級生が亡くなった。過労だったのかいじめだったのか、わからない。ただ失恋のような私生活上のことではなく、会社での出来事が原因ということは確からしいと聞いた。

入社してまだ三月余り。その短い時間に一人が壊れてしまうようなことが起きた、らしい。どんな出来事が、わずか三ヶ月で人を壊してしまうのだろうか。その頃、私はまだ暢気に関西にある工場で製造メーカーのイロハを教わっていた。東京に本配属が決まって出した葉書は間に合わなかった。

この出来事の後、しばらくして、ひどく混乱した私はよく考えることもなく、ほとんど誰にも相談せずに逃げ出すように会社を辞めた。

周囲から見れば唐突で、奇妙な行動に見えただろう。もつともらしい言い訳はしていても、いま振り返れば完全に自分を見失った突発的な行動だった。当時の私は、「次は自分かもしれない」という脅迫観念に過剰なほどに反応していた。

二度目はごく最近、二年くらい前のこと。七人しかいない会社で二人が退社し、社歴が一番長い私がとりあえずの代表代行を引き受けた。日常の業務に加えて、経理や労務など会社経営に関わる業務、さらに増員のための面接……仕事量もストレスも一気に増加した。

もともとストレスに対する耐性も許容量も低い私は、すぐにパンク寸前になった。ある日、家でしなければならぬことを数えながら帰宅した途端、号泣し暴れ出した。しばらく休んで落ち着いた後、とりあえずどうしても終わらせなければいけない宿題だけは真夜中に済ませた。

このとき、思い知らされたのは、自分の限界は思った以上に低いところにあること、そして一度限界に近づいていくと手に負えない速度で転げ落ちていくこと。制御できない自分の感情に出会い、恐ろしくなった。あのとき誰もそばにいなかったら、いま、こうして文章を書いている私はいなかったかもしれない。

とても楽観的にはなれない状況のなかで、労働者に向けた著者の提案。

(前略) 私たちはついには、「自分と家族の生活のため」と「会社の仕事のため」とを峻別できる労働者像はいかに形成可能かと問うことを求められよう。

いま私には、周到的な発想をもってこの問いに対する十分の回答を用意する余力はない。しかし、旧著での表現を借りてさしあたり一歩だけ具体化するならば、形成されるべき労働者像はおそらく、価値意識としては、自分にとってかけがえのないなにかに執着する「個人主義」を護持しながら、生活を守る方法としては、競争のなかの個人的成功よりは社会保障の充実や労働運動の強化を重視する「集団主義」による——そうした生きざまの人間像であろう。(終章 過労死・過労自殺をめぐる責任の所在 4節 過労死・過労自殺の労働者像)

個人主義の意識をもちながら労働者という集団で協働する。これはむずかしい。集団であり組織でもある「敵」と戦うためには、こちらも

組織化しなければならぬのか。対峙するために作られた組織があらたな抑圧を生むことはないのか。現に、過労死・過労自殺の多くの事例で組合は被害者を守るどころか、会社との関係を重視し、被害者を孤立させている。

孤立した被害者が企業と戦うために弁護士や同じ境遇の人びとが連帯する。確かにそうしなければ、戦うことはできない。それはわかる。でも、戦うために最初から「労働運動を強化」するための組織が必要とは、私には思われない。

まっさきに必要なことは、一人一人が「過労死・過労自殺」をしないように心がけること。つまり、働きすぎないように自分の労働生活を見直すこと。それもやさしいことではない。残業が染み付いた習慣になっている職場で一人だけ定時退社することは簡単ではない。でも、「一人」がはじめなければ、「多く」が変わることはさらさない。

月曜の祝日を増やしたところで、働き方にすぐ大きな変化が生じるわけではない。組織の運動や法律ではなく「一人」のはたらきかけからはじまらなければならない。

がんばることは大切。でも、がんばりすぎない、がんばることをしない、がんばらないことをがんばることも大切かもしれない。そうすることで、ほかの人もがんばりすぎないようにされるかもしれない。

同時多発テロ事件の後、米国は真先に報復の対象とする国と組織を名指しした。そうした国も組織も確かにあつたかもしれない。しかし、首謀者と言われた人が消された今でも続いているテロ事件は組織化された軍団ではなく、誰かの教えに共鳴してしまった人びとが、誰からの指示もなく行っているのではないか。

ネットワークとは、そういうものではないだろうか。そして、同じことが労働運動についても言えないか。残業を拒否する運動をする組織よりも、一人一人が行動を起こしていくことが「敵」にとつてはもつとも恐ろしいことではないだろうか。

ふと、ずっと前に読んだ山口瞳の言葉を思い出す。湾岸戦争のとき、クエートで一時人質となった商社の社員が、戦争終結後、早々に帰国しようとしていることを書いてから、戦後の経済成長を牽引してきた一サラリーマンだった山口瞳は問いかけた。

新入社員諸君！ 君達はこの現実をどう思うか。実は、最近、僕は窃かに、自分のサラリーマン時代の生活を反省しながら、こんなこ

とを考えている。朝の九時から夕方五時まで、脇目もふらずに働く。そのかわり残業をしない。早く家に帰って適量の酒で寛ぐ。有給休暇はガッチリと頂戴する。こういうタイプの社員がそろそろあらわれてきていいんじゃないかなあ……。 (「君達はどう考えるか。」、一九九一、『諸君！ この人生、大変なんだ』常盤新平編、講談社文庫、一九九二)

どれほど難しいことであっても、習慣や文化を変えていく出発点は「二人」の行動でなければならぬと思う。

「もう、うんざりだ！」 自暴自棄の精神病理、春日武彦、角川SSC新書、11011

9/24/2011

フォローしているTwitterのアカウントで引用されていた文章に軽い衝撃を受けて、本書を読むことを決めた。ふだん、本は図書館で借りて済ませる。今回は新しい本なので、買って読んでみた。

前半は、主に著者が読んできたさまざまな小説から「自暴自棄」という概念を定義することを試みる。とはいえ、それほど専門的に論考を進めているわけではないので、「自暴自棄」という概念はあまりはつきりしない。

本書が面白く、というよりも読んでいて空恐ろしくなってくるのは自暴自棄がいわゆる視野狭窄へ進み、希死念慮、さらにはその実行へと突き進んでいく心理を分析した後半部分。

取り上げられているのは、ここでも小説や最近の事件。臨床医の観察眼は自死がどのように起きるのか、詳しく明らかにしていく。漠然としてでも「自暴自棄」のような気持ちに身に覚えのある読者ならば、著者の診察を受けたことがなくても、心の奥底まで見透かされたようである恐ろしい気持ちになるだろう。

Twitterでも引用されていた、自暴自棄が自死の実行に転がり落ちていく過程を書いた部分。

自殺は、残された人々に対して暴力的な性質を帯びている。それゆえに、精神が「自殺を決意したわたしモード」に入ることには屈折した喜びが伴うだろう。他人を欺いたまま自殺という秘密を心の中で弄ぶことには、優越感に似たものが生まれるだろう。それが、自殺を思いつかざるを得ないほどの悲しみや苦しみをいくぶんなりとも和らげる鎮痛効果を発揮する。本人へ同情しつつも自殺に背德的なものを感じ取らずにはいられないのには、相応の訳があるということになる。

(中略)当初は、悩みや苦しみや空虚感から逃走するための選択肢のひとつに過ぎなかつた筈の「自殺という着想」は、最後にはへきつぱりと死んでみせるか、臆病風に吹かれて逃げ出すか」という二項対立を本人へ迫るようになる。「自殺を決意したわたし」という精神

モードは俗世間に対する超越性ゆえにどこか甘美なものがあるけれども、危険なのは、いつしか死ぬ度胸の有無といった問題にすり替わってしまいかねない性質を秘めていることだろう。それは精神が視野狭窄状態に入っていることであるし、人間は最後までおかしな自尊心に縛られ続ける存在であるという証左なのだろう。(第6章 自殺の周辺)

ここまで行ってしまうと、ほんの些細な出来事でさえ、「実行」する最後の引鉄を引くきっかけになる。著者があげている不快な出来事や聞いてもらいたい気持ちを無視された場合だけではなく、「些細な幸福」も、背中を押してしまう危険な風に思える。言葉を換えると、「もうどうでもいい」と思うだけではなく、「もうこれで十分だ」と思ってしまうことも、自死への道を選ばせてしまう可能性がある。

生きることへの執着、という意味で食欲や性欲といった欲望は必要。もちろん程度の問題はあるにしても、程度も問題にならないほど「欲」がないような状態では、問題はより深刻。人生に満足しきってしまったら、「死なないでいる理由」(鷺田清一)がなくなってしまう。

この点は著者も別のところで指摘している。視野狭窄に陥り「世界で一番不幸な人間」と思っている人にとっては、些細なことでも自分の人生のすべてが報われたと思うほどの「至福」に思われてしまうかもしれない。

どうすれば、ほとんど戻ることのできないところまでいつてしまったこの状態から戻ることができるのか。「ふみとどまる」という言葉を著者は使っている。経験豊富な医師のふとした一言で「ふみとどまる」ことができた人も少なからずいたという。

その一言が「ふみとどまる」ことを促すか、あるいは、分不相応の幸福と受け取ってしまい、ここから立ち去り「突き進む」ことを促してしまうか、そのあたりはほんの紙一重ではないか。

そう思うのは、諦めではないし、まして自死を肯定するつもりからではない。

これから先、起きてしまうかもしれない自死を止めることはできる、その方法はある、そう信じたい。

しかし、これまで起きてしまったことについて「止められたはず」と言ってしまったら……。遺された者に立つ瀬はない、そう思うだけ。

癒しと心の痛み―愛着、喪失、悲嘆の作業 (Healing pain: attachment, loss, and grief therapy, 1991) ` Nini Leick, Marianne Davidsen-Nielsen` 平山正実監訳、長田光展 訳、岩崎学術出版社、一九九八

3/3/2012

平山正実の本、『精神科医の見た聖書の人間像―キリスト教と精神科臨床』（教文館、二〇一一）を読んでから、彼の他の著作を図書館で探してみた。単著は見つからなかったものの、彼が監訳をしている専門書を見つけたので、借りて読むことにした。

本書は、喪失体験から生まれる悲嘆 (Grief) について、とくに身近な人の突然の死を体験した人の悲嘆を手助けするカウンセリング、悲嘆作業や悲嘆療法 (Griefing, Grief Work) と呼ばれているプロセスについて多くの事例とともに深い考察が書かれている。密度の高い専門書なので、読むにも感想を書くにもかなり長い時間がかかった。

著者の説く悲嘆作業は四つの段階に分けられる。

- 1 喪失を現実のものとして受け入れる喪失の受容。
- 2 悲嘆の情緒に入る。怒り、恨みがましき、罪悪感、恥辱感の表出。
- 3 新しい能力を身につける。新しい人々に対する不安を克服する。
- 4 新しい方法でエネルギーを再投入する。

この段階や区分じたいは新しいものでも特別なものでもない。キリスト教の視点から悲嘆に関する本を多く書いているのアルフォンス・デーケン神父はより細かく十二の段階を提唱している。悲嘆もその一部に入るトラウマの治療でも患者はこうした段階を通過する。

読みはじめて気づいたことが二つ。

一つめ。本書はカウンセリングする側の視点から悲嘆を見て書いている。想定される読者は、やりきれない悲嘆を抱えている人ではない。そういう人に手助けする人、医師やカウンセラー、ソーシャルワーカーといった人々。悲嘆を抱えている人の側からはすこし違った見方があるだろう。そこに焦点は当てられていない。

二つめ。本書は現代社会の矛盾した状況を前提にしている。

大きな事件や災害が起こるとメディアはすぐに「心のケア」と騒ぎだす。まるでそこにいた人すべてが心の病気になるのが当前で、「心のケア」を必要としない人のほうが異常のような扱いをする。これは間違っている。

身近な人と死別しても、誰もが専門家の介入を必要とするような病的な悲嘆に陥るわけではない。もともと心身が健康で、豊かな人間関係（ネットワーク、あるいは人的資源などと本書では書かれている）を持つている人ならば、身近な人を突然に失くしたとしても、周囲の助けを借りながら、自力で悲嘆作業を完遂して、新しい人生を再開することができる。

その一方、現代社会では悲嘆作業の過程において重要な意味を持ついくつかの儀式が「因習」として排除されていたり、形骸化している。また、往々にして人間関係が希薄である現代の都市社会では、悲嘆の過程を自然に手助けしてくれるような人的ネットワークを持てる人は必ずしも多くない。

むしろ、天地が転覆するような衝撃的な出来事が起きたにもかかわらず、本書で使われている術語を借りるなら、当事者は悲嘆を「回避」したり「遅延」させたりしながら何事もなかったかのように日常生活に戻らなければならない。

たとえば、本書では遺体を見ることや墓参りの重要性が説かれている。それが死という覆すことのできない事態を表面的に事実として受け止めるだけでなく、精神の深い底で真実として受け止めるために必要不可欠と考えられている。

ところが、このいずれもが、現代では、少なくとも私の周囲では、積極的に実施されていない。それは、死体を見る機会が少ない、儀式が形骸化しているという理由だけではない。遺族、とりわけ子どもに遺体を見せることが憚られるような死に方や墓参さえ回避するような悲嘆が存在していることも考えられる。

現代社会、——といつても、生活と知識で私が及ぶ範囲で——は、悲嘆の受容という観点において矛盾を抱えている。

回避や遅延、という言葉遣いこそ、介助する側が使う言葉で、悲嘆の当事者のものではない。当事者にとつては回避や遅延は自覚されないものだから。

当事者から見た場合、回避や遅延は本書では指摘されていない二つの様態が考えられる。それは「秘匿された悲嘆」と「拒絶された悲嘆」。本書の舞台となっている場所は病院やカウンセリング・センター。そこで悲嘆作業を見守っているのは専門家と同じ境遇にある人々。そこには、悲嘆を抱える人のほか、学校の同級生や職場の同僚など、好き嫌いの如何にかかわらず日常的に関わらなければならない人々はいない。専門家は確かに悲嘆作業を進める助けにはなるに違いない。同じ境遇をもつ人々とは語り合い、慰めあい、励ましあうこともできるだろう。

しかし、人はいつかは自分の日常に帰らなければならない。専門家と、言葉は悪いが「相憐れむ同類」のあいだにいつまでも留まっているわけにはいかない。そこに安住してしまうことは、悲嘆作業の目的ではない。

悲嘆がひとたび慢性化してしまうと、援助は困難になる。彼らは悲嘆療法を望み、自らの悲嘆について話し、自分を理解してくれると感じられる人々のなかでなら、共に泣くことも喜ぶ。しかし、慢性的に悲しんでいる者は、自分の悲嘆を取り除こうとする行動には反抗する。悲嘆療法のなかでは泣くことで癒されるのだと話すと、彼らはそれを悲しみ続けてもよいのだという励ましとして受け取る。最悪の場合には、治療は彼らを悲しんでいる者としての役割のなかに固着させることで終わってしまう。(第5章 危機介入と悲嘆療法のII

例)

慰めてくれる人がいるとつい甘えてしまう。その一方で、甘えることのできる専門家や仲間がいなければ、深い悲嘆を抱えていても何事もなかつたように日常生活を送らなければならない。そういう状態が、外からは「回避」と見える。

当事者からすれば、意識して回避しているわけではない。察するに、回避ではなくて、知られてはいけない、表に出してはならないという防御的な心境に近いのではないか。知られたところでわかってもらえないから、そうでなければ奇異な視線を浴びるだけだから。そういう心境

から、悲嘆は「秘匿」され、さらには「秘匿」しなければならぬものとなる。

この状態はよくない。このような心理状態が続くと悲嘆は内面でいびつな形をとりはじめ、当事者の日常生活までも脅かすようになる。

しかし、実際的な仕事にあまりにかかずらいすぎて、悲嘆をいつまでも後まわしにしておくわけにはいかない。もしそんなことになれば、生活に質の低下をきたしたり、不安、抑うつ、強い罪悪感、体調不良、希死念慮などといった代償をはらうことになるだろう。

（第5章 危機介入と悲嘆療法の11例）

こうした状態になったら、専門家の介入が必要になる。しかし、すでに書いたように専門家の介助を得て悲嘆作業を終えられたとしても、悲嘆者はいずれ日常世界に戻らなければならない。しかも現実には本書で紹介されているような専門的な悲嘆療法が幅広く普及していると思えない。

だから、悲嘆を抱える者は皆、自分が生活している現実世界のなかで、隠すか話すか、秘密にしておくか打ち明けるか、ほとんど毎日逡巡しているといつてもいい。もつとも、これは私自身の観察結果にすぎないが。

「秘匿」された悲嘆を、専門家と同じ境遇にある人々、いわゆる自助グループではない場で打ち明けるとどうなるか。前に書いたように、現代の都市社会では人間関係が希薄。具体的にいえば、学校の同級生や会社の同僚であっても、家族構成や住んでいる場所を知らない場合も多い。まして、どのような境遇で育ってきたか、その場所にたどり着くまでにどんな出来事をくぐり抜けてきたのか、知ることは滅多にない。

そういう人間関係のなかで「悲嘆」を抱えているという秘密を打ち明けると「拒絶」されることがある。相手は専門家のように悲嘆の受け止め方を知っているわけではないので、受け止めようがない。だから、できることはせいぜい「いろんなことがあったんだね」と言い返すことくらい。そういう対応はまだましなほう。

「秘匿」されていた悲嘆を打ち明けられたとき、打ち明けられた人は、しばしば「受け止められない」と返答する。言葉でそう言うことは稀で、よくある反応は困惑、沈黙、最後には無視、無関心。本人に悪気はないのだろう。突然、秘密を打ち明けられて戸惑わない人はいない。

しかも、それが深刻で悲惨な経験であればなおさら。

打ち明けるほうに責任がないとも言えない。心の準備もできておらず、深く知っているわけでもない人に突然、「秘密」を打ち明けたら、相手が困惑することはむしろ当然のこと。「秘密」を打ち明けるためには、その前にその人と十分な信頼関係を築いておく必要がある。

そうして、秘密を打ち明けたときには「わかっていたよ」と言ってもらえるくらい、言葉以外の態度で自分を理解してもらい、受け入れてもらっておかなければならない。

当事者にも責任の一端があるとはいえ、悲嘆を抱える者には、「秘密」を受け止めてもらえなかったことや、無視されたことは「拒絶」と映る。「秘匿」は「拒絶」と密着して、悲嘆者の心の奥底に沈み、定着する。本書で「慢性悲嘆」と言われている様態は、このような経緯で行き着くものと思われる。

本書では、泣くことの重要性も説かれている。泣くことが重要なのは、新しい人生をはじめするために、体内に蓄積されたエネルギーを一度放出する必要があるから。発散されるエネルギーは悲しみだけではない。やり場ない怒りや自責の念も含まれる。そうしてまずは、心身を空の状態にしてから、新しいエネルギーを注入、もしくは自らのなかから生み出していく。

ただし、ただ泣けばいいというわけではない。泣き方には二種類あるという。浅く、呼吸の速い「呼びかけ泣き」と、深く、身体の底から涙が溢れ出て全身を震わせるような「手放し泣き」。悲嘆作業に有効なのは後者の「手放し泣き」。これも、悲嘆が「秘匿」され、「拒絶」されている場合には難しい。

一度、固着した悲嘆は、悲嘆作業を行う前に、まず心の底から引きはがすことから難しい。本書でも指摘されている。

喪失後数年して送られてきたクライエントの場合には、ほとんど援助の可能性はなかった。恐らく、執拗な転移や死者との共生関係の根底にある子供時代の経験などに焦点を合わせた長期にわたる悲嘆療法をすることによって、はじめて最終的な別れが可能になるのだろう。(第5章 危機介入と悲嘆療法の11例)

私が知りたいのは、まさにそのような長期、それも何十年にもわたり「秘匿」され、「拒絶」されてきた悲嘆に建設的な悲嘆作業は可能なことだろうか、ということ。

本書は悲嘆作業について多くのことを教えてくれた。でも、一番訊きたかった問いに対しては悲観的な、いや、私にとってはほとんど絶望的な回答しか与えてくれなかった。

自死遺族を支える、平山正実、エム・シー・ミューズ、二〇〇九

ちよならも言わずに逝ったあなたへ―自殺が遺族に残すもの (No Time to Say Goodbye:

Surviving the Suicide of a Loved One, 1999) ` Carla Fine` 飛田野裕子、扶桑社、二〇〇

〇〇

6/16/2012

「自死遺族」という言葉が一般に知られるようになったのは、『自殺つて言えなかった』（自死遺児編集委員会・あしなが育英会編、サンマーク出版、二〇〇七）が出版されてからだろう。それより前に、主に、自死遺族を讀者に想定した本書の著者、平山正実とグリーンケア・サポートプラザによる『自ら逝ったあなた、遺された私―家族の自死と向きあう』（朝日選書、二〇〇四）が上梓されている。

著者は「自死遺族」という言葉が広く知られる前から自死の防止だけでなく残された遺族のケアにも力を注いできた。著者は自らの意志で死を選ぶ、いわゆる責任自殺と区別し、さまざまな要因から視野狭窄となり自分の意志を抑制できなくなった結果を「おのずから」死ぬという意味で自死と呼ぶ。

この言葉が普及したことは、著者の功績が大きいと思う。切腹や殉死など、形式的には自殺であっても本質的には刑死や職業的な事故死もある。これもこれで重い問題を含んでいる。とはいえ、平山が防止に取り組んできた現代的な自死と彼が援助してきた遺族は、そうした場合とは異なる。

本書は著者の活動のまとめ。想定されている読者は自死遺族をケアする医師やカウンセラーなど。自死遺族が読んで無益とまでは言わないけれど、読んでみたところ自死遺族を読み手として想定しているわけではなさそう。

実際のところ、自死遺族に向けて書かれた本は非常に少ない。自死遺族が書いた本も多くはない。もともと、ネット上では自らの体験をつづったサイトや掲示板は増えている。

著者は自死について、「公認されない死」と説明している。「公認されない」とは、まさに「自殺って言えない」ということ。

ここには二つの意味がある。社会的に認められないということ、誰とも、親しい間柄の人とのあいだでも共有されないということ。自死遺族同士でも、そのことについて語り合うことはないということも聞く。おそらく故人との関係も自死の原因の受け止め方も違うことを知っているため、あらかじめ傷つけないように、また互いに自己嫌悪に陥らないように暗黙のうちにそのことを話題にしない。

確かに「分かち合いの会」のような場では、同じような体験をした人々が慰めあい、励ましあうこともできるだろう。一方、こうした場は優れた調停者なしファシリテーターがいないと、容易に「不幸比べ」の場になりやすい。

その意味では「分かち合いの会」は自然にできあがるものと期待できるものではなく、注意深く計画され、慎重に運営される人工的な場と言える。もちろん、「分かち合い」をきっかけに何でも話せる間柄の「親友」を見つけ出す人もいるかもしれない。その人たちが語り合う場は、すでに「分かち合いの会」として設定される場はないだろう。

『癒しとしての痛み』（ニニ・レイク）の感想でも書いた。自死遺族の体験は同じ体験を持たない人とはもちろんのこと、同じ体験をした遺族のあいだでも、そして、きわめて親密な間柄の人とさえ共有されることが少なくない。その経験は「拒絶」され、それゆえ「秘匿」され、心身の奥底に封印される。

家族・支援者のためのうつ・自殺予防マニュアル、下園壮太、河出書房新社、二〇〇六

9/4/2012

下園壮太の著書は、どれも説明が懇切丁寧で、アドバイスが具体的に実際の。総じてひじょうにわかりやすい。本書はさらに内容が豊富で網羅的。自死は百パーセント防止できるものではない、と言い切る潔さもある。

完全に防止できるものではない、という言葉は、自死を否定的にしかたらえられない人には厭世的で悲観的に響くかもしれない。しかし、自死を止められたり、止められなかつたりする現場にいる人が発するとき、この言葉は、すでに防止できなかった事実と向き合っている遺族には、癒しとは言えないまでも、ささやかな安堵をもたらすかもしれない。

「止めることができたはず」という言葉が、遺された者にはことさら辛いものだから。

秘密の観点（一九七三）、土居健郎選集 8、土居健郎、岩波書店、二〇〇〇

9/29/2012

『徴候・記憶・外傷』（中井久夫）のなかに、「秘密を宝物のように大切にしない」という土居健郎の言葉が引用されていた。引用元は明記されてはいなかった。

大きな図書館で、文豪の全集がずらりと並んでいる棚の片すみに『土居健郎選集』を見つけた。第一巻から順に目次を見ていくと第八巻に「秘密の観点」という題名の短文を見つけた。中井が引用した元とはつきりしたわけではないけど、土居が秘密についてどう考えているのかを知るには格好の文章だった。

土居によれば、やや一般化した言い方になるが、精神病理は秘密について悩むことに原因がある。また、その症状も、秘密との関連で観察することができる。躁鬱病では秘密を隠そうとする苦悩があり、統合失調症では自分の秘密が外部に向かって露見しているような不安があるという。秘密が露見することを怖れる一方、秘密を理解してもらいたい、それなのに理解してもらえない、だから、もう理解してはもらえまいと決めつけてしまう、という感覚はわかる気がする。

土居の考えでは、秘密のあり方、つきあい方を上手にできるようになることが精神病理の治療となる。そのためにはいったん秘密は医師に対して全面的に開示されなければならない。そして病気が寛解したときには秘密は苦悩の原因ではなくなる。しかし、それは秘密が秘密でなくなることを意味しない。

面白いことは、土居は秘密をもつことに積極的な意味を見出していること。「精神病を患った」という事実が、当人にとって新たな秘密となる。その秘密と上手につきあうことで自己の統一を維持することができる、つまり、自分の外と内との均衡を保つことができる、と土居は考えているようにみえる。

昨今、「カミングアウト」という言葉とともに、秘密を世間に向けて開示することが積極的な生き方とみなされる傾向が強い。私はあまり賛同できない。一九七三年に書かれたこの短い文章では「カミングアウト」という言葉こそ使われてないものの、現代社会で秘密がないことが

社会性の高さに結びづけられていることを土居も憂慮している。

秘密とは、誰も知らない自分の一面とはかぎらない。精神科への通院を医師や家族は知っている。秘密とは、信頼できる人と共有する個人的な出来事や体験。個人的な出来事がすべての友人に知れわたるFacebookの流行も「秘密の開示＝積極的な生き方」という思潮を示す一つの兆候とみていいだろう。

人には、適度な秘密が必要。秘密とは、いつてみれば、自己と外界とを分ける垣根のようなもの。あまりに高すぎたり硬すぎたりすれば、自己は内にこもってしまう。そうかといって、壁のない家に住むようなほど自己を外にさらけだしておくことも自己の存在を危うくする。

秘密とのつきあい方。この言葉は土居の言葉ではなく読みながら私が考えていた言葉。秘密とのつきあい方次第で、精神状態を良好に保つことができる。土居の「秘密論」はそう説いているように思う。

「心的外傷」は、当人にとっては存在の危機であると同時に存在の抛り所にもなっている。だから、それを安易に言語化したり暴露したりするべきではない。中井久夫は土居健郎の言葉を通じてそう言いたかったのではないか。私は、そう読んだ。

二月第一金曜日

2/2/2013

今年は二月第一金曜日¹が一日だった。一九八〇年の二月もそうだった。そのとき私は十二歳、小学五年生だった。その翌年、一九八一年は六日が第一金曜日だった。そのとき私は十二歳、卒業式を間近に控えた小学六年生だった。

『庭』を作りはじめた頃は、二月の第一金曜日には休みを取り、一人きりの時間をもつようにしていた。一九八〇年の十一月から一九八一年の二月までのことをあてもなく思い返し、追憶に沈む時間を過ごした。二〇〇六年を最後に休みを取ることなくなり、忙しく過ごし、立ち止まり考えることもなく、二月を過ごしている。

二〇〇九年の二月には、その頃の「日常生活」を書きとめている。そのころ整理解雇の対象となっていたため、そのあと「日常」が大きく変わることがわかっていたので、備忘録として書き残しておいた。読み返してみると、確かに最近の生活は四年前とはだいぶ違う。

今の「日常」がいつまで続くのか、わからない。会社の先行きもわからない。子どもはどんどん成長している。一つの里程碑として、この頃の暮らしについて素描しておく。

朝、五時過ぎに目覚まし時計を鳴らし、十五分後にもう一度鳴らす。正月明けから休日前以外に酒を呑んでいない。菓を呑んでも、夜中に二時間おきくらいに目を覚ます。それでも、眠りは十分に深いのか、以前よりも目覚めはいい。

六時半過ぎには家を出る。七時を過ぎると混んでくるので早めに出る。会社に着くのは八時過ぎ。一時間半の通勤のあいだ、前はラジオを聴いていた。いまは気に入った音楽を五千曲以上詰めたプレーヤーからランダムに流している。

いまの職場で不満なのはランチタイム。周辺に店が少ないので、二週間ほどで一回りしてしまう。近くに書店もないので昼休みにちよつと雑誌を立ち読み、ということもできない。

出張でなければ、五時半、遅くとも六時に会社を出る。仕事が残っていれば帰宅してからする。遅くまで会社にいるのはどうも好かない。同じ残業でも、家で夕食を食べてから自室で済ませるほうがいい。

会社で残業はしなくても、スマートフォンで会社のメールを見ることができてしまうので、帰路はずっと仕事のメールを読んだり書いたりしていることも少なくない。関西へ出張すると帰宅は十時を過ぎることもある。

日曜から木曜までは酒を呑まない。出張帰りの新幹線でも呑まない。泊まりの出張を別にすれば、金曜以外に夜、人と会うこともない。

そういう余裕がまったくくない。業務の負荷ではなく心身に余裕がない。夜は早ければ九時半、遅くとも十時過ぎには床につく。睡眠時間を確保する。それがここ数年の生活でもっとも大切にしていること。読書も減ったし文章も書いていない。テレビを見る時間も短くなった。眠る時間の方が大事なので仕方ない。

こういう調子で平日をなんとか切り抜けている。平日に早寝早起きをしているうえに週末は土曜も日曜も昼寝をする。眠っていないとしても、布団のなかでぼんやりしていることが多い。ラジオを聴くでもなく、本を読むでもなく、布団のなかでただ眼を閉じている。

外出するとしても、週末の行動範囲は自転車で行けるところがせいぜい。病院、図書館、スーパー。最近は夕食作りもサボりがち。

それでも今日は二月最初の週末なので、餃子を作った、三十二年前と同じように。

喪の悲しみ (Le deuil, Marie-Frederique Bacqué et Michel Hanus, 2010) 西尾彰泰

訳、白水社、二〇一〇

6/22/2013

概説を思わせる言葉遣いの書名とは異なり、具体的な事例を多くとりあげている。内容は現代ヨーロッパにおける機械的で没社会的な死の意味付けにはじまり、後半は長く子どもにとつての「喪」「悲嘆の作業」、いわゆるグリーフワークについて深く掘り下げている。

五歳までの死別体験には慎重な対応をとらないと成長後に精神疾患を発症する危険が高いという。医学的な根拠があるかは知らないけど、思春期に肉親や親しい友人を失うことも、成長期から成年になったあとまで、長年にわたるダメージを当事者の精神に与えると思う。

同じ主題を扱うほかの本も書いている、子どもにとつて有効な「喪の作業」が列挙されている。複数の本で指摘されているということは、臨床で実証されて、多くの専門家が認めているということなのだろう。

死の事実を受け止めるために遺体を見ること、故人の記憶、また共に過ごした時間の記憶をとどめるために形見を大切にすること、故人を偲ぶ行事や思い出を語り合うひととき、そうしたものが健康的な「喪」を促すと説かれている。

そうしたものが何らかの理由で封じられ、喪の作業が先送りされると、これもまた後々、円満な悲嘆の結末、すなわち新しい人生の開始を妨げる。これは私の感想だけではなく、本書でも指摘されている。

問題の核心はここにある。ほかの本と同様、その先について参考になる助言は見つけられなかった。

悲しみを抱きしめて グリーフケアおことわり、吉田利康、日本評論社、二〇一三

死別を体験した子どもによりそう―沈黙と「あのね」の間で、西田正弘・高橋聡美、梨の木舎、

二〇一三

11/3/2013

『悲しみを抱きしめて』の著者はほとんどアレルギーと呼びたくなるほど、「グリーフケア」に対して反感を抱いている。グリーフケアは人それぞれに違うはずの悲しみを画一的な段階にはめ込み、無理矢理に「再生」を強いている、と考えている。

確かにグリーフケアを説く本は、一般書であれ専門書であれ、喪失体験をその事実を受け止めることから、悲しみを糧として新しい生活を始めるようになるまでを段階としてとらえる。何段階に分けるかは研究者により異なるものの、そのとらえ方に違いはない。

それは喪失体験を型にはめようとしているからだろうか。そうではなくて、悲嘆から再生への道筋は多くの人々を観察した結果、そうした過程を経ている人が沢山いたという、経験則に基づいた考え方ではないだろうか。

実際、グリーフケアを主題にした本では、たいてい「悲しみは人それぞれ」「再生も人それぞれ」「悲嘆は一方通行に段階を通るものではなく行ったり来たりする」と書かれている。

喪失体験は、暴力や犯罪と違い、人間なら誰でも、いつかは体験する出来事であり、特別なものではない。本人が元々心身ともに健康で、また良好な人間関係をもっていれば、特別な手当は必要ではないのかもしれない。しかし、そのとき置かれた状況により、悲嘆の重さはときに本人の生活だけでなく生命までも脅かす。そこで、異常な悲嘆状態を修正するために、知識と経験の豊富な介助が必要になる。

『悲しみを抱きしめて』は、グリーフケアを西欧的な死生観に基づいたものと批判し、「日本」的な死生観に基づいた悲嘆のあり方を提案しようとしている。問題は、西欧的な日本のかという単純なものではないように思う。

著者は、実際に受けたグリーフケアでよほど嫌な体験をしたのかもしれない。本ではもつともなことが書かれていても、その理論が現場で

そのまま実践されているとは限らない。ここにこそ、問題があるのではないか。

グリーフケアを必要としている人は少なくない。しかし、それを上手に手助けする専門家、医師やカウンセラー、自助会などをまとめるファシリテーターが圧倒的に不足しているのではないか。

『死別を体験した子どもによりそう』を読み終えて、その思いを強くした。同時に、この困難な仕事を引き受けようとする人が少なからずいることを知った。でも、私自身は、残念なことに、グリーフケアの知識と実践の経験豊富な人にはまだ出会ったことがない。

『死別を体験した子どもによりそう』は、何年も前に読んだ『大切な人を亡くした子どもたちを支える35の方法』(35 Ways to Help a Grieving Child, The Dougy Center The National Center for Grieving Children and Families, Donald W. Spencer, Donna L. Schuurman, Joan Schweizer Hoff、栄田千春・岩本喜久子・中島幸子訳、レジリエンス事務局協力、梨の木舎、二〇〇五)を今の日本社会の状況に即して書かれた本ともいえる。出版社も同じであることは偶然ではないだろう。

こうした社会的な問題に対しては、組織も技術もアメリカの方が進んでいるようにみえる。もちろん、それは問題がそれだけアメリカでは深刻になっっているせいでもある。社会からの要請に対してどれだけ支援の制度やそれを担う専門家の育成が整っているか、そう単純に比較することはできないと思う。

悲しみを求める心（一九一六）、尾崎翠、定本 尾崎翠全集（下）、稲垣真美編、筑摩書房、一九九八

11/24/2012

翠を知ったのは、おそらく飛行機の機内雑誌にあつた鳥取の紀行文。『第七官界彷徨』という幻想的な名前の小説を書いたこと、大正時代に鳥取から上京して文学を志していたが、体調をこわして帰郷したこと、そして、そのあと戦後まで存命ではあつたものの二度と筆をとることはなかつたことなど短い評伝と、彼女の小説からの引用があつた。

鳥取の海は五年前に家族で自治体の農村体験で行つた。「本州にこんな美しい海があるのか」と感動した。文章に添えられた鳥取の海辺の写真が、懐かしさとともにずっと心に留まつていた。

全集を借りてきて『第七官界彷徨』を読みはじめた。ところが、もつとも知られているこの作品は読み進めても面白くは感じられなくて、途中でやめてしまった。それでも彼女の文章には何かひきつけるものがあつたらしい。

全集に収められた他の随想や断章のような短文を読みはじめると、彼女の文章世界を彷徨していくことになった。

随想のなかで印象に残つたのは「悲しみを求める心」。この文章も比較的知られているのか、著名な作家の随筆を集めたアンソロジーにも入っていることを図書館で知つた。

この文章では二つの悲しみについて書いている。一つは彼女が父を亡くしたときに感じた悲しみ。もう一つは母が「私もこれから先十年のあひだだよ」と言つたときに感じた悲しみ。

前者の悲しみを肉親を亡くしたための「ひととほりの悲しみ」に過ぎず、「真のかなしみ」ではなかつたと書いている。その一方で、母が古い先短いことを娘に告げたとき、彼女は「強いかなしみが私の胸を通つた」とある。二つの悲しみ。何が違うのか。

父の死は肉親を喪つた悲しみであり、それは彼女のなかにしかない。この悲しみは、「取り残された淋しさ」と言い換えることができる。

一方、母の言葉は、そのとき母はまだ生きていたにも関わらず、尾崎は死者の言葉としてそれを受け止めている。ここでは悲しみが共有されている。「真のかなしみ」は一人の心のなかにあるものではなく、死者とわかちあうもの。

母の心と私の心とはその時真に接触してゐた。私の願ふのはその心の永続である。絶えず死の悲しみに心をうちつけて居たいのである。それは決して無意味な悲しみではない。私の路をみつげるための悲しみである。

このような「真のかなしみ」の先に「生のがやき」がある。そう尾崎は書いている。

悲しみを分かち合うことは難しい。たいていの場合、分かち合いたい相手はすでに亡くなっているから。尾崎翠と母のあいだで交わされた会話は、母親が死にいく者として語りかけていたから、死の悲しみをわかちあうことができた。自然な老いや長い闘病で死が互いに死を意識している関係では尾崎が体験したような対話もあるかもしれない。

では、突然、目の前からいなくなってしまう人と悲しみをわかちあうことができるだろうか。

「死者は遺された者の心のなかに生きる」。そういう言葉をよく聞く。それが可能であるなら、死者と悲しみを分かち合うこともできる。また、相手が生きていたときに交わした対話を何度も反芻することで、死者と語り合うこともできる。幼い年齢で母を亡くした宗教学者の山形孝夫はそうした二人きりで交わされた言葉の記憶を「死者との默契」と呼んでいる。

「もしあの人、いまここにいたらどうしていただろう」。何か問題や障害にぶつかったとき、そう問いかけることも「死者との対話」と言えるかもしれない。

「悲しみを求める心」の結びは、「真のかなしみ」を見出すことの難しさを記している。

母の言葉に対する瞬間のかなしみこそ私の心である。けれどもともすると私は淡い心に遠くから死をながめては何故私たちのゆくてに死がよこたはつてゐるのかが判らないことがあった。

思うに、「真のかなしみ」は見出すことも難しいうえに、さらにそれをつねに心にとどめておくことに難しさがある。

「死者は遺された者の心のなかに生きる」というとき、それが自分に都合のよい思い出だけを貼付けたコラージュであったならば、それは遺された者の願望と親しい人を喪った「ひととほりのかなしみ」を投影した偶像にすぎない。そこから「真のかなしみ」は生まれえない。死んでいった者は、命を落とした嘆きや、果たせなかった夢への悔恨や、もしかすると生き残った者に対して怒りももっているかもしれない。

そうしたものを、もう語り合うことができない、死者との対話で見出し、心に刻み続けていかなければならない。

「悲しみを求める心」は私の心の琴線に触れた。全作品を読んだわけではないけれど、尾崎翠が見ていたはずの、あの浦富海岸を私も見たことがある。

そう思うだけで、ほかの作家よりも少し近くにいるような気がする。

餃子をつくる

2/2/2014

昨夜は餃子をつくった。しばらくサボっていたので、夕飯を作るのはおそらく今年になって初めて。

餃子を作る時は、いつもオフコースときだまきしとビリー・ジョエルを聴きながら。テーブルには冷えたグラスに注いだビール。私だけの静かな「心の底から悲しむことができる幸福な時間」。

先週はすこし調子がよかった。調子がいいだけではなく、いい状態をしばらく維持できている気がした。落ち込みそうになるとき、それを少し離れて見つめることができているように思えた。

それは、思い違いだった。自分を客観的に見ることができているように勘違いしていた。よく考えてみると流されるように現実に従従し、自分の行動を自分自身の責任と無関係なものにしていただけだった。

昨日も、夕方には料理をするつもりになるほど回復していたとはいえ、昼前に餃子の材料を買いに出かけた後はずっと夕方まで寝ていた。

今、自分の使命と思っているいくつかの責務を果たしたら、もう「死なないでいる理由」（鷺田清一）はなくなるだろう。

そのとき、新しい使命、別の「死なないでいる理由」を見つけてくることができたなら、別の考えも浮かぶだろうか。

Saving 10,000 Winning a War on Suicide in Japan (自殺者一万人を救う戦い) 、 directed by Rene Dignan' 2013

3/2/2014

この映画は、自死に関心をもっていない人に見てもらいたいと思う。日本での自死の実態を知るきっかけになるといい。その一方で、すでに自死に関心のある人や、身近に自死を経験したいわゆる自死遺族の人は見ない方がいいかもしれない。

この作品では、日本のマスメディアが自死について方法を詳細に報道したり、理由を詮索したりすることを批判している。ところが、この作品の中でも自死の方法や理由がかなり露骨に語られている。この作品を見ることは、自死遺族にとってかなり辛いだろう。

この映画で語られていることの多くは自死に関心のある人や自死遺族はすでに知っていることであり、ことさら新しいものではない。やはり、知らない人々に知ってもらうための作品と考えるべきだろう。

この作品には続編があってほしい。題名は、"Healing 30,000 survivors"。

一人の人が自ら命を絶つとその人の近くにいた人は強い衝撃を受け心に傷を残すこともある。一件の自死に対し、そうした強いショックを受ける、いわゆる自死遺族は、三人とも、四人いるとも聞いたことがある。

ということは、一人の人が、複数の自死を身近で見聞きして、二重三重の自死遺族になっていることも考えられる。

自死遺族がどのような苦しみの中で生き残っているか。有名人の自死がセンセーショナルに報道される一方、ほとんど知られていない。

この映画のように、自死が無益であることを論し、生きる意味を伝えることは重要であるに違いない。

同時に、自分が自死を選ばないようにするだけではなく、自分が自死遺族になりたくない、という気持ちをもつことができれば、死の淵で立ちすくんでいる人に声をかける勇氣と、その人が言葉にできない声に耳を傾ける優しさをもつ契機になるかもしれない。

心に傷をうけた人の心のケア—PTSDを起さないために (Understanding your

Reaction to Trauma, Claudia Herbert, 1996)、勝田吉彰訳、保健同人社、一九九九

9/28/2014

「隠さず、しゃべりまくろう！」 (49ページ)

「もし、頼りになるパートナーや友達がいて、耳を傾けてくれるならば、彼らにあなたの体験を語ってみましょう」 (51ページ)

そう書いてある。それは回復にとって有益なことなのだろう。すでに少なからぬ人に話した。

耳を傾けてくれた人は去っていった。そうでなければ、もうその話はしないでほしいと言われもした。

はつきりと言われはしないとしても、こんな話は聞くのも嫌だろうと思うと、とても「しゃべりまく」るようなことはできない。

悲しい。

ときおり、「TSUNAMI」(桑田佳祐)のように襲ってくるこの気持ちを、誰がわかってくれるのか、どんな風に話せば伝えられるのか、わからない。

「大丈夫、偏見はないから」と言われたこともある。何の害もなさそうなこの返答に、私は二重の意味で悲しくなった。

一つ。「偏見がない」ということは、告白した内容が世間では偏見の目で見られていることを積極的に認めている。

二つ。世間にある偏見がない、ということとは、マイナスはなく、ゼロと言っているだけで、そこから踏み込んで理解しようというプラスの姿勢はない。だから、そこには、共感も共苦も、憐憫さえもない。

「話したいときに話してね」「聞くことしかできないかもしれないけど、話したいことを話していいよ」。そんな風に返してもらえたら、うれしいのに。

時間薬なんてない

11/6/2015

「時が解決する」「時間が薬」という言葉をときどき聞く。なぜか、馴染めない。すんなり受け止めることができない。それでいて、その理由も説明できない。

つい最近、ある事件で息子を失った人がテレビの報道番組で話していた。

時間が経つということは、一緒にいない時間が長くなることです

この考え方は腑に落ちた。時間が解決できないこともある。むしろ、時間が経つほどに、砂時計の砂が降り積もるように悲しみが重くなることがある。

なるほど、そういうことだったのか。

そういえば、「博物館」(さだまさし)には、「忘れ去っていくほどに 軽くもないものたち」という歌詞があった。

不思議なもので、悲嘆について考えているのに、その仕組みが解ると少し楽になる。

第五部 最後の手紙

死人を呼びかえすことができなければ、自分が死の中へ入って行くほかないだろう。

どうしてこんな簡単な心理が判らなかつたのだろう。

——流れのほとりにて、森有正、一九五九（改行あり）

悲しみよ こんにちは (Bonjour Tristesse, 1954) , Françoise Sagan' 河野万里子訳、新
潮文庫、2009

11/10/2015

人は、いつ、自分なりの死生観をもつのか。それはきつと、その人が初めて身近な人を失ったとき。そのとき人生は、元に戻れない、それまで生きてきた世界とはまったく違う世界になる。

幼年の頃や思春期のはじめに痛烈な喪失体験があると、つまり、確固たる人生観全体を持つ前に死を体験すると、死生観がその人の人生観全体を覆ってしまう。本来、人生の一部分のはずの死生観が、人生観を包み込む。

要するに、十代の間に親密な人を「突然に」失くした経験をもつと、それは人格形成に大きな影響を及ぼす。

死生観と少年時代の記憶を切り離すことがどうしても私にはできない。だから、そんな風に考えてしまうのだろう。

あんな人、死んでしまえばいいのに

そんな気持ちを一瞬でも感じた後で「あんな人」と呼んでいた人が亡くなってしまう。そういう経験を持つ人はいるだろうか。

一瞬でも願ってしまった不幸が叶えられてしまった。そのとき、その人の死生観はどうなるか。その人の、その先の人生はどうなるか。

喪失の悲しみに自責の念が加わる。そうすると、その人の人生は、さらに暗く、重い「悲しみ」に捕らえられる。

「悲しみよ こんにちは」という言葉はこれから「悲しみの世界」に生きていくほかない、というやりきれない決意ではないか。もう二度と悲しみのない世界には戻れない。そう思わずにいられない。これからずっと悲しみとともに生きていく。逃げることもできないし、悲しみが去っていくこともない。

悲しみは立ち去るふりをして、また戻ってくる。装いを変え、顔つきを変え、何度も現れる。

ゴッホは最期に目を閉じる前に、弟のテオに向かつて、“*La tristesse duera toujours*”（悲しみはいつまでも続く）と言ったという。十八歳で「悲しみ」を知ったセシルも、暗く、重い「悲しみ」を抱えたまま生きていくのだろうか。

Bonjour Tristesse

今から思えば、「悲しみ」の意味も知らずに、私がそうつぶやいたのは、十二歳の冬のことだった。

グリーフケア入門 悲嘆のさなかにある人を支える、高木慶子・上智大学グリーフケア研究所編
著、勁草書房、二〇二二

悲嘆の中にある人に心を寄せて―人は悲しみとどう向かい合っていくのか―、高木慶子・山本佳
世子、ぎょうせい、二〇一四

11/22/2015

「トラウマ」という精神医学の専門用語は、阪神淡路大震災のあと、一般の人々にも広がったと言われる。グリーフあるいは悲嘆、それを和らげるグリーフケアという言葉も最近は新聞でも見かけるようになった。東日本大震災が大きな契機になったのだろう。

新しい専門用語とはいえ、グリーフケアについてはすでに専門書から一般向けまで多くの本が出版されている。これまでに何冊か読んだ。専門書では、『癒しとしての痛み』（ニニ・レイク）と『喪の悲しみ』（マリ＝フレデリック・バスク、ミシェル・アヌス）のほか、何冊かについて感想文を残している。

トラウマと同じように、グリーフケアについても、急速に周知されたかわりに、正しい理解とはいえない見方も同時に広まってしまった。また、グリーフケアの研究は、トラウマ研究に比べてまだ歴史が浅くて、専門家のあいだでも十分に議論が尽くされてないところもあるようにみえる。そうしたところにひっかかりを感じてしまい、「グリーフケア」そのものを拒絶するような人もいる。

まず重要なことは、大切な人や物（ペットや長年使ってきた品物でも）を失くしたときに悲しい気持ちになるのは、人間にとっては自然なこと、正常な反応ということ。

上記の二冊のうち、前者は、グリーフ研究の最新成果をまとめたやや専門的な本。後者はそれを踏まえたうえで一般向けに、研究の成果を噛み砕いて書いている。

トラウマ同様、喪失の受け止め方も乗り越え方も、人それぞれに異なる。多くの人は、グリーフケア、ないしは専門家の介入がなくても、悲嘆を乗り越えて新しい生活をはじめることができる。葬儀や法事や墓参は、新しい生活を始めるために一歩ずつ登る階段になる。

その一方で、悲嘆が長引いたり、秘密にされていると、悲嘆は人間の心を内側から侵食する。例えば、自死や同性カップルの死別のように社会的に「公認されない死」がそれにあたる。

通常、死別の直後に感じるような激しい喪失体験が、一周忌（研究者によっては六ヶ月）を超えて遷延している場合、「病的な」(pathological) 悲嘆ないしは「複雑性」(complicated) 悲嘆と言われ、心理学的ないしは精神医学的援助の対象とするのが一般的である。近年では病的悲嘆という言葉よりも、複雑性悲嘆という言葉の方を用いることが一般的である。というのは、このような状態は質的な異常ではなく、正常な悲嘆と同一線上にある量的な異常であると考えられているからである。（『グリーフケア入門』、第5章臨床心理学における悲嘆、横山恭子）

悲嘆それ自体はまったく異常でも特別でもない人間の生理的反応。ただ、その人の置かれた環境や、喪失の状況によっては、特別な支援を必要とする。

今回読んだ二冊の本は、グリーフケアの実践方法や専門家の養成法についても詳しく論じている。

私が注目したのは、『グリーフケア入門』の「第6章グリーフケア研究の動向」（森俊樹）。

これまでの研究では、悲惨な出来事の体験から回復することは、一方通行で考えられてきた。研究者や宗教者により、段階の数は違えど、悲嘆は複雑なものであっても、いずれは解消され、人は回復し、新しい人生を生きはじめ、そう考えられてきた。

『グリーフケア入門』の「第6章 グリーフケア研究の動向」で紹介されている新しい考え方では、段階を一方通行で進のではなく、二つの心境を行ったり来たりしながら回復に向かうとする。

二つの心境は、「回復性コーピング」「喪失志向コーピング」とそれぞれ呼ばれる。「コーピング」とは「取り組む」ということ。悲嘆と

向き合う心の持ちよう、ということらしい。

回復志向コーピングは、死別体験がもたらす二次的なストレスに対して取り組まれるコーピングであり、死別体験後に訪れるさまざまな生活の変化に適応するためのものである。これには、家計や家事などの生活に関わる問題に対して立て直しをはかることや、これまで妻や夫、親といった立場の役割から新たな立場へと自らの新しいアイデンティティを発展させていくことなどが含まれている。

喪失志向コーピングは、故人との関係や絆について為されるコーピングであり、例えば、故人や生前の故人との生活、そして死別という出来事について反芻 (rumination) することや、故人について思慕 (yearning) し写真などを眺め、故人について思うあまり泣いてしまうことなどが含まれる。(第6章グリーフケア研究の動向 5 二重過程モデルの意義)

二つのコーピングを行き来しながら、悲嘆は少しずつ自分では制御できない「複雑な」感情から、自分を支える「思い出」に変わっていく。ここから、本書の要旨を離れて、二冊の読後に私が考えていることについて書く。

中井久夫は、『徴候・記憶・外傷』のなかで、トラウマの解消について次のように書いている。

敢えて言えば、言語的な語りとして自己史を統一することは絶対的に必要ではなく、また必ずしも有益でもない。むしろメタ記憶の総体の連続感をほぼ満足できる程度に維持する、あるいは修復することが現実的な目標であり、ある意味ではより高次な目標ではないだろうか。(「発達の記憶論」)

この考え方は悲嘆との向き合い方についても言えると思う。悲嘆はなくなるものではないし、なくさなければいけないものでもない。とりわけ死別の悲嘆の場合、故人の思い出はいつまでも大切にしたいものだろう。

前にも一度書いたこと。最近、事件や災害が起きると、マスコミや行政はすぐに「心のケアが必要」と言い出す。しかし、「心のケア」は

喪失体験のすぐ後だけに必要なものではない。むしろ、半年や一年、場合によっては何十年も過ぎたあとに、心の底で燻っている悲嘆こそ、丁寧で親密な支援を必要とする。その頃には、マスコミはもう違う事件を追いかけている。

冒頭に書いたように、悲嘆は段階的に「解消」されるべきものとみる考え方が「グリーンフケア」という言葉とセットになって広がっている。本書のような新しい研究が、わかりやすく、そして広く伝わってほしいと思う。

マスコミには、そういう役割を期待したい。

「最後の手紙」について

11/28/2015

「最後の手紙」という副題をつけて、『烏兔の庭』の第五部を書きはじめた。

なぜ副題にこの言葉を選んだのか。昨年六月末、第四部を終わらせてからの出来事を振り返りながら書いておきたい。

「最後の手紙」という言葉は、数年前に読んだ『最後の手紙』（立川昭二、筑摩書房、一九九〇）から借用した。立川は「最後の手紙」という言葉について、自身が経験した辛い体験を書いたあとで、次のように書いている。

このように私たちは、それがあはれい、その人との「最後の手紙」になるような文章や会話を常にかわしているのです。私たちは、ふだんお互いいつでも会えたり話したりできると思っています。じつは死という別れは不意にやって来るのです。生きていくということ、それはほどあやうい、ものなのです。ですから、常にこれが「最後の手紙」のつもりでお互い書いたり話したりする気持ちでいなければならぬのでしよう。（「おわりに」）

この本を読んでからというもの、「最後の手紙」という言葉はいつも私の心の隅にいて私のことを見つめていた。

昨年六月に書くことを止めてから間もなく、次に書く文章を考えはじめた。

「最後の手紙」。この副題を最初に決めた。そのときは、第五部を「この世界」で私が書く「最後の手紙」にするつもりでいた。「最後の手紙」は二〇一五年の春には書き終える予定だった。

実際、何かを試みることはなかった。それでも毎晩目を閉じてから「最後の手紙」の下書きを頭の中で繰り返し返した。何を書き、その手紙を家のどこに置いて、いつ家を出て、どこまで行き、どこで冷たくなるか、それを考えることが、私にとって入眠儀式となっていた。

私の希死念慮は、この言葉とともにあった。

「箱庭」をいま読み返すと、二〇一三年後半から急速に精神状態が悪化している。自分で書いた文章とは思えないほど書き手の心が乱れていることがわかる。幸い「最後の手紙」を書き置きして家出することはなく、いまま家族と暮らすことができている。それは、会社を辞めて心身を押さえつけていた重石が一つ減ったから。

私は、私自身の「最後の手紙」を書くことは、とりあえず延期した。やめたとは書かない。死にたい、という気持ち、いわゆる希死念慮は、心のなかに閉じ込めておくよりも、風当たりのよい場所にさらしておいた方がいい。何人かの心の専門家からそういう助言をもらった。

ところで、「希死念慮」は死を希うと書くけれど、「死にたい」という気持ちとは違う。このままでは「死んでしまいそう」な苦しみや、「私には生きる資格がない」という過剰な自罰意識を意味する。今でも、前のように常時ではないにしても、「どうにでもなれ」と投げやりな気持ちになる日がないわけではない。誰だつて、そうだろう。いや、そんなことを思いもつかずに暮らしていける人もいるのだろうか。

十一月二十八日は、『烏兔の庭』を書きはじめた記念の日。

去年も一昨年も、何一つ、書くことができなかった。

十一月二十八日という日付に特別な意味はない。ただ、毎年、この日付が近づいていくと思ひ出す。思ひ出すのは、一九八〇年の秋。

一九八〇年の秋。私はまだ、「悲しみ」を知らなかった。無邪気な坊やであつたけれど、それでも「悲しみ」が近づいていることに密かに気づいていた。それどころか、愚かにも私はそれを招き入れようとさえしていた。

幸福な時間を過ごしていた、一九八〇年の秋。十一月二十八日、陽が沈む少し前、一人で家を出て、近所の公園のベンチにしばらく座っていたことを覚えている。幸せをかみしめながら、それがもうすぐ終わりそうなことに怯えていた。

でも、その不安をわかってもらえる人はいなかった。

誰かに伝えたかった。胸のときめきと幸せなひとときとその全てが今にも崩れそうになっていること、そしてその真中に私がいることを。

そのために公園まで歩いた。そうだった。理由もなく家を出たのではなかった。でも公園には誰もいなかった。誰にも会えなかった。誰にも声をかけられなかった。誰の家の呼び鈴も押せなかった。しばらく、ベンチに座り、あたりが宵闇に沈みかけた頃、家に帰った。

それから二月して、何も書かれていない、真白な「最期の手紙」を私は受け取った。

何度見返しても、何も書いていなかった。突然の出来事に、私はどう気持ちを表現したらいいかわからずに、感情を失い、言葉も失った。

今年の十一月二十八日は、悲しいような懐かしいような、不思議な気持ちでいる。それは、あの日歩いた同じ公園を、今日歩いたせいかもしれない。

十一月二十八日は、誰か一人のことを思い出す日ではなく、あの年の秋、私の世界をふんわりと包んでいた雰囲気やよみがえり、抑えられない、言葉にもできない気分させる日。一言で言えば、「あの頃」を思い出させる日。

ひとつの偶像によつて象徴される、愛と誠実さと思いやりに満たされた「この世界」。

頬をなでる快い微風。広々とした秋の青い空。いつまでも見ていたい大きな瞳と五月の微風のような笑顔。優しい声。

それから、幼いながらも精一杯背伸びした、知的で誠実な会話。

今年の秋は、「悲しい気持ち」（桑田佳祐）になる理由を考えている。また、「私の青春そのもの」（荒井由実）と呼ばたくなる人たちに ついて考えている。

そんなことを考えているのは、つい最近、『悲しみよこんにちは』（サガン）を読んだせいかもしれない。

あの日、呼び鈴を押そうか、迷ったうちの一軒は取り壊されて更地になっていた。それだけ、時間が経ったということ。

あれから三十五年の時が過ぎた。いま、私は「最後の手紙」について考えている。

私が受け取りたかった、そして、返事を書きたかった「最後の手紙」。その手紙を受け取ることはきつとない。それはわかっている。でも、どこかにきつと書かれている。私に読まれることを待っている。そう、信じている。

寒梅忌

2/5/2016

二月初初の金曜日、鎌倉で、行かなければいけない場所へ一人で行った。

寒梅忌

この日に、そういう名前をつけてみた。

名前をつける、ということには重みがある。「二月第一金曜日」「二月六日」と言えば、日付でしかない。

名付けることによつて、ただの日付は、意味のある「時」として定義される。

もちろん、名前を付けただけで定義が出来上がるわけではない。本来は、名前のない純粹な経験が最初にあり、それがいかなるものか定義されたとき、はじめて名前が与えられる。定義付けを行う思索と言葉の操作を「経験」と森有正は呼ぶ。

「寒梅忌」と名付けた日に、どんな意味があるのか、その意味はどう定義されるのか。ここでようやく思索がはじまる。その準備のために三十五年という歳月が必要だった。

「寒梅忌」という言葉は、これから何度も定義しなおされるだろう。

桜の樹の下には死者が眠っているという。では、梅の木の下には誰がいるのだろうか。

天女か。そうであれば、すこしうれしい。

一人で、それから三人で

2/8/2016

金曜日、鎌倉の朝比奈峠で一人で墓参りを済ませたあと、両親の住む家を訪ねた。

土曜日、両親が出かけたいというので、再び、朝比奈峠へ行った。前日、一人で行ったことは伝えなかった。

こんな気遣いをしなければならぬのは、とても悲しいことだけれど、やむを得ない。

そのあと、江ノ電で長谷まで行き、長谷寺と光則寺で梅を眺めた。まだほとんどの木は咲いていない。咲いている木は満開。

紅梅は実家の庭が一番開いていた。

回復するちから 震災という逆境からのレジリエンス、熊谷一朗、星和書店、二〇一六

4/15/2016

東日本大震災に関連する本は、なるべく読まないようにしている。興味本位や憐憫の情から体験談を読むのは非礼なことと思うから。

本書を手にとったのは「レジリエンス」という言葉が書名に使われていたから。内容は震災の直前に福島に赴任した精神科医が、五年間にわたって関わってきた被災者の悲しみと回復の道程。ノンフィクションではなく、著者の治療した症例をもとにした話が書かれている。言ってみれば、短編小説の連作に近い。

著者は「レジリエンス」という言葉を、トラウマを残す体験を乗り越えて獲得する「成長」という意味より、ずっと控えめな意味で使っている。「日常生活を取り戻す」というくらの意味。

おそらく、東北の現実には「日常生活を取り戻す」だけで精一杯なのだろう。紹介される事例は深刻なものばかり。

診察室での会話が多く記述されている。医師が患者を細やかに観察し、言葉を選び、それを発する「時」を選んでいることがよくわかる。臨床の現場では医師も試行錯誤している。ほんの一言が事態を好転させることもあれば、そうでない場合もあることが想像できる。

確かに人間は、かすり傷をかさぶたが守りながら皮膚を再生させるように、心に負った傷を治癒する力を内在させているのかもしれない。

しかし、その力はひとりで発揮されるものではない。著者のように、注意深く辛抱強い伴走者がいて初めて、心の奥底にある「回復する力」として湧き上がる。

本書で描かれている事例は、震災後五年のあいだに発症し、今までにほぼ「日常生活を取り戻す」ことができた、いわゆる「寛解状態」になっているもの。トラウマ的体験から五年間のうちに問題が顕在化し、そして回復を果たしているのは幸運な方だろう。

実際には、「日常生活を取り戻す」ことで忙しすぎて、悲しんでいる時間すらない人も少なくはないのではないか。

何十年も傷が見えずに、気づかないこともある。そして、ある日、体験した出来事の重大さに気づく。そのとき気づかないでいた悲しみが堰を切ったように溢れ出す。

そういう場合、傷を癒やすには、傷を忘れていた時間と同じくらいの時間がかかる。

本書を読んでいると、臨床の現場で「ケアする側」にいる人たちが細やかな配慮をしながら、悲しみや心の傷を抱えている人たちに接していることがわかる。

長い時間、発露されず心の奥底に封じ込められている痛みには被災者が気づいたとき、彼らはきつと、時間をかけて、言葉を選び、時を選び、癒やしていくのだろう。

現状を観察しながら、試行錯誤を続けて、傷を抱えた人たちと真剣に向き合っている著者だからこそ、ほんとうに深刻な問題と思うことに焦点が合わせることができる。

そして、著者が語る密度の高い物語は、ノンフィクションよりも、かえって「現実」の深刻さを伝えている。

寒梅忌

2/4/2017

二月最初の週末。寒梅忌と名付けて二年目。朝、一曲目に聴いたのは、さだまさし「異邦人」。

毎朝聴いている英語ニュースも今日は聴かない。一日、一九七九年の夏から一九八一年の冬まで聴いていた音楽を聴く。

さだまさし、オフコース、ビリー・ジョエル、ビー・ジョーズ。

七〇年代末の音楽だけを選んで聴く今日、例外もある。「僕と君の挽歌」（さかいゆう）。

要するに、そういう気分になる日。挽歌を聴く日。

夕方、両親と待ち合わせて、いつもの南欧料理店でいつものマルゲリータとパエリア。

悲しみに負けそうになることが、私にも、ときどき、というより頻繁にある。でも悲しみに勝とうと思つたことはない。勝てるわけではないだろうし、悲しみとは仲良くやつていきたい。なぜなら私はもつとも悲しいときに最も幸せだから。

翌日出かけるので、いつものように深酒して夜更かしするのはやめて、早めに休んだ。夜、布団のなかでこっそり名前を呼んだ。

土曜日は、八十歳を過ぎた両親と朝比奈峠を越えて鎌倉を散策した。大刀洗にある墓地で花を手向け、手を合わせ、静かな時を過ごした。

荏柄天神で合格祈願。三桁の電話番号が表札に書いてある古い屋敷の並ぶ裏通りを歩いて鶴岡八幡宮へ。

社殿まで階段を登り、一月遅れの初詣。

そのあと、小町通りを抜けて駅まで、二時間で九千歩。江ノ電の改札口の横にある中華料理店で、八十代の健脚に乾杯した。

先週の初め、「梅を見に行きませんか」と両親を誘った。すぐに「行きましょう」と返事が来た。

これまで一人だけで行ったり、皆で行くにしても何となく行くだけで、きちんと誘って行くことはなかった。

「梅を見に行こう」と言葉にできたことは、私にとっては大きな前進だった。

三十六年間、できなかったことから。

公認されない死

2/12/2017

非難されることを承知で書く。

大きな災害や事故、事件のあと、その出来事があった場所に毎年、遺族が集まる。その様子はしばしば報道される。インタビューされる遺族は「記憶を風化させたくない」という主旨の返答をする。

うらやましい、悲しみを同じ日に、同じ場所で、分かち合える人たちが。

分かち合う人もなく、憶えている人もおらず、誰も語らない。風化されるがままに放置され、むしろ、積極的に忘れられる。そういう死もある。「公認されない死」と呼ぶ人もいる。

宝物は捨てられ、思い出は忘れられ、名前は二度と呼ばれない。

昨夏、障害者施設の殺傷事件が起きたときに、被害者の名前が公表されることを拒んだ遺族がいた。これも「公認されない死」の一例。

そのことを批判する人も少なからずいた、かけがえのない命が奪われたのだから、その人が生きて証として名前を公表すべきと。

公表を躊躇したのは遺族の方であるとしても、そう思わせたいのは社会の方だったのではないか。社会全体が死を公認しない、つまり、障害者に対して偏見を持っているから、遺族は家族に障害者がいることを知られたくないことと思ってしまう。

すぐに結論の出る問題ではない。

としても、公表を拒んだ遺族を責める気にはなれない。

自死は、向き合える——遺族を支える、社会で防ぐ、杉山春、岩波ブックレット、二〇一七

4/29/2017

書店でもらった岩波書店の新刊案内で知った。高い本ではないので買って読んだ。

自死や自死遺族の問題について、関心を持ちはじめた人には格好の書かもしれない。複雑で根深い問題が整理され紹介されている。同時に本書は、一度でも自死を意識したことのある人や自死遺族向けではない、と思う。

それは、いくつかの点で自死遺族への配慮が不足していると思わないではいられないから。

著者は四年前に友人を自死で失くしたと「まえがき」を書き出している。ところが、そのあと、同じ「まえがき」の終わり方で、次のように書いている。

自死とは、人とのつながりを失い、社会という居場所から、死という形でこぼれ落ちてしまう現象だ。

「人とのつながりを失い」という言葉は、蜘蛛の糸のような細いつながりを頼りにして信じていた遺族にとってかなり厳しく辛い。そして、四回の雑誌連載とそれを加筆して本書を書き上げたときの心境が続く。

四回の連載をめぐってそのような思考を積み重ねる中で、（筆者注…友人を失くしたときに感じた）私の中の黒々とした塊は、徐々に溶けていった。友人をただ、悼むことができるようになった。

改めて命を客観的な社会の中に位置づけることが、悼むことだと思ったのだ。

自死は「公認されない死」とも言われる。自死した者について、誰も話さなくなり、遺品は片付けられ、まるでその人はいなかったように

扱われる。そういう場合も少なくないと聞く。かつてキリスト教圏では自死は大罪で墓に入れてもらうことも拒まれた。

いまも家族に自死した者がいたことを秘密にしている人がいる。確かにその死は、「客観的な社会の中に」位置付けられてはいない。自死者の生きた証しを残すことが求められているという著者の主張には同意する。

このあと、本文では経済的に、また社会的に、長く辛い体験を持つ自死遺族を紹介していく。その重苦しい調子と「まえがき」のさつぱりした感じとはどこかずれている。

四年間で悲嘆を解消できた人に対して、多くの自死遺族はため息まじりに「よかったですね」と言い返すしかないだろう。

それが著者の正直な気持ちならば、その気持ち自体を責めるつもりはない。自死遺族のなかにも、長く苦しまない人もいるに違いない。

ただ、そうではない人が圧倒的に多いことを提起する本書の意図と「まえがき」の一節は矛盾する。

著者は「命を客観的な社会の中に位置付けたい」と述べている。であれば客観的なルポルタージュに徹し、正直な気持ちであっても自分の体験は書かないほうがよかつたと思う。

前半で自死遺族が抱えるさまざまな問題を提起したあと、後半では自治体や民間団体が行っている、さまざまな自死の予防策が紹介されている。

そのなかで印象に残ったのは、著者が参加したあるセミナーで聞いた言葉。

「自殺予防とは、その人の自由を回復することなんです」

確かに、「生きるか死ぬか」の二者択一から「死ぬしかない」という選択をしてしまう視野狭窄は自死の直接の原因と言える。「死ななくてもいいか」と思うことができれば、前向きでなくても、活動的でなくても、死を選ばずになんとか生きていくことができる。

そういう気持ちにさせるのは、身近な人の些細な言葉であったり、毎日見ている当たり前の風景だったりする。それを方法論として具体化するのはいきなり難しいことだろう。精神科医の春日武彦も、最後の一線を越えないように思いとどまらせる魔法の言葉はないと書いている。

私が心配しているのは、予防策が機能しないことではなく、「死んではいけない」という標語が今「死にたい」という希死念慮と向き合い苦しんでいる人たちや、長いあいだ苦しんでいる遺族を更に苦しめることにならないか、ということ。

希死念慮は「死にたい」という自発的な気持ちではない。「死んでしまいそう」「死ぬしかない」「自分には生きる価値がない」。そんな風に思うほど、ほかに逃げる場所も見つけられずに追い詰められた心境。それが希死念慮。

「死んでしまいそう」なほどに苦しんでいる人が「死にたい」と言える場所さえも見つけられなかったら、もう本当に死ぬしなくなってしまう。

自殺予防の活動をしている人たちの目標は、「一人でも自殺を減らすこと」であってほしい。「自殺は、必ず防止できる」「自殺をゼロにする」といった強い調子の標語にすり替えられてほしくない。

自殺を完全に予防できる社会は、全員が皆勤賞を目指す学級に似ている。

一人の落伍も許されない。インフルエンザに罹っても学校へ行かなければならない。そこでは目的と行動が本末転倒を起こしている。死にたくなってしまう人を救うはずの社会が、死にたいという気持ちさえ表に出せなくなってしまうのは、これも本末転倒だろう。

さらに言えば、「完全な防止」を目指す社会で自殺が起きてしまったら、遺族になった家族は、友人は、どんな気持ちになるか。

あれだけ予防策が行き届いているのに、なぜあの家では自殺する者がいたのか？

すべての自殺が防止できるのなら、なぜあの人をとめられなかったのか？

今以上に過酷な蔑視や重い自罰感が待ち受けていることは想像に難くない。なぜなら、そこでは自殺はもうあり得るはずのないこととなり、あつてはならないことになっているから。

この点は、小泉義之が『現代思想二〇一三年五月号 特集Ⅱ自殺論』（青土社、二〇一三）で指摘していた。

自殺を予防する立場と遺族を支援する立場（“prevention”, “post-vention”、事前事後とも言われる二つの立場）は全く正反対で、これらを

同じ場所で論じること自体、矛盾をはらんでいる。二つのテーマは別の本で論じた方がいいのではないか。

だから、自死の予防策を進めると同時に、防止運動にも、社会全体にも「止められない自死もある」、という風穴を開けておく必要があるように思う。

「全員で皆勤賞を目指す学級」が楽しい場所になるとは思えない。

それでは、人には自死する権利はあるのか。その問いに私はまだ答えられない。ただ、自死は防止できる、と言い切ることはためらいがある。

第六部 終わりの始まり

Many's the time I've been mistaken

And many times confused

Yes, and often felt forsaken and certainly misused

——American Tune, Paul Simon, 1975

自死遺族の癒しとナラティヴ・アプローチ―再会までの対話努力の記録、吉野淳一、共同文化社、

二〇一四

2/11/2018

新聞か書店か、どこかで「ナラティヴ」という言葉に目が止まった。前に『ナラエビ医療学講座』（齋藤清二、北大路書房、二〇一一）という本を読んだことがあったので。行きつけの図書館には置いていないので、買って読むことにした。

内容は期待していたものとは少し違っていた。本書は「ナラティヴ」について書いているけど「エビデンス」については書かれていない。「アプローチ」や「努力」という言葉が書名に入っているように本書は完成された理論ではなく、一つの試みと言える。

著者は一般的な医療の範囲を越えて、夢やシャーマンを通じた故人との対話を模索している。遺族に真摯に寄り添う姿勢には心打たれる。博士論文を元にしてるので引照や論述が細かく容易に読める本ではない。何より主題が重いので、読み始めるにも、また読み終えるまでもかなり時間がかかった。

これまでの考えを改めさせられた論点と、本書に頻出するキーワードから読後に考えさせられたことを書いておく。

一点目。本書に教えられたこと。

自死遺族への支援は早いほどよい。長い時間が経つと、傷口は広がり、身を守るために硬いかさぶたができる。こうして長い年月をかけて固着してしまったかさぶたは、剥ぎとることも溶かすことも容易ではない。

トラウマの症状が出てからでは遅い。統合失調症やうつ病の症状が発症する前に防止しなければならない。早い対応はそれを可能にする。体験がまだ生々しいうちに、表は硬く裏地はやわらかい衣で心を包んでやれば外側からの刺激から身を守ることができる。だから、内側で悲しみをゆつくりと自分なりの速度で和らげていくこともできる。

これまで死別体験後の精神疾患は、何らかの症状が出てから対処すべきと思っていた。誰もがトラウマを持つとは限らないから。

本書を読んで考えを変えた。自死や突然の事故や事件で死別体験をした場合は、できるだけ早く「ケア」をする必要がある。大切なことは、死別体験をしてからできるだけ早く、「上手に悲しむ方法」を身につけること。

私はまだそれを知らない。自助グループに参加するには時間が経ち過ぎていて。夢で再会することもなく、頼れるシャーマンも知らない。二点目。本書のまとめに対して私自身のために補足すること。

本書では「納得」という言葉と「現実を変える力」という言葉が、著者の主張をささえるキーワードとして何度も使われている。

喪失体験を物語ることで少しずつ自死の事実を受け入れ「納得」する。シャーマンとの交流や夢の中での再会は「癒し」となり「納得」を促す。そして「納得」することにより「現実を変える力」の萌芽を見出していく。

「納得」することは忘れることでももちろんないし、「これでよかった」と無理に合理化することではない。

自死遺族の心の傷が癒えることはない。時が経てば経つほど、懐かしくなればなるほど、悲しみも深くなる。

著者は遺族が自分なりに故人の自死の理由について「納得する」ことを一つの目標にしている。では「納得すること」はいいことか。日常生活もままならないような病気になってしまふのは確かに困る。しかし、本人でもおそろくなぜそうなってしまったのかわからないことを支援する側だけわかった風になるのは、遺族の心身を守るためとはいえ何かおかしい気がする。

著者もその点は注意深く説いている。それでも、「納得」という言葉の語感に引きずられて著者の意図を誤解する人もいるかもしれない。

私自身、最初に読んだときは著者に反発する感想を持った。もう一度読み直して、著者の言う「納得」が忘れることや無理に辻褄を合わせることではないとわかった。

「昔のことは忘れろ」という人がいる。「もう長い時間が経つのだからいつまでも下を向いていないで元気を出しなさい」という人もいる。余計なお世話と言いたい。

世の中には、何千年も前の墓や大昔の人々の暮らしを一生をかけて調べている人がいる。

会ったこともない、二千年以上前に生きた人の生き方や死んだ意味をまだ問い続けている人もたくさんいる。

それに比べれば、ごく最近亡くなった身近な人の生き方や死について、悔やんだり考えたり悩んだりすることは特別なことではない。

むしろ当然の心持ちと言えよう。

それは決して後ろ向きな生き方ではない。だから問題は癒しや納得をどう得るかではない。

問いかけるべきは日常のなかで、どんな風に故人を思い出し、悲しみとともに暮らしていくか、ということにある。

「現実を変える力」という言い方もよくされている。

「納得」にしろ、「現実を変える力」にしろ、悲しみに沈んでいる遺族が「物語る」経験を経て「癒し」を得て獲得するもの。言葉にならないような体験を言語化することで客観的なものとして自分に言い聞かせ、自分の心の糧とする。

私の理解では、著者の言う「現実を変える力」は、逆境を克服する「PTG」（心的外傷後成長）のような強いものではない。

著者は、自死遺族の悲嘆がどれほど深く重いものか、よくわかっている。「納得」して消失するものでもなければ、乗り越えるようなものでもない。「現実を変える力」も多くの場合「力の萌芽」とかなり控えめな意味で使われている。悲しみに沈んだ暮らしを抜け出すという意味合いではないか。少なくともいきなり跳躍するような意味ではない。

だから著者は非常に慎重で、悲しみとともに生きていくことを目標としている。

生きている人と暮らしていれば、毎日の暮らしのなかで喜びを分かち合うこともあれば、すれ違いや衝突もある。もし死者が生者のなかで生きつづけるというのなら、それが単なる慰めの言葉ではなく本当にそうであるならば、大切な人を失くした悲しみだけではなく、大切な人とともに生きる喜びと一緒に憤りや悔しさがいつまでも残つてもいいのではないか。それがむしろ自然な姿ではないか。

副題に「再会までの対話努力」とある。死者は生者の心においても、なかなか出会うことはできない。悲しみに埋もれていても死者は見えないし、多忙な日常に溺れていては声も聴こえない。

辛い経験を語ることも失くした人を夢に見ることも、心が穏やかに落ち着いていなければできないことではない。

悲しみを「克服」して、新しいことに次々と関わっていく人もいるだろう。「レジリエンス」そのものを否定はしない。ただ、誰もがそう強く生きられるわけではないし、そうしなければいけないわけでもない、と私は思う。

穏やかな雰囲気の中で死者とともに静かに暮らす。そういう生き方があってもいい。

死者とともに生きる。悲しみを抱えたまま暮らす。言葉で言えてもどう言うことなのか、まだわからない。

簡単なことではない。きつとそうだろう。それでも、放置した悲嘆に心身が覆われて現在を生きることそのままなくなるよりは、過去を見つめること、悲嘆とともにに生きることとは、逆説的にはるかに未来志向と言えるのではないだろうか。

悲しみに終わりはない

本書の読後感は、感想を書き終えたいまも変わらない。

自死と遺族とキリスト教・「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ、土井健司編、新 教出版社、二〇一五

2/18/2018

本書のことは前から知っていた。出版された頃に、御茶ノ水のキリスト教専門の書店で見かけた。買わずに図書館に入るのを待っていた。いつまで待っても入って来ないので、久しぶりに銀座へ行った折、教文館で購入した。

買ってよかった。自死の現状、予防の諸活動、自死遺族のグリーフケアについての最新の知見、自死者の葬儀など具体的な活動が書かれている。最終章はプロテスタント系キリスト教の精神史の視点から「自死」と「自殺」の違いを再考する。章立ては十。

興味を引いた章について感想を書いておく。

「第4章 葬儀社から見た自死の問題」（安宅秀中）。現場にいる人だからこそ観察できる遺族の苦悩と動揺。悲しみに打ちひしがれている遺族を支えて、葬儀という儀式を通じて社会的な意味づけをすることで、「公認されない死」とも言われる自死を遺族が属する社会に自死者が生きた事実を「公認」させる葬儀の役割。葬儀社の細やかな配慮に感心した。

この章で取り上げられているエンバーミング（いわゆる死化粧）と湯灌（葬儀前に湯で清めること）を最近、体験した。確かに綺麗に清められた遺体を見ることは見送る心の整理のためにも大いに役立つ。遺体を見ることができなかつた死別は、いつまでも死の事実を受け止めることができない。

「第5章 この世の光になるために教会ができること」（藤藪庸一）は自死念慮者を保護して社会復帰を支援している牧師の活動。これまで教会とは「救われた人」が行く場所と思っていた。本当は「救いたい」人々が集まる場所ということに気づいた。このような活動に参加することは今の自分ではとてもできない。生命を救う仕事を当たり前のようにしている人に頭が下がる。

「自死遺族のグリーフケア」の章は、喪失体験に反応する悲嘆を受け止める過程について、最近の研究成果を紹介している。

従来、死別体験の後、いくつかの段階を経て悲嘆を「克服」すると考えられてきた。最近では、段階はあるにしても、死別体験者はそれを直線的に進むのではなく、往復したり、あるいは螺旋状に進むと考えられているという。怒りや自責、恥などの感情も抱える自死遺族の場合、その感情が辿る道は複雑なものであることは想像に難くない。

自死遺族へのケアとして「傾聴」が強調されている。これはすこし前に読んだ『自死遺族の癒しとナラティヴ・アプローチ』（吉野淳一）でも「教えてもらう」という言葉を用いて強調されていた。

ところが、この傾聴が難しい。聴くことが難しいだけでなく、話す方でも難しい。『自死遺族の癒しとナラティヴ・アプローチ』でも、遺族が「物語る」まで待つこと、話しやすい環境を作ることなど、さまざまな工夫や努力が必要と指摘されていた。

「公認されない死」である自死の遺族が抱える悲嘆は、いわゆるトラウマと同様「語る」ことが難しい。自分でも心のなかに答えの出ない問いかけが積み上がっていて、悲しみだけでなく怒りや悔しさなど多様な感情があるのに表には出ないことがある。

その結果、悲嘆の表出は「遷延」し「遅発」する。こうした悲嘆を「複雑性悲嘆」と呼ぶらしい。自死遺族の悲嘆は多くの場合、「複雑性」なのではないか。

「複雑性」といえば、被害者と加害者の両面を持つ「複雑性心的外傷」と通じる。遺族に悲しみと自責の念を残す家族の自死は「複雑性PTSD」を引き起こす可能性が高い。

死別体験から長い時間が経過し、遷延して心の奥底に溶け落ちた悲嘆の破片 (debris) をどうしたら拾い上げることができるのか、言葉にできるのか、誰かに聞いてもらえるのか、耳を傾けてくれる人はどこにいいのか。そうした問いには残念ながら本書は答えてくれない。

ただ、そういう悲嘆もあると知るだけでも安堵するところもある。特殊であつても異常なわけではない。

最後の第10章は、聖書研究者である土井健司が書いた「自死の何が罪とされてきたか」。この章はとても難しい。

最近では「自殺」という言葉の代わりに「自死」がよく使われる。「自分を殺す」のではなく、病気であれ経済的な困窮であれ「自ら死ぬ」ほどの苦しみが原因という見方が広く知られるようになったからだろう。

土井は「自死」という倫理的判断のない概念のなかにあえて「自殺」という罪深い概念を置く。「自死」と「自殺」とは同等でもなければ

対立でもない。「自死」の一部に「自殺」がある。

では「自殺」とはどのようなものか。トマス・アクィナスの議論を展開して土井は三つの関係性の否定に注目する。

自己愛の否定と自己保全の否定、自分が属している社会（他者）への害悪、神のものである生命を侵害すること（生命は人間にとつて所有物ではない）（後略）。

この考えに従うとうつ病や過労、いじめや体罰、パワハラに苦しんだ末に亡くなった人も「自殺」ととらえることになる。言葉を換えれば、倫理的判断のない一般的な概念として「自死」を設けた意味がなくなってしまう。この考え方は現代の風潮に明らかに反する。

どういう意図で土井はほとんどの「自死」を「自殺」とみなし、罪とみなすのか。

ここで土井は論理を転回する。

では関係性を損なうような自死、すなわち自殺は、どうして起こるのだろうか。（中略）一方があれば他方もあるのであって、自殺しようとする者の向かいにいる存在も問われることになるのではないか。

「むろん罪を犯すのは自殺者の方ではある」と自殺を罪とみなしたまま彼は続ける。

しかし、なぜその人が自らの生を求めないのか、また本当に神はその人の生を求めてはいないのか。そしてそれ以上にその人の生を「あなた」は求めないのか。また社会はその人に何も手を差し伸べないのか、こうした問題もあるように思われる。

聖書は自死は罪であるとは書いていない。それでもキリスト教の精神史を考慮すると「自殺を善とすることはできない」し、また「善でも

なく悪でもないものと考える」こともできないという。その上でキリスト教的視点から「自殺」について考察をまとめる。

また、たとえ誰かの自死がこのような自殺であるとして、遺されたわれわれはどうすべきだろうか。キリスト者としてわれわれのなすべきことは自殺者を断罪することなのだろうか。裁くことではなく、むしろ何とかして寄り添うことの方がはるかに福音的ではないのか。

この議論はわかりづらい。現代では自死は「自分を殺す」ことではないという理解が一般的になりつつある。神学者でも聖書に記述がないことから自死を罪と認めない人も出てきている。

そういう風潮の中で、あえて「自殺」を罪としたうえで自殺を生み出す社会に対し批判的な目を向けるという土井の論理は、俄かには同意しかねるが、ある意味、斬新ではある。

土井の主張を本章だけでとらえようとする¹と過激で反動的にさえ思われる。ただし、副題にある『「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ』を念頭にして読むと彼の議論はあくまでも「慰め」と「予防」のための論理であることがわかる。

とりわけ神学者である中道基夫が書いた、「第6章 自死者の葬儀と遺族へのケア」と重ねて読むと本書全体の主題でもあるキリスト教的な自死観がわかる。

中道は葬儀の宗教的な意味を重視する。

（葬儀におけるグリーンワークは）神が創られ、魂を与え、「よし」とされた人間が、愛する者との死別、特に自死を経験したことによって傷つけられ、損なわれた神の祝福を回復するプロセスとしてとらえたい。

さらに『終わりのなかに始まりが』（ユルゲン・モルトマン、新教出版社、二〇〇五）から「悪からの解放」という言葉を引用し、遺族と

自死者自身の宗教的救済が葬儀を通じてなされると説く。ここでも、自死は罪深い「自殺」とみなす一方で、それがゆえに、宗教的な救済を受ける契機となりうるという土井説と同様の論理の逆転が見られる。

聖書には「友のために自分の生命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ十五・十三）とある。確かに、暴走する列車を身を呈して止めた永野信夫は大きな愛を持っていたと言えるだろう（『塩狩峠』、三浦綾子、一九六八）。

では、収賄など政治的なスキヤンドルの渦中ですべてを知っているキーマンが、それこそ「罪」が仲間や派閥の領袖に及ばないように自ら口を封じる場合はどうだろう。

「友のために自分の生命を捨てること」に違いないとしても、「大きな愛」とは言えないだろう。むしろ社会全体で見れば「大きな罪」と言える。犯罪の事実が明らかになれば、亡くなった後でも訴追されることもある。

一つ一つの自死は、それ自体多くの面を持っている。判例のように分類しても、罪の有無を判断することは難しい。

そう考えると、自死の罪性は神が裁くものと放置するのではなく、一旦、すべての自死を罪とみなした上で、何が罪としての死をもたらしたのか、何がその人をそこまで追い込んだのか、一つ一つの事例を帰納的に考える土井の主張には一理ある。

とりわけ、昨今、注目されている過労やパワハラ、過剰な指導や体罰、いじめなどを原因とする自死については自死した者より自死させた者の罪を明確に犯罪として捜査する必要があると考える。

本書の結論は自死遺族にとつて「一つの見方」では済まない重みがある。倫理的判断から遠ざけられた「自死」は再び「罪のある自殺」と定義されて、さらにその罪を引き起こした要因の一つとして自分を見つめ直さなければならないのだから。

そして、死に追い込んでしまった自責の念は果てしなく深まる危険性もある。それでも本書で紹介されているさまざまな予防活動や遺族の支援活動はこの論理と矛盾していない。本書全体を通じて「自死」という人生の終わり方をキリスト教会全体で、そして社会全体で受け止める必要があるという姿勢が貫かれているからだろう。

本書に書かれているキリスト教の伝統に沿うような「自殺」観はすぐには理解できないと書いた。ここは「理解したくない」が正しいかもしれない。「罪があるからこそ救われる」という論理も私にはわからない。

多くを学ぶと同時に重い荷物を増やされたような読書だった。

自殺で遺された人たちのサポートガイド―苦しみを分かち合う癒やしの方法― (Healing)

After the Suicide of a Loved One, Ann Smolin, John Guinan, 1993) 、柳沢圭子訳、

高橋祥友監修、明石書房、二〇〇七年

2/25/2018

今月は自死と自死遺族に関する本を続けて読んでいます。『烏兔の庭』を始めた十五年前から自死に関連した本をいくつも読むことができました。不幸にも国内での自死が毎年三万人を越える事態となつてから、自死に関する本が増えた。同時に、「自殺」の代わりに「自死」という言葉が多く使われるようになった。

その嚆矢となつたのは『自殺つて言えなかった』（自死遺児編集委員会・あしなが育英会編、サンマーク出版、二〇〇七年）と書かれている。以降、国内外の専門書から新書まで、数多くの「自死」関連の本が出版されている。

特筆すべきことは、年間三万人以上の自死という社会現象だけではなく、自死が起きたあとに遺された遺族のサポートについて書いた本が増えていること。四十年前には考えられなかった。

実はこの本は前に読んだことがある。記録は残つていても内容はほとんど覚えていなかった。図書館で借りてきたときは前に読んだことも忘れていた。

あらためて、ほとんど初見のつもりで読んでみると、本書は自死遺族（サバイバーと本書は呼ぶ）の心理が細やかに記されている。自死で子を失くした親や兄弟姉妹を失くした人を何人か知っている。その人たちの感情がわからないときがこれまで何度もあった。

こんなときにどうして笑っていられるのだろうか？

墓参りをしているのにどうして故人を偲ぶ話を一つもしないのだろうか？

どうしてこんな小さな出来事で故人を思い出して泣き崩れるのだろうか？

それぞれは異常な心理ではなく、サバイバーがもつ自然な反応だった。

本書には、悲しみに飲み込まれないためにはいけないことと、故人と過ごした時間を大切な思い出にしながら生き続けるためにすべきこと、その両方が書かれている。

残念でならないのは、これまで「してはいけないこと」ばかりをしてきて、「すべきこと、した方がいいこと」をほとんどしてこなかったこと。そのせいで「苦しみを分かち合うこと」もできず、三十年以上も過ぎてしまった。長い時を無為に過ごしてきたことがさらに自分を責め立てるような気になる。

それでもサポートグループに参加してみようとは思っていないし、カウンセリングを受けてみようとも思わない。

ほかの人の話を聴けば苦しくなりそうだし、自死遺族としてカウンセリングを受ける前に、まず社会人として「うつ」から寛解しなければならぬ。

とはいえ、本書で挙げられている上手に悲しむ方法 (Grief work) ですでに実践しているものもある。一つは、こうして文章を書くことと もう一つは自死に関する本を読むこと。

とりわけ『谷間の女たち』（森山啓）と『死者と生者のラストサパー』（山形孝夫）の二冊には、「あなたは一人ではない」という本書がかかげる主張の一つを強く感じた。上手に思い出す方法についてもヒントを得られた。

サバイバーの悲しみ方はそれぞれで「回復・前進すること」（最終章）の道筋も一つではない。そう書いている。

そう考えると、これまでで苦しんできたことも、私なりの悲しみ方だったのかもしれない。そして、一度すれ違った本に再会して「悲嘆の作法」を知ったことも、ようやくその時が来たからなのかもしれない。

悲しむことと愛することは違います（第十三章 回復・前進すること）

この言葉は心に響いた。

巧く言い表せないけど、これまでとは少し違う気持ちを感じはじめている。

第六部の副題に我田引水すれば、苦しいだけの悲嘆に「終わりの始まり」が来た。

敦香祭

2/28/2018

三十七年前に亡くなった姉の五十六回目の誕生日。

俗名から一字、諡から一字とつて誕生を祝う日とする。

今月読んだ『自殺で遺された人たちのサポートガイド』（アン・スモリン、ジョン・ガイナン）に命日に悲しむより、誕生日に楽しかった「時」を思い出すことが「悲劇から有意義なものを生み出す」（第十三章 回復・前進すること）と教えられた。

もう一つ、今日を祝いの日にする気持ちにさせた一文を抜き書きしておく。

亡くなり方だけではなく、「その人生こそが記憶されるべきなのです」。自殺は人生を終わらせるものであって、人生全体を語るものではない。

まったくその通り。でも、そう思うことがなかなか難しい。自死は遺された者たちにとって非常に衝撃の大きな出来事のため、故人の人生すべてを覆っているように思いがちだから。例えるなら、たくさんの足し算や掛け算をした最後にゼロを掛けたような気持ち。災害や事故、犯罪などにより、突然、身近な人を失くした人にとっては、なおさらそうだろう。死の受け止め方を変えるのは容易ではない。

自死について

6/6/2018

自死は、一部の例外を除いて多くの場合、「無責任な人が取った愚かな選択」ではない。

追い詰められて追い詰められて、もうそれしか選択肢がないほど視野が狭くなってしまった人に「起きる」事故。私は密かに「心の交通事故」と呼んでいる。

「絶対にしてはいけないもの」と考える人がまだ多いのは残念でならない。

フィルムコンサート思い出

10/7/2018

一九八〇年十月七日、さだまさしのフィルムコンサートへ行つた。場所は山下公園前の神奈川県民ホール。

この頃、さだまさしはあとで大きな借金となる映画『長江』を撮影するために長く中国に滞在していた。そこでコンサートの代わりにコンサートの映像を各地で見せていた。ライブはアルバム「印象派」が発売される直前。

コンサートは二人で出かけた。二人だけで出かけたのはきつとこれが最初で最後だった。確か、このイベントは私がねだって行つたもの。さだまさしはオフコースと同じくらい、二人とも好きだった。この日はとても元気そうに見えた。記憶には楽しい一日が残っている。「楽しかった」と遺された日記にも書いてある。「道化師のソネット」が好きだったということも日記には書いてある。

「あの頃」、二人の心は通い合っていた、今でもそう信じている。

本当は、磨り減つたか細い神経の上を綱渡りのように歩いていた。一步、踏み間違えれば真つ逆さまに落ちてしまうような、そんなところまで来ていた。十二歳だった私はその危険に薄々気づいていながらも何も言葉にはできなかつた。

心配している

その一言が言えていたら、その後の人生はまったく違うものになっていたかもしれない。

あるいは、「あの頃」はすでに「終わりの始まり」にいて、終わりが来るのは時間の問題だったのかもしれない。

残された時間がもう少ないことを、私には知るよしもなかつた。

いまの暮らしが不幸というわけではない。それでもときどき人生をやり直しなくなるときがある。やり直す地点もはつきりわかっている。

三十八年前の今日、一九八〇年十月七日。

この映画は『里程標』という名前が後になってDVDで発売された。今も中古品を買うことはできる。
この日の記憶をそのままにしておきたくて、DVDは買っていない。

美しい自死なんてない

1/24/2019

「覚悟を決めた自決」なんてない。「美しい自死」もない。

あるのは、傷つき、すり減り、追い詰められ、滅びていく精神と「死」の先にしか救いを見出せないほど狭くなった視界だけ。いまだに自死を美化した文章が書き散らかされて、そのうえ賞賛されていることに怒りも悲しみも通り過ぎて反吐がでる。

敦香祭

2/28/2019

あの人がいなくなつたことを悲しむだけではなく（悲しむことも大切だから）、あの人がこの世界に生まれたことを祝いたい。

誕生日おめでとう。Happy Birthday!

まだ同じ「時」を過ごせたことに「ありがとう」と言う余裕もないし、声に出して名前を呼ぶこともできないけど。

今日、帰り道で聴いている曲。

道化師のソネット、さだまさし

童話作家、さだまさし

愛を止めないで、オフコース

言葉にできない、オフコース

君は天然色、大滝詠一

風の詩を聴かせて、桑田佳祐

ガーネット、奥華子

涙そうそう、夏川りみ

夕闇をひとり、松任谷由実

Loss of Love, Henry Mancini

Now and Again, Earl Klugh with Roberta Flack

Georgia on My Mind, Ray Charles

First of May, Bee Gees

Honesty, Billy Joel

Love of My Life, Queen

焦ることなく

言葉を紡ぐこと

音を立てずに

眠ること

絵のなかへ入っていくこと

散り散りになった想い出を

病んだ心に集めること

ともに悲嘆を生きるグリーフケアの歴史と文化、島蘭進、朝日選書、二〇一九

4/14/2019

島蘭進は宗教社会学の泰斗。前に『日本人の死生観』を読んだことがある。本書はその続編にあたるという。

「グリーフケア」を学ぶ人にとっては格好の入門書。選書とはいえ、参考文献も掲載されていてかなり専門的。特にグリーフケアにおいて宗教的、スピリチュアルな側面の重要性を説く第二章とグリーフケアの理論の歴史をまとめた第三章は、著者が持つ膨大な知見が凝縮されていて読み応えがある。

私個人の感想を書く。「ともに悲嘆と生きる」という副題から予感していた通り、本書の内容は私の期待していた「悲嘆とともに生きる」ではなく、いささか当てが外れた。これが正直な感想。これについては最後に書く。

「悲嘆」を通じて現代社会で失われてしまった人々のつながりを再生する。宗教者はその仕事に大きな役割を果たす。既成の宗教が形骸化した現代にあっても、人々はスピリチュアルなケアを求めているから。著者はそのように考えている。敗戦後、「民主主義」を旗印に社会の再構築を模索した昭和の知識人たちのように。

悲嘆のなかにある孤独な個々人がどのように気持ちを分かち合う場や関係をもちうるのか、これを問うことがグリーフケアの主要な課題となることがわかるだろう。グリーフケアは個々人の心に分け入っていく「この世界の片隅」の事柄であるとともに、共生のあり方を問う倫理的、社会貢献的な企てでもある。（第七章 戦争による悲嘆を分かち合う困難）

日本には「悲嘆」を通じてきずなを深める宗教的な文化とその歴史がある。死者とのつながりを保つ盆や法事がそれにあたる。それを基にして現代で積極的に活動する宗教人たちもいる。

「悲嘆」を通じて人と人とのきずなを深めて、「悲嘆とともにする新たな文化や社会性」を再構築する。それはけっして夢物語ではない。

著者が紹介する多くの事例が実現性の高さを物語っている。

事故や震災など集団で同時に悲嘆を抱えた人たちの間ではそうした機運が高まっている。

その一方で、事件や自死で遺された人たちは、一部の自助グループを除いて孤立している。集団で被害を受ける事故や災害と違い、犯罪や自死は死別そのものが個人的な体験だから。なかでも自死による死別体験は未だに偏見の目で見られることもあり、宗教的には大罪とみなす見方も依然としてある。

犯罪被害者や自死遺族は悲嘆を分かち合うことができるのか。絆を構築できるのか。私の思考はそこで立ち止まってしまう。

著者も現代社会において悲嘆のあり方は個人によりさまざまであり、容易に社会性を持たせることの難しさは承知している。

現代社会では個々人が置かれた立場が異なり、どのような死別や喪失であるにせよ、まずは孤独な悲嘆に苦しむことを当然と考えてよいような社会環境が広まっている。多様性を意識し、異なる個人同士という前提をさしおいて、悲嘆の共同性をよびさまそうとしても無理がある。お互いの悲嘆が胸に閉じ込められてしまう孤独を避けられないことを踏まえて、悲嘆に向き合うことが求められている。(第七章 戦争による悲嘆を分かち合う困難)

悲嘆は個人的で孤独な体験。「だから」分かち合えない、とみるか、「それでも」、歴史と文化の遺産と新しい試みを見れば悲嘆を通した共生が可能である、と考えるか。楽観的ではないにしても希望を込めて著者は本書を締めくくっている。

私と著者の意見はそこで分かれる。

ここから先は本書とは直接関係のない、私のつぶやき。

最近、ある決心をした。リアルな世界で自分の悲嘆は語らない。

私が抱えている悲嘆はあまりにもこじれていて、また長らく封印されていたために、今となっては涙でも言葉でも発露することができないほど凝り固まっている。

溶け落ちた核燃料の欠片にはもう誰も手で触れることができないように、私の悲嘆でありながら、それに触れることは私にさえできない。

このような心境を「複雑性悲嘆」と呼ぶのだろうか。そうかもしれない。しかし見方を変えれば、むしろ単純に見える。私が複雑な悲嘆を抱えているのではなく、ただ一つの悲嘆が私の全身を包み込んでいるのだから。

「悲嘆とともに生きる」ところから「ともに悲嘆と生きる」ところへ少なくとも今の私は進むことはできない。

リアルな世界で私が悲嘆を語ることはない。誰かと分かちあえるとは思っていないし、誰とも分かち合いたくない。これは、私だけの秘密にしておきたい。

その代わりに、『烏兎の庭』では少しずつ私を包んでいる悲嘆について書いていきたい。ここだけが、それを許された場所と思っている。すでに『庭』をはじめた頃には書けなかったことを、第五部からは書いている。私にとってグリーンフケアはセルフケアであり続けるだろう。

悲嘆学入門 死別の悲しみを学ぶ、坂口幸弘、昭和堂、二〇一一

4/28/2019

『ともに悲嘆を生きる』（島蘭進）に参考文献として挙げられていた本。入門、と銘打っているだけあって悲嘆に関する研究について網羅している。

人は必ず死ぬ。そして、人は生きてあるあいだに必ず身近な人の死を体験する。死別体験は誰にでもある普遍的な出来事。ただし、誰もが同じ心境を経過するわけではない。故人とのつながりを感じながらすんなりと日常生活に戻る人もいれば、長い間、悲しみや苦しみを抱えて生きる人もいる。

人はどのように死別体験を過ごすのか。大事なく過ごせる体験と長引く体験では何が違うのか。そして、重く長い死別の悲しみを和らげるためにはどんな手立てがあるのか。悲嘆学はそういうことを研究する学問なのだろう。入門書を読み終えてそう思った。

『ともに悲嘆を生きる』にも書かれていたように日本には死別体験について独特な文化がある。本書でも一章を割いて概説している。

「死体」という即物的な言葉とは別にある「遺体」という言葉。遺骨へのこだわり、盆の儀式、墓参りの習慣などなど。

墓参りについて、若い頃には強い抵抗があつてすることがなかった。「死」そのものを受け入れられずにいたせいもあるし、歌の歌詞ではないがそこにいるとも思えなかった。でも、心境に変化があり、数年前から機会があれば墓参りをするようになった。

亡くなった人と会うことはできない。でも、もし、その人がまだ生きていたら食事を共にしたり話をしたり、同じ時を同じ場所で過ごしていただろう。墓参りというある時間をその人を思うためだけに使うことであり、それはその人が生きていたらともに過ごしていた時間を経過すること、とても意味のある時間の使い方に思うようになった。

心に残ったことを二点。

本書は、悲嘆の緩和について研究史を紐解きながら、階段を順序よく登るように進んでいく一方的な「グリーフワーク」を否定している。学問としていくつかの類型を観察することはできるにしても、現実には悲嘆との付き合い方は人によって違う。

また、レジリエンスをPTG（心的外傷後成長）のように過度に積極的な意味の「成長」とはとらえずに、「適応」というやや中立的な意味合いを込めて捉えていることに共感を覚えた。

「レジリエンス」を得る人の多くは、喪失体験を消化できるだけの世界観や意味体系を既に保持していたために、あらためて意味の探求をすることなく、その事態にうまく適応できたと考えられる。（第10章 成長とレジリエンス、2.3 死別とレジリエンス）

寿命が長くなり、いわゆる「天寿を全うした」死を迎える人が多い。そういう場合、死別体験も穏やかで受け止めやすいものとなる。「死」とは、人が必ず通る普遍的な経験。その一方で、災害、事故、自死、犯罪、いじめ、過労死など、簡単には受け容れられない死別体験が日々、続々と報道されている。問題はこのような辛い死別体験から生まれる悲嘆。本書では「複雑性悲嘆」と呼ばれている。

「複雑性悲嘆」には、どのように対処すればよいか。著者がまとめている治療方法を列挙しておく。

- A 患者の死別体験とその影響に関する話し合い
- B 悲嘆に関する心理教育
- C 悲嘆・感情モニタリング
- D 重要な他者（キーパーソン）との面接
- E 個人的人生目標に関する話し合いと課題設定（モチベーション強化）
- F 死別後に回避している状況への再訪問（実生活内暴露）
- G 死別体験の記憶への再訪問（イメージ暴露・死と遭遇した場面の想起と陳述）
- H 故人の思い出の振り返り
- I 故人とのイメージ対話

（第七章 複雑性悲嘆、4 複雑性悲嘆の治療）

私にできていることは多くない。悲嘆に関する本を読むことだけはたくさんしてきた。それ以外はまったくできていない。試みたところでまだ苦しくなるばかり。

見方によっては「実生活内暴露」は実践できている、一人で餃子を作るたびに。

あらためて自分が抱えている悲嘆が「複雑」で「慢性的」で「遷延的」であることを知らされた。

希死念慮について

5/30/2019

希死念慮は寄せては返す波のよう。

突然、自分の背丈より高く勢いをつけて襲ってくることもあれば、思わず裸足になって遊びたくなくなるようなさざ波にに会うこともある。

高潮の来ない内海に住む人もいる。私は毎週台風が来る島のような所に暮らしている。

立ち向かうことはできない。やり過ぎすしかない。

前にも書いた。希死念慮とは「もう死んでしまえそう」という強烈な不安や、「どうにでもなれ」という自暴自棄や「自分には生きていく資格がない」という過剰な自罰意識の表れであり、「死にたい」という意志ではない。

希死念慮は知らないうちに消えてしまう、と諭す人がいる。正しいと思う。でも、慢性の希死念慮というものもあると思う。

「あの世」があり、そこに「あの人」がいるのなら、いつ行ってもいい。

そんな気持ちはずっと心の片隅にある。

「この世」で暮らすことが嫌なわけではない。「あの世」があることも、そこで再会することも、何の保証もないことも知っている。ただ、死の向こう側に希望を捨てられない。

グリーフケアの絵本

1/25/2020

悲嘆を主題にした絵本は意外なことに少なくない。死別は人間の宿命だから。

絵本といっても大人が読んでも有益な、むしろ大人が読んだときにグリーフケアの助けになる絵本がある。

これまでに読んだ悲嘆の絵本を挙げておく。英語の本が多いのは米国への出張土産に買うことが多かったから。

岸辺のふたり (Father and Daughter) / Michael Dudok de Wit / うちだやや訳 / くもん出版 / 二〇〇四

悲しい本 (Michael Rosen's SAD BOOK) / Michael Rosen文 / Quentin Blake絵 / 谷川俊太郎訳 / あかね書房 / 二〇〇四

The Saddest Time, written by Norma Simon, photographs by Jacqueline Rogers, Albert Whitman & Company, 1986

If Nathan Were Here, written by Mary Bahr, illustrated by Karen A. Jerome, Erdmans, 2000

ジェニー・エンジェル (Jenny Angel) / Margaret Wild文 / Anne Spudvilas絵 / もりうちすみこ訳 / 岩崎書店 / 二〇〇一

雨ふり花 / さいた、末吉暁子文、こみねゆら絵、偕成社、一九九八

星に帰った少女 (一九七七)、末吉暁子文、こみねゆら絵、偕成社、二〇〇三

私を知る日本語原作の作品では、あまんきみこ「すずかけ通り三丁目」が名作。「心から悲しめることが幸せ」を主題にしている。いくら時間が経っても悲しみは消えることはない。むしろ時を経て悲しみはより深くなる。

ただし、同じ悲しみでも、「上手な悲しみ方」というものはあるような気がする。いわゆるグリーフケアやグリーフワークと呼ばれる心理学的な行いが目指している場所は「上手な悲しみ方」ではないだろうか。上手に悲しむことができたとき、そこに逆説的にはあるが幸福感がある。なければならぬ。そうでなければ、悲しみは果てしなく、悲しみを抱えた人は永遠に幸福になれなくなってしまう。

そういう気持ちを「心から悲しめることが幸せ」と私は呼んでいる。私自身がいつもその境地に立てているわけではないけれど、そういう気持ちになれるときがごくたまにある。

好きだった人

2/28/2020

一九六二年、東京生まれ、横浜育ち、西宮に住んでいたこともある

お菓子をすることが好きだった

数学が得意で、共通一次の数学は満点だった

アムネスティの活動に関心を持っていた

物理にも興味があつてブルーバックスをたくさん読んでいた

中学では水泳部に、高校ではテニス部に入っていた

東京松本英語専門学校のナイトスクールに通っていた

小学校は東京都大田区で梅田小学校に入学した

中学校は横浜市西区で軽井沢中学校に入学し、二年生の夏に転校して、横浜市金沢区で大道中学校を卒業した
転勤のせいで小学校は三校、中学校は二校、通った

高校は横浜市立金沢高等学校に入学、卒業した

大学は横浜国大と国際基督教大学(ICU)に合格してICUに入学した

趣味は、音楽を聴くこと、読書、ピアノ、お菓子を つくること

好きな花は、沈丁花、金木犀、黄色いバラ

好きなことは、泳ぐこと

好きなものは、甘いもの

愛読書は『赤毛のアン』シリーズ

好きな人は、田中星児、アン・シャーリー、ギルバート・ブライス

好きな音楽は、さだまさし、オフコース、Billy Joel、Bay City Rollers

「道化師のソネット」(さだまさし)が好きだった

文庫本になっている夏目漱石と芥川龍之介作品は、高校生のあいだにすべて読んでいた
生真面目な面とは別に、茶目つ気の一面もあった

神奈川県民ホールへさだまさしのフィルム・コンサートを二人で観に行った

テレビ番組『コスモス』を夜遅くまで二人で見た

明日香村を奇石を探して一緒に歩いた

庭で水遣りをしながらふざけて遊んだ

一緒に餃子を作った

私は、七歳年上のその人のことが大好きだった

今もその気持ちは変わらない

いつまでも私の「特別で大切で」(奥華子)、憧れの人

今日は、敦香祭

今年はお梅で祝う

誕生日、おめでとう

もっつーのAで始まる日記

9/19/020

『アンネ・フランクの記憶』（小川洋子、一九九五、角川文庫、一九八八）はよい本だった。でも、いま『アンネの日記』を読み返そうという気にはならない。

私には、別の、読み通さなければならない日記がある。

それは出版されたものではない手書きのままの日記。書き手は十九歳の誕生日の直前に亡くなった、女性と呼ぶにはまだ若く、少女と呼ぶほど幼くはなく、大人への階段を上っていた人。日記は、中学三年生の冬に始まっている。

日記は一九八一年二月で途切れている。

大学ノートで十三冊。小さくて四角い文字でびっしりページいっぱい書き込まれている。

この日記は三年前に亡くなった父から預かった。正確には、父が亡くなったあと、洋服ダンスの奥で見つけた。それまではずっと燃やしたものと思っていた。手に入れてすぐ読んだ。そのときは激しく感情が揺さぶられて、読み進めることは辛かったけど、ともかく最初から最後まで読んだ。

一度目に読んだときの衝撃があまりにも大きくて、今、もう一度読み返す気になれない。

アンネの日記は最初からいつか公開するつもりで書かれた。だから下書きと推敲を重ねた清書版がある。

手元にある日記は公開されることを想定していない、むしろ誰にも読まれないことを願いながら書かれた。

でも、この日記をこのままにしておいてはいけなとも思っている。

もう一度、読まなければならない、真剣に向き合って。

私の残りの半生はそこに費やされるかもしれない。

カミングアウトについて

10/21/2020

カミングアウトして疎んじられ、告白をして自己嫌悪して、それを繰り返すと「二度と告白しまい」と堅く決心してしまう。

私は自分が何者であるか、どういう境遇の人間であるか、二度とカミングアウトしない。一つの言葉で自分を縛りたくないから。もつとも、私が書いた文章を読めば、私がどんな境遇にある人間かはすぐにわかる。

その意味では、私の文章にもツイートにもタグはいらない。どの文章も、同じことについて書いているから。

だから、カミングアウトを意図しないのではない。その必要がないからしない。

それでもまだわかってもらえないなら、わかってもらえるまで書くしかない。

親と死別した子どもたちへ — ネバー・ザ・セイム 悲嘆と向き合い新しい自分になる — (Never

the Same: Coming to Terms with the Death of a Parent, Donna Schuurman,

2003)、松下弓月監訳、西尾温文ほか訳、島蘭進監修、佼成出版社、二〇一〇

11/22/2020

ずっと探していた本にようやく巡り合ったような気がする。

親でなくても身近な人を失くした経験、とりわけ若い頃に死別体験のある人にとって有益な一冊。

本書を見つけたのは図書館の心理学の棚。監修者がグリーンフケアにも力を注いでいる宗教学者、島蘭進だったので興味を持ち借りにした。島蘭の著作『ともに悲嘆を生きるグリーンフケアの歴史と文化』は読んだことがある。

帰宅して、解説、訳者あとがき、監訳者あとがき、それから、「はじめに」と題された前書きを読んだ。この本は私のために書かれた本と
いうことを確信した。「はじめに」にある「親との死別後の経験に関するセルフチェック」にある二十五個の質問を読んだ。そのすべてに思い
当たる節があった。そのような読者に対して本書は提案する。

これから数日間、予定していたあらゆることを中止して、ひとりになる時間をなんとか作ってください。そして、この本を読んでくだ
さい。きつと物事を良いほうに大きく変える助けになるはずです。あなたのまわりの方たちとの人間関係が良いものになるかどうかは、
あなたの自分自身との関係が、どのようなものなのかにかかっています。そして、あなたにはまだ手付かずのままになっている、とても
大切なあなたの一部があるはずです。

この言葉も私に宛てて書かれたように思う。

“Never the same”という書名に著者の思慮深いメッセージを感じる。

死別後、周囲の大人は「何も変わらない、今まで通り」と取りつくろい、説き伏せようとする。もう何もかも、今まで通りではないのに。その痛みに寄り添ってほしいのに。

本書は買って読むことにした。急いで読みたいのでネット書店に注文をしたところ。

時間をかけて熟読し、提起されている課題を試してみようと思う。

本書の感想は、よく考えて来年二月にその時の気持ちと合わせて書く。

悲しみの乗り越え方、高木慶子、角川ONEテーマ21新書、二〇二一

2/5/2021

『グリーンフケアの時代・「喪失の悲しみ」に寄り添う』（島蘭進、鎌田東二、佐久間庸和、弘文堂、三〇一九）で紹介されていた本。著者は執筆当時、今は島蘭進が職にある上智大学グリーンフケア研究所所長。高木の著作では『グリーンフケア入門』を読んだことがある。

悲しみを隠さず、話したり、ときには泣き叫ぶことさえグリーンフケアの効果があると言う。全身全霊で泣くことの効用は、『癒しとしての痛み』（二二・レイク）にも書かれていた。ただし、と注意書きが続く。

やたらと誰にでも想いをぶつけるのではなく、自分の話をきちんと受けとめてくださる方に話をするということが大切です。（「終章 悲しみの乗り越え方」）

そういう人が身近にいない。精神科医は体調重視で心の中まで聴いてくれない。自助会も、何となく二の足を踏んでしまう。結局、自分で書いた文章を一人で読み返すだけ。

お金を払って傾聴の専門家に聞いてもらうのがいいのか。

医師は「カウンセリングにはまだ早い」と言うだろう。自分でもそう思う。

話を聴いてもらいたいと思う一方で、自分でも整理できていないことを心の中に踏み込んで訊かれたくない気もする。それとも専門家は、私を傷つけずに上手に私の心の奥底を整理することを手伝ってくれるのだろうか。

悩む。

寒梅忌

2/6/2021

七歳離れた姉、敦子が亡くなってから四十年が経った。一九八一年二月六日、姉は亡くなった。

二月二十八日に十九歳になるはずだった。

懸念されていた事態であったと同時に、突然に起きた不慮の事故だった。

あるいは、悪い時に悪い所で起きた「心の交通事故」とも言える。

先は長くなかったかもしれないけど、あんなに突然、いなくなってしまうなんて、思ってもみなかった。

今年は今までは違う気持ちでこの日を迎えている。それについては明日、一冊の本の感想を通じて書く。

親と死別した子どもたちへ — ネバー・ザ・セイム 悲嘆と向き合い新しい自分になる — (Never

the Same: Coming to Terms with the Death of a Parent, Donna Schuurman,

2003)、松下弓月監訳、西尾温文ほか訳、島園進監修、佼成出版社、二〇一〇

2/7/2021

昨年十一月に図書館で借りた本。とても有益な内容だったので、熟読するために購入して読み直した。

これまでに「死別」や「悲嘆」(Grief) についての本を数え切れないくらい読んできた。「悲嘆」について、一通り理解しているつもりでいた。でも、そうではなかった。

私は一番肝心なことに気づいていなかった。本書を読んでようやくそれに気づいた。

これまで私は、四十年間、「なぜ亡くなったのだろう」ということばかり考えていた。その答えはどれほど考えても見つけられない。書き残したものを読んでもわからない。きつと本人にもわからないだろう。それは心の交通事故だったのだから。

私が考えるべきことは「なぜ亡くなったのか」ではなく「失った私はどう思ったのか」ということだった。本書がそれを教えてくれた。

自分はどう感じたか、どう受け止めたか

自分は周囲にどうしてほしかったか

自分はどう変わったか

喪失体験はその後の人生と自分の性格にどんな影響を与えたか

自分はその喪失に何を見出したのか

これからどんな思いで悲嘆とともに生きていくのか

そんなことはこれまで考えたことがなかった。本書を読んで、そんな当たり前とも言えるようなことに気づかされた。なぜ、これまでは「自分」について考えてこなかったのか。自分のことなのに。不思議でならない。

‘Never the same’という原題にハッとさせられた。いままでと同じはずがなかった。それなのに、周囲の大人たちは「今までと何も変わらない」と言い聞かせていたし、それだから、自分自身でもそう思おうとしていたし、そう振る舞っていた。

本書は、「悲嘆」に対する考え方に「コペルニクスの転回」をもたらした。私は、何よりも自分のことを考えなければならない。そうしなければいつまでも後ろ向きのまま、未来に向かって生きることなどできるはずがない。

なぜ、こんな基本的なことに気づかないまま、四十年も過ごしてしまったのだろう。今さら悔やんでも仕方ない。これからのことを考える「時」がようやく来た。そう考える。

これまでの読書や思索、文章を書いてきたこと、その積み重ねがこの本との出会いにつながった。そう思うことにする。いま書いたように、本書は「悲嘆」と主体的に向き合うことを積極的に提案する。

「主体的に向き合う」とは「悲しみ」をどうやって克服するかを模索することではない。「悲しみ」を抱えて自分はどう生きてきて、あるいは、どう生きることにつまづいたのかを考えること。そして死別体験に自分なりの意味を見出し、これからどう生きていくかを考えること。

その第一歩として、冒頭で本書は多くの「悲嘆」関連本に書かれている段階説を否定する。これだけでも、その種の本に否定的な人も何か違うと感じるのではないか。理論はあくまでも理論、調査はあくまでも調査。個人の生き方は、それらを参考にすればよいのであって、それに当てはめることはない。

段階説にとらわれるな

思い切ってそう言ってくれると、とても安心する。

それ以降も、本書は遺族自身の立場に立った実践的なアドバイスや考える課題が続く。

一つ一つの課題を読んでいると、自分は「悲嘆」に沈んでいただけで、「悲嘆」と向き合ってこなかったことがわかる。きちんと向き合わないことを本書は「回避」と呼んでいる。

それは、喪失があまりにも衝撃的だったせいでもあるし、周囲から有益な支援を得られなかったせいでもあり、目先の現実に引きづられてきたからでもある。

喪失体験の直後は「大人たち」の指示に従うしかなかった。一日休んだだけで学校へ戻り元通りの暮らしを再開し、二ヶ月後には中学校に入学した。その後も、中学の部活動があり、高校生活があり、高校生活から大学受験まで、あつという間に時が過ぎていった。

目まぐるしく現実の生活が回りはじめ、悲しんでいる場合ではなかった。少なくとも、そう思っていた。「悲嘆」を隠し、押さえ付けて、その状態のまま十代を過ぎてしまった。

大学卒業後も同じ。二十二年間の間に六回転職をして七社で働いた。その間に結婚し、子どもを授かり、育ててきた。

本書を読んだ今、ようやく自分の半生が主体的ではなかったことがわかった。あるいは、主体的であろうとしても空回りばかりしていた。もちろん、失敗ばかりだったというわけではない。出逢いに恵まれ、結婚して子どもも授かった。転職をするたびに収入は増えていった。

「悲嘆」を忘れたわけではなかった。ただ、問題の立て方が間違っていた。

「なぜ」ということばかり、ずっと考えていて、自分の「悲嘆」にきちんと向き合うことはなかった。

自分が抱えている「悲嘆」に気づきはじめてしたのは、文章を書くようになってからだった。

書きたいことはあるのだが、書けることではないのだ

『庭』をはじめ直前に、そう書いている。

それから、さまざまな本を読み、あちこちへ出張や旅をしながらいろいろなことを考えた。そうするうちに「書けることではない」ことを

少しずつ、最初は曖昧で遠回しに、それから段々と核心へと文章は進んでいった。

それでもなお、自分の「悲嘆」をどう表したらよいのか、わからなかった。感情に任せて文章を書いて、その場では吹っ切れた感じがしたこともあった。実際には、「悲嘆」の核心まで思索は届いていなかった。

本書を読みながら「こういう点を考えるべきだった」「こういう見方をすればよかった」と目から鱗が落ちるような気に何度もなった。

死別体験後、私が望んでいたこと。後から気づいたこともある。どう助けを求めたらいいのか、その時にはわからなかった。

今ならわかる。こうしてほしかった。

最後にお別れをしたかった（傷跡があるから見ない方がいいと言われた）

学校へ戻る前に、もつと長く休みたかった

何があつたのか、教えてほしかった

何があつたのか、親しい友人たちに伝えたかった

親しい友人に悲しい気持ちを打ち明けたて、慰めてほしかった

励ますのではなく、慰めてほしかった

まるで最初からいなかったかのように扱うのではなく、故人の話をもつとしたかった

遺品をもつと大切にされたかった（するべきだった）

思い切り、人前でもいいから泣きたかった

「今まで通り」とは言つてほしくなかった

今から、時を戻してこれらのことをすることはできない。せめて、文章という虚構のなかで追体験していきたい。

私が言う文章とは小説ではない。自己を省みて書きつづる私的なエッセイのこと。

最後に本書が提示する、新しく生きるために試すべき十の「実用的な提案」を転記しておく。すべてをする必要はない。自分に合ったことをすればよいと著者は助言している。

- 一 必要な情報を手に入れる
- 二 故人との絆を保つ
- 三 追憶のための儀式や伝統を守る
- 四 書き出す
- 五 表現アート
- 六 思い出の品をまとめる
- 七 何か良いことを形にする
- 八 ボランティアをする
- 九 セルフケアをする
- 十 自分の物語の意味を見つける

一についてはこれまでの読書の蓄積がある。二は、思い出の品を『庭』にもいくつか掲載した。三は、墓参りにも行くようになった。四と五はまさに今している。六は多くは残されてはいないけれど、彼女が書いた日記は手元にある。

七から先ができていない。八は現在の私には難しい。九については読むことと書くことがうまくいったときに、セルフケアと感ずることがある。十はまったく手付かず。

ボランティアについて言えば、文章を書くことは自発的に、外の世界に向けてしていることなので、ボランティアと言えないこともない。

本来であれば、専門のカウンセラーに話をしたり、自助会に参加するのがよいのだろう。そういう余裕は経済的にも心理的にも今はない。

いまは二〇〇七年から二〇一四年までの倒錯した労働のなかで心を蝕んだ不安とうつを退治し、崩壊した自尊心——自己肯定感と呼んでもいい——を取り戻すことが先決。

今の脆弱な心境のままカウンセリングを受けることにはかえって心理的な崩壊をもたらすリスクがある。実際、心の準備のないままカウンセラーに会って混乱した体験があり、恐怖心が残っている。

二年間休養して、負担の少ない仕事に再就職して、ようやく寛解が見えてきたところ。

その治療を焦らずに進めて、自分の「悲嘆」と向き合うことも少しずつ始めたい。

人生は長い。そんな風に思ったこともこれまでなかった。これからもまだ続いていく人生を実りの多いものにする「新しい自分」になれるように生きていきたい。

少し古い文学的な言葉を借りて「新生」と言ってもいいだろう。

「悲嘆」との向き合い方が転回した今、私の「グリーンフケア」はようやくはじまる。

自助グループについて

2/25/20221

自死遺族の自助グループが数多くあることは知っている。

自助グループに関心を寄せ、参加を考えたこともあるが、結局できずに今に至る。

死別体験から四十年以上経ち、遷延した、いわゆる複雑性悲嘆を抱えていると、同じ境遇と言っても、他者のいる場で語ることにまだためらいがある。生々しい体験談は本でも避けているので、聞くことはもつとできないだろう。

自死遺族が集う掲示板には何度か書き込みをしたことはある。最初に書き込んだときには主宰者の方から返答があり、うれしかったことを覚えていた。それでも、掲示板の常連にはならなかった。

本を読み、文章を書く。セルフケアが、私のような境遇の者には向いているだろう。

つまり、自分の悲しみは自分自身で癒すしかないということ。

敦香祭

2/28/2021

一九六二年に生まれた姉の五十九回目の誕生日。白ワインで祝った。

姉が元気でいたら、どんな間柄になっていただろうか。

義兄がいただろうか。甥や姪がいただろうか。

そういうことは、今まで考えたこともなかった。

今年はなぜか、そんな妄想をしても悲しい気持ちにはならない。

私の悲しみはこれまでとは違う、新しい局面に入ったのかもしれない。

いくつになっても、たとえ亡くなっても、誕生日を祝いたい。

“Michael Rosen's Sad Book”にもそう書いてあった。

宗教界では、宗祖の誕生日を二千年以上経っても祝っている。

君の臍臓をたべたい、住井よる原作、吉田智子脚本、月川翔監督、浜辺美波、北村匠海主演、東宝、二〇二七

5/9/2021

風変わりなタイトルは前から知っていた。それが気になって映画通の知人に訊いてみたところ、いい作品と勧められたので連休の間にしてみた。

いい作品だった。フィクションの死別は好きではないのに、なぜか、嫌な雰囲気は残らなかった。ファンタジーのような雰囲気、設定も展開も人物の造形も現実味がまったくないから、かえって物語として嫌味がないのかもしれない。

設定が現実離れしている一方で、春樹が現実を受け入れるまでにひと月かかるところや、『共病文庫』を読み終えて、桜良の母親の前で、こらえきれずに号泣するところなど、悲嘆に関わる場面は非常に自然で誇張もなく、丁寧に描かれていた。脚本家も監督も、悲嘆という情動をよくわかっていると思った。

春樹が十二年経っても悲嘆を克服できていないことにも共感した。安易に劇中で乗り越えてしまう話が多いから。実は原作もそう。物語を終わらせるために、作者は焦ってしまうのかもしれない。この作品では、悲嘆は克服されず、物語のあとにも継続する。むしろ、春樹の本当のグリーフケアは物語の終わりにようやく始まると言える。

作品を受け入れられたのは、悲嘆の描写が真に迫っていたせいかもしれない。

要するに、思っていた以上に私は引き込まれた。お涙頂戴の闘病物語でもなく、結末が透けて見える単調なラブ・ストーリーでもなかった。これからも、ときどき見返したくなる、味わい深い作品だった。

それでも、物語に飲み込まれることはなく、結局は自分の幼い頃の死別体験と比べながら見ていた。

あつけない若い生命の終わり。そういう出来事に遭遇したことがある。危うげな空気の中でも何とか繕いながら続いていた、ありふれた、

かけがえのない日常が突然終わった。

だから、物語の急展開にも驚きはなかった。そういう理不尽な出来事が人生にはあると、私は知っているから。もちろん、それを受け入れられるかは別の問題。

柄にもなく涙をぬぐいながら続けて二回見てしまった。それから、なぜかわからないまま、何度も見返した。

何度か見直していたら、桜良が亡くなった事実が、ボディブローのように重くのしかかってきた。どれほど無念だっただろう、天寿を全うできなかったことは。

退院した日、桜良は図書館に寄ってから、待ち合わせに行くつもりだった。図書館へ行った目的は、台詞にあるように借りていた本を返すことではなかった。遺書を書くためだった。何回か見直してようやく気づいた。やはり私には映画リテラシーが欠けている。受付に博多にも持っていた赤いリュックサックを置き、白いワンピース姿で書いている。気づくまでに時間がかかった。

図書館に立ち寄っていないければ、彼女は事件に巻き込まれず、春樹に会えていた。この世界には、そういう不条理が確かにある。

でも、図書館で書いた「最期の手紙」が恭子と春樹にとつて一生の宝物になった。人生には不思議な巡り合わせがある。「最期の手紙」のおかげで春樹と恭子は桜良の死という事実をようやく受け入れることができた。

もし、「最期の手紙」がなかったら、恭子も春樹も、この先、ずっと救いのない深い悲嘆の底を生きていかなければならなかっただろう。実際、二人は桜良を失くしてから十二年間、深い心の傷を負い、暗い悲嘆のなかを彷徨ってきた。

どうして家まで迎えに行かなかったのだろうか

春樹は何度も何度も自分を責めたに違いない。

映画について書きながら、私は徐々に現実へと引き戻されていく。自分が抱えている悲嘆について考えずにはいられない。

あの出来事も、不条理な悲劇だった。一度だけ読んでからしまったままの、父から受け取った「最期の手紙」を読み返してみた。

最期の日のページは真白だった。まだ書くつもりだったのだろう。生きるつもりだったのだろう。桜良のように、いずれにしても生い先は短かったのかもしれない。でも、最後は突然、訪れた。あの人は「きよなら」も言わずに、私の前から風が吹くように立ち去った。

あの人も自分自身と戦い、死の恐怖とも戦っていた。気まぐれなところもあったけれども、元氣なときには桜良に負けないくらいに明るいところもあった。弟思いの優しい人だった。憧れの人だった。

あなたのようにになりたい

意識して交流をした二年のあいだ、私はずっとそう思っていた。つい最近、それに気づかされた。

春樹のように私は甘かった。馬鹿だった。まだまだ生きていてくれると思いついていた。別れはいつ来てもおかしくないのに。かけがえない平凡な毎日を大切にすることを忘れていた。

春樹の言葉に心を動かされたのは、私が言えなかった言葉だったから。

生きていてほしい

ちゃんとそう伝えるべきだった。

できることなら、四十年前に戻って、この言葉を伝えたい。

悔しかっただろう。悲しかっただろう。もっと生きたかっただけなのに。

いや、ここでは自分の気持ちを書かなければならない。悔しかった。悲しかった。もっと生きていてほしかったのに。

私の分まで、生きて

桜良のようにあの人は私に託しているだろうか。未だに私にはわからない。「早く私のところへ来て」。そう呼んでいるように思うときもある。

私はまだ外の世界と関わりを持たずに偶像にすがりついて生きている。こっそり一人で『共病文庫』を開いては煩悶していた、十二年後の「最期の手紙」を受け取る前の春樹と同じ。

あの人にとって、私はどんな存在だったのだろう。あの人にとって「生きる」とは、どういうことだったのだろう。答えの得られないことばかり問い続けている。

問題は、私が「どう」生きていくか、ということであり、「なぜ」亡くなったのか、ではないのに。わかっている私はまだ「なぜ」にこだわっている。

目の前には白いページがあるだけ。

そもそも私はこの日記を読む資格を本人からもらったわけではない。読む資格があるのか、という疑問もまだある。

『共病文庫』をしめくくる手紙を受け取った春樹がうらやましい。

『君の臍臓をたべたい』に学ぶグリーンフワーク

5/29/2021

『キミスイ』は悲嘆を的確に描写している。

そして、悲嘆の緩和（克服ではない）についても細やかに描かれている。

以下、『キミスイ』に学ぶグリーンフワーク（喪の作業）。

気持ちの整理がつくまでは何もしなくていい

弔問や墓参は気持ちの整理がついてからすればよい

二人だけの思い出（秘密）を大切にす

泣きたいときに思い切り泣く（手放し泣き）

名前を呼びつづける

自分を呼んでいる声を聞き逃さないようにする

私はどれもできなかつたし、今もできていない。

最後のは願い。

『キミスイ』では、「最期の手紙」から桜良の声が聴こえてきた。

いつか私を呼んでいる声に気づきたい。

自死で大切な人を失ったあなたへのナラティブ・ワークブック、川島大輔、新曜社、二〇二四

6/12/2021

こういう本を買ってみた。まず後半の解説編を読んだ。グリーンフケアの最新の知見をまとめていて非常に有益。本書が依拠している理論。

近年、死別研究や死生学という学問領域において、「物語」の視点が重視されはじめていますが、ナラティブ死生学はとくに、生涯を通じた発達過程における。社会的文化的文脈や重要な他者との相互交渉を通じた、意味の再構成を重視します。また他者との対話を通じて、意味を再構成しようとする存在として捉えられます。(参照注省略) (2 本書の理論的・学術的背景について)

本書の意図する三つの「学びなおし」はわかった。

「学びなおし」は「再構成」「再構築」、と言い換えてもいいだろう。それぞれ、自分の言葉で言い換えてみた。

故人との関係の学びなおし↓死別体験の意味づけ

世界の学びなおし↓世界と両思い、世界への基本的な信頼の獲得

自己の学びなおし↓自己肯定感の回復

言葉ではわかったものの、一つ一つのワークは実際のぎつと見たかぎり、心理的な負荷が高そうなので、現在の心境のままでは、始められそうにない。

また、あまりにも時間が過ぎてしまったために、故人の交友関係のように、いまではもう調べようもないことも少なくなる。

とはいえ、こういう本を買ってみる気になったのは、著しく不安定な最近の心理状態のせいもある。いよいよこの問題を何とかしなければならぬときが来た、という気がする。

ここまで書いて、「書きたいことはあるのだが、書けることではないのだ」と書いた十九年前がはるか遠い昔に思える。
ゆっくりではあっても、着実に歩を進めてきた。

自殺者の遺族として生きる - キリスト教的視点 (Fierce Goodbye: Living in the Shadow

of Suicide, G. Lloyd Carr, Gwendolyn C. Carr, 2004) 川越敏司、新教出版社、11010

6/20/2021

二〇一一年九月に読んだ記録が残っているけれど、感想は書き残していなかった。

前回読んだときは、聖書研究者である著者が聖書それ自体には、「自殺は罪」と書いていないことを論証する部分だけを読んだ。その後で読んだ『自死と遺族とキリスト教』（土井健司編）で、教義としてはまだ自死はほかの死と区別されていて「罪」として扱われていることを知り、残念に思った。著者の立場は、まだ少数派ではないだろうか。その章を挟んでいる彼自身の自死の死別体験は、辛い気持ちになりそうでした。読まなかった。

今回は、今回は読まなかった部分をゆっくり読んでみた。どんなに篤い信仰をもっている人でも、自死による死別体験がもたらす悲嘆は、信仰をもたない人と同じということがわかった。同じように悲しみに打ちひしがれ、罪悪感に苛まれ、答えの得られない問いを続ける。

だから信仰には意味がないとは言わない。むしろ、著者は自死遺族は信仰によって救われるという強いメッセージを伝えようとしている。本書はエピソードでは信仰が悲しみを和らげたエピソードで締めくくられている。

キリスト教徒ではない私にとって教義が自死をどうとらえているかは直接的には問題ではない。それでも、世界的な宗教がいまだに公式の教義で自死を大罪とみなしていることには嫌悪感がぬぐえない。

私はいま、信仰と呼べるようなものは持っていないし、霊的（スピリチュアル）なものにも特段関心はない。だから、本書のように信仰を起点に悲嘆を緩和する道は選べない。

まず心理療法的な方法、それもカウンセリングのように誰かの協力を得るのではなく、自分一人で、自死遺族として、悲嘆とともに生きる道を模索する。

カウンセラー探し

7/14/2021

誰かに悲しみを打ち明けたい。そういう気持ちからグリーフケアを支援してくれるカウンセラーを探しはじめた。

公認心理師や臨床心理士などの公的な資格を持っていて、なおかつ、グリーフケアを得意分野と称しているカウンセラーは少ない。

あまり遠くても通えないし、あまり高くても賄えない。

そのうえ私の場合、事情がかなり込み入っているし、時間も長く経過している。ふだんは人に話さないような秘密でもある。それくらい、このことは心の奥底にしまつてある。

一言で言えば、複雑性悲嘆。

こんな状況、まず理解してもらおうまでに時間がかかりそう。「心の整理」なんて簡単にできそうにない。

だからこそ、専門家の助けを求めている。でも信頼できる専門家はすぐには見つからない。

当面は、読書とワークブックでセルフケアか。

大事なことを思い出した。今日は、大学時代の友人の命日だった。三十年経った。悲しみに変わりはない。

自死遺族として生きる 悲しみの日々の証言、若林一美、青弓社、二〇二一

7/17/2021

子を自死で失くした親たちのインタビューや文章をまとめたもの。著者の本は感想は書き残してはいないけど『自殺した子どもの親たち』（絶版）を読んだことがある。大きく影響を受けた『死者と生者のラスト・サパー』（山形孝夫）を教えてくれたのはこの本だった。ほかにも、『いのちに寄り添う道』（NPO法人 生と死を考える会（田畑邦治理事長）編、一橋出版、二〇〇八）で彼女の文章を読んだことがある。

子を自死で失くしたあと、親はどのように生きていくのか。

悲しみを克服するのでもなく、乗り越えるのでもなく、悲しみとともに生きる。その道のりはそれぞれに違っていても、生き残った意味を見出した人たちの、ある意味、力強い言葉が本書にはあふれている。

本書を読みながら、気づいたことがある。子を失くした親と幼少期から思春期にかけて親兄弟を自死で失くした人の間には、その人生観に大きな違いがある。

子を失くした親には喪失するまでの人生がある。それが瞬時に断ち切られるところに親の悲嘆がある。

一方、子ども時代に身近な人の自死を経験した人にとって、人生は初めから悲しみと答えのない問いかけと自責の念に包まれている。この違いは小さくない。

どちらの悲しみが大きいか、という問題ではない。人生の受け止め方が根本から違う、ということ。

より具体的に書けば、年若い間に喪失体験をした人にとって、人生とはままたまらないものであり、自力で開いていけるといふ肯定感が非常に低い。この「人生に対する基本的な希望の欠如」と「自己肯定感の低さ」を克服するのは簡単なことではない。周囲からのサポートがしっかりあるのであれば、専門家によるケアが必要だろう。

自死ではなくても年少期に親と死別すると、その影響は子の人生全体に影響を及ぼす。このことは『親と死別した子どもたちへ』に詳しく書かれていた。

一つ、とても参考になることが書かれていた。息子を失くした父親が描いた「書くことに救いがあった」という文章。書くことには、グリーンフケアとして四つの効用がある、と彼は説いている。

1 悲しみの感情を和らげる（表出による感情の緩和、または心の解放）

2 事柄をはつきりと認識するのに役立つ（認識の明確化）

3 心に湧いた考えや感情が記録されることであとでなぞりやすくなる（想念の固定）

4 逝った者の一つ一つの思い出について言葉の碑を建てることになる（思い出の建碑）

（一部文章を改変）

表現することがグリーンフケアになることは『親と死別した子どもたちへ』（ドナ・シャーマン）でも強調されていた。

これらの効用を意識して書くことは、たとえ読者がいないとしても、セルフケアの効用を持つと言えるだろう。

もう一つ、印象に残ったことがある。それは高史明（コ・サンミョン）の文章から引用があつたこと。高史明は一九七五年に一人子を十二歳で失くしている。その息子、岡真史が書いていた詩が『ぼくは12歳』という本にまとめられ、テレビドラマになるほどベストセラーになった。

小学生の頃からこの詩集を繰り返し読んできた。『生きることの意味』（一九七五、高史明、ちくま文庫、一九八六）も読んだことがある。

『ぼくは12歳』の表紙には海の上を飛ぶ紙飛行機の横に次の言葉が掲げられている。

ひとりただくずされるのをまつだけ

苦しいとき、辛いとき、この世界からいなくなってしまうとき、いつも、この言葉を思い浮かべる。

今日は、岡真史の命日。久しぶりに本棚から『ぼくは12歳』（一九七六、14刷、一九七八）を取り出して読んでいます。

カウンセリング、初回

8/9/2021

昨日、グリーンケアを目的としたカウンセリングの一回目を受けた。カウンセラーは家の近くで、有資格者のオフィスネットを探した。グリーンケアに対応できるか、事前に問い合わせせてある。

予約をしたあとも、受けるかどうか迷っていた。カウンセリングを受けることが怖い。前に何の気なしに無料のカウンセリングを受けたとき、心の奥に手を突っ込まれたような気がして激しく動揺した。このときの記憶がよぎったけれど、思い切って予約日に訪問した。

オフィスは、駅から歩いて五分ほどのところにある、古いアパートの一室。カウンセラーが座る椅子とクライエントが二人、何とか座れるソファがあるだけの小さな部屋だった。

充実した時間だった。予定の七十分より長く、初回にもかかわらず、深い話ができる。何より、話を聴いてもらえたことがうれしかった。セッションの中で、今まで思いもつかなかった視点を提起された。これは、まさに目からウロコが落ちるような気がした。

1 死別体験の直後に子どもとして必要なケアを受けられなかったことが悲嘆を長引かせる要因になっている。自分の中の子どもをケアすることが大切。

2 姉のことを思い続けてきたおかげで、学業を修め、職業で成功し、安寧な家庭を持つことができた、と言えるのではないか。

3 例えば、姉が通った英語学校へ通ったおかげで英語ができるようになったことも、姉が通った大学の大学院へ行ったことも姉への思慕の深さを示している。

4 そうした私の半生を、姉はどこかで喜んでいないのか。同時に、姉はいつでも私を見守っているのではないか。

5 自死した少女の弟という恥として秘密にするのではなく、優秀で、立派な女性の弟であることを誇りに思っていないのではないか。そう考えるべきではないか。

いずれも、考えたこともない視点であり、心構えだった。これまでは自死遺族であることをネガティブにとらえすぎていた。

こういう心境は、頭では理解できないことではないけれど、常にそういう気持ちでいることはまだできない。

どうすれば、このような心持ちを維持できるか。今回は、その点について助言を請おうと思う。

カウンセラーのM先生はとてもいい人だった。前に無料カウンセリングで失敗したことがあるので、カウンセラーを恐れていたけど無用の心配だった。

「複雑性悲嘆」とあらかじめ伝えてあったので、チェックシートを用意しておいてくれて、その結果から会話は始まった。

話したいことがあり過ぎて、それでいてまとまりがなく、断片的になりがちな私の発言を辛抱強く聴いてくれた。

見立てや結論を押し付けられることはなかった。新しい視点はあくまでも一つの見方として提示され、「そうなれると楽になれるかもしれない」と穏やかに勧められた。

スピリチュアルな話も話題の一つとして上がった。「どこかで喜んでいる」「いつでも見守っている」という考え方も押し付けがましくはなかった。もつとも、その実感は私にはない。

思い切ってカウンセリングを受けてみてよかった。

今年の冬に読んだ『親と死別した子どもたちへ』（ドナ・シャーマン）に書かれていた、グリーフケアの最後の課題を思い出した。

究極的には、親の死と、その人生に対する影響を受け入れるために、最も大切なことのひとつは、「喪失から肯定的かつ希望に溢れた意味を紡ぎ出すことだ」と私は信じています。（カッコは引用者）（第9章中の実用的な提案十、自分の物語の意味を見つける）

新しい世界が見えてきそうな予感がする。

カウンセリング、二回目

10/10/2021

先週の日曜日、八月の初めに受けたグリーンケアを目的としたカウンセリングの二回目を受けた。

一回目の面談は、とても有益な九十分間だった。『親と死別した子どもたちへ』に始まった死別体験の再解釈は大きく前進した。前回の気づきを基にして、今回、聞きたいことを事前にカウンセラーにメールしておいた。

1 適切な「ケア」を受けられなかった「子ども」時代の自分をどう扱えばよいか

2 今の不遇（障害者と非正規雇用）の原因を過去に求める思考の癖はどうすれば改善できるか（「なんでこんなことになったのかな」と自問する癖）

3 スピリチュアルな体験に対しては期待と抵抗がある。スピリチュアルなものとの付き合い方のヒントがほしい

面談（セッションとも呼ぶ）で得た上記の問いへの回答。

1 自分の中の「子ども」の声を聴く。そして親になったつもりで「子ども」を慰める

2 故人との楽しかった思い出を努めて思い出す（アンカリング・イメージ法）。それを起点に将来に対してポジティブなイメージを持つ

3 スピリチュアルは特別なものではない。振り返れば、これまでの人生全てが故人との関わりで進んできた。すべてがスピリチュアルな体験と言える

上記の内容を詳述する。

1 姉が亡くなったとき、一緒に泣いてくれる人はいなかった。慰めてくれる人もいなかった。もっと思い切り泣きたかった。先生や仲のよい友だちには慰めてもらいたかった。

だから、もし私が「子どもだった私」を前にしたら伝えたい。

悲しいよね。泣いていいんだよ。落ち着くまで学校へも行かなくてもいいよ。

映画『君の臍臓をたべたい』を観て激しく動揺したのは、「泣きたかった子どもの私」が刺激されたからかもしれない。

2 カウンセラーのアドバイス。

亡くなったときの苦しんでいる姉ではなく、元気だったときには楽しい思い出もあるはず。それを思い出す訓練をして習慣化するとよい。そうすることで、やがて過去は明るい記憶になり、また未来の展望もポジティブなものになっていく。

楽しいことを思い出すときには親指の爪の生えぎわを押しもみする。これをスイッチにして楽しいことを想起する。これをアンカリング・イメージ法という。

楽しかったこと以外にもイメージするとよいものがある。私の回答も添えておく。

1 うれしかったこと…庭で水やりをしながら遊んだこと

2 感謝できる資質、環境…英語への道を示してくれたこと

3 感動した体験…神奈川県民ホールで一緒に観たさだまさしのフィルム・コンサート。一緒に明日香村を歩いたこと

4 人に言われてうれしかったこと…フィルム・コンサートが楽しかったと日記に書いていたこと

- 5 好きな音楽：“The Stranger”と“52nd Street”を出した頃のBilly Joel ラジオで一緒にライブを聴いたオフコースとさだまさし
- 6 好きな場所：姉が通った大学、私が通った大学院のチャペルと芝生と梅の木
- 7 癒しの場所：お墓とそのあとで眺める鎌倉の海
- 8 将来の夢：いつか姉について、エッセイを書きたい

大切なことは、思考ではなく感情を前向きにすること。思考と感情とイメージの比率は、二：五：三。感情が前向きになれば思考は自然についてくる。

3 カウンセラーは私の自己肯定感が低いことを察知して、次のように問い返してきた。

第一志望の大学に入学できたこと、大学院でも学んだこと、英語力を武器にして昇給する転職を重ねたこと、スタートアップの企業で成功したこと。この実績について、もつと自分を褒めてもいいのではないか。

夢枕に立つことばかりがスピリチュアルな体験ではない。

姉が卒業できなかった大学の大学院を修了し、姉が通った英語学校へ行き、英語力を身につけ、職業上、一度は成功を収めた。この道程は姉が伴走していたとも言えるのではないか。言葉を換えれば、これまでの人生、すべての節目で姉の存在がよい影響を与えてきた。それはもう十分にスピリチュアルな体験と言ってもいいのではないか。

この見方は新鮮だった。自分の人生が姉から影響を受けていることは感じていた。でも、それはネガティブな影響と思い込んでいた。そうではない。客観的な立場からカウンセラーは新しい見方を提示してくれた。

姉がいてくれたから、今の私がある。そのことについては、胸を張り、誇りにしている。

これまでの私と姉の関係は両義的なものだった。心理学の言葉では「囚われ」とも言われるような関係。一方では優秀な年上の女性に憧れ慕いながら、他方で、自死という「公認されない」死別体験がゆえに姉を拒絶してもいた。

この関係はいびつで矛盾している。よくない「執着」と言ってもいいかもしれない。これは放置していいものではない。記憶の再構成により愛着を安定させることが必要で、またそれは可能なことだろう。

よい思い出や、絆から得た人生の収穫を探ることが具体的な作業になる。やるべきことも明確になった。

カウンセラーはやはり聴き上手だった。私が質問を出したためにそれに答える形で面談は始まった。でも、回答が一方的に提示されるわけではなかった。カウンセラーの問いかけに対して、とりとめなく私が返す断片的な言葉をホワイトボードに書き出していく。二人でブレイン・ストーミングをしているような感じ。

カウンセラーは「気づき」を促している。色の違うペンで書いた断片的な言葉から新しい見方に気づかされる。

そんな見方もあったのか。そういうとらえ方はしたことがなかった。「気づき」が増えていく。

そんな反応が自分の中でふつふつとわきあがってくる。少し大袈裟に言えば、新しい自分になったような気さえする。

前回同様、一時間を過ぎても面談は続いた。ここまで来ればここから先は自分の心の作業だろう。作業そのものを手伝ってもらう必要まではなさそう。私はお礼を告げて面談を終わりにした。

歩いて行けるところにいいカウンセラーがいて運がよかった。もしかすると、これもまた、スピリチュアルな体験かもしれない。いずれにしろ、起きた出来事を幸運にとらえることは悪いことではない。むしろ、グリーフケアにも有益な、健康的なことだろう。

結論。迷いもあつたけれど、思い切ってカウンセリングを受けてよかった。姉に対する思いは、悲しみだけではなく、親しみや懐かしさが増すようになった。

あとは上記の項目を実践するのみ。

故人に感謝し、楽しいことを思い出す習慣を身につけ、過去を明るい色で塗り直して、前を向いて生きる。

いや、正確に言えば、後ろを向いたまま、後退りするように前に進んでいく。過去を見つめながら現在を生き、未来へ進む。森有正の言う「過去相に生きる」とはきつとそういうことだろう。

その習慣が身についたら、いつか、笑顔で再会できるかもしれない。

餃子の思い出

10/30/2021

昨夜は久しぶりに餃子を作った。

最近買ったワイヤレスイヤホンをつけてきたまきしの古い歌を聴きながら作った。

これは私だけのセルフ・グリーフケア。

亡くなった人と一緒にしたことを一人になってもしてみる

姉が亡くなる前の晩、母と三人で餃子を作った。そのときはとても元気そうだった。

心から悲しいと思えることが幸せ。

悲しくて、懐かしくて、幸せな不思議なひととき。

珍しく家族四人揃って夕食を食べた。

餃子を作るとき、私がどんな気持ちでいるか、家族の誰も知らない。

私だけの密かな、大切なひととき。

君は月夜に光り輝く、佐野徹夜原作、月川翔脚本・監督、北村匠海、永野芽郁主演、東宝、二〇

一九

10/31/2021

映像がきれいな作品、ということが第一印象。次に思ったことはこのストーリーは月川監督のオリジナルではないか、ということ。原作があつたことはエンドロールで知った。

月川翔が書いた作品と感じたのは多くの点で『君の隣臓をたべたい』（『キミスイ』）に呼応していたから。似ているということではない。「不治の病」という設定こそ似ていても、二つの作品はむしろ真逆。真逆でありながらも『キミスイ』のメッセージをさらに敷衍しているようにも感じた。

『キミスイ』と反対になっている点。

二人は想いを打ち明けあっている

二人は互いを名前で呼び合っている

出会いから別れまでの時間がずっと長い

ヒロインは短いながらも「生」を全うした

死への恐怖を露わにしている（山内桜良はそれを隠そうとしている）

亡くなる場面がない（「消えた」という言葉が使われている）

葬儀が意味あるものとして描かれ、主人公も出席している

大人が物語に関わっている

親からみた子の死（悲しみや恐れ）が描かれている

死者との関わりが日記や手紙の文字だけではなく、録音された声で直接的で生々しい

設定のなかにすでに亡くなっている二人の死が組み込まれている

主人公（卓也）の方から積極的に「生きて」というメッセージが発せられている

主人公（卓也）は大切な人を失くす悲しみ（悲嘆）を知っている

最後の点については、北村匠海演じる卓也は自死遺族であることが示唆されていることも記しておきたい。子を失った親の悲しみがかなり赤裸々に描かれている。また、子をこれから失うとわかっている親の恐れも描かれている。

卓也の姉の死はなぜか鮮烈に描写されている。この場面を見たときには正直「観なければよかった」と思った。

本作は『キミスイ』でエピソードで明らかになる「生きて」というメッセージを明確に物語の中心に据えている。この点で『キミスイ』の続編のようにも思えたし、『キミスイ』を補完する作品にも感じられた。

卓也は死別の悲しみをよく知っていた。だからこそ、まみずに生きてほしいと求めて、彼女の願いを聞き入れた。そして、まみずは卓也の真意を受け止めて「生きたい」と望むようになり、短いながらその「生」を全うした。この点は突然で衝撃的な別れと悔恨で終わってしまった春樹と桜良の関係と大きく違う。

『キミスイ』では悲嘆の回復が予感されたところで物語は終わっていた。一方、本作では、互いの気持ちも確かめ、まみずが「生」を全うしたから、卓也は悲嘆からスムーズに回復することができた。エピソードがそれをよく示している。

月川監督は、『キミスイ』で何か描ききれなかったものがあると考えていたのではないか。だからこの作品を撮ったのではないか。勝手にそんな想像をしている。

二つの作品はストーリーの起伏も違う。『キミスイ』は衝撃的な展開のある、言ってみれば「どんでん返し」の物語。対して本作は同じメッセージが繰り返されながら、じわじわと盛り上がっていき、クライマックスがあり、穏やかなエピソードがある。悲しい話ではあるけど衝撃や

悔恨はない。言わば王道の恋愛物語。二時間に満たない作品なのに中身はかなり濃い。生前の姉の姿や友人の兄とのエピソードなどは、撮影はしたもののカットされたらしい。そういう場面を加えて、もう少し長くてもよかったように思う。

繰り返す。本作は『キミスイ』で提示された「生きて」という希望のメッセージをさらに強く伝えている。言葉を換えれば、本作は、月川監督の「死生観」を極上のエンターテインメントに包んで提示している。

そのメッセージを私なりにまとめれば、次のようになる。

たとえ余命がゼロと宣告されても、たとえ大切な人を失くしても、人は生き続けなければならない。

人は、大切な人を失っても、苦しみや悲しみだけでなく、希望を持つて生き続けることができる。

遺される者も、遺された者も、離れていく者も、立ち去った者も、それを望んでいる。

時間としては短くても、人は幸福に生きることが出来る。

死者は生者の心のなかで生き続ける。

この文章を書くにあたり、以下の本を参考にした。この二冊を図書館で借りてきて、読んでいるあいだに、この作品を観る機会があった。それぞれの本から印象に残った文章を転記しておく。一冊めは、『対論人は死んではならない』（小松美彦、春秋社、二〇〇二）。

人は無人称の一般的な人間として死ぬのではありません。死んではならないと言ったときに、死んではならないのはいつも名前を持つた具体的な誰かなんです。（「プロローグ人は死んではならない」）

もう一冊は、『死と向き合って生きる・キリスト教と死生学』（平山正実、教文館、二〇一四）

限界状況における生の抛り所とは何か、それは最後まで新しい物語を紡ぎ出すことである。人が病や死に襲われ、過去の人生を展開できず行き詰まったとき、新たな物語を編み上げることができるとかが重要である。（「附論 キリスト教と死生学 未完の完」）

これまで書いたことは、これら二冊の感想でもある。不思議な巡り合わせを感じる。

第七部 梅の残り香

人はいさ心も知らずふるさとは
花ぞ昔の香にほひける

——紀貫之

寒梅忌

2/6/2022

二月六日は姉、敦子の命日。またこの日が巡ってきた。亡くなって四十一年が経った。

今年は、これまでとは少し違う気持ちでこの日を迎えている。

なぜ、ということはまだ考えない。正確に言えば、ほとんど、だけど。

健在なら還暦が近づいている。どんなおばさんになっていたのだろうか。

最後のお別れをしなかったので、どこかで元気に暮らしているような気がする。そういう夢を見る夜もある。

どこかの街で偶然出会ったら、どんな言葉をかけるだろう。この四十一年間の出来事をどんな風に伝えるだろう。

そして、この四十一年間、どこで何をしてきたか、どんな風に尋ねるだろう。

そんなことを想像しながら、今年も過ぎている。

敦香祭

2/28/2022

十九歳になる直前に亡くなった姉、敦子の六十歳、還暦の誕生日。亡くなった日に悲しむよりも、生まれた日を祝いたい。そう思い、今日は姉の好きだった音楽を聴きながら過ごした。

Shining Sky, TINA (全日空ミュージックスカイホリデー・オープニング曲)

道化師のソネット、さだまさし

愛の唄、オフコース

時、小椋佳

The Stranger, Billy Joel

Melody Fair, The Bee Gees

七〇年代から八〇年代へ移り変わっていく、なつかしい「あの頃」が目の前によみがえる。大好きだった十八歳の「お姉ちゃん」と十二歳の「ぼく」がいる。

凍りついた香り（一九九八）、小川洋子、幻冬舎文庫、二〇〇一

2/13/2022

毎年二月は自死について考える月。自死をテーマにした専門書を集中して読んだ年もある。今年も、自死を主題にした小説を読んでみた。

自死が扱われる小説は珍しくない。『こころ』（夏目漱石）のように登場人物が結末で自死するもの。『ノルウェイの森』（村上春樹）のように、物語の途中で登場人物が自死するもの。『海うそ』（梨木香歩）のように物語の最後に突然自死が登場するもの、さらには『満願』（太宰治）や『若きウエルテルの悩み』（ゲーテ）のように書き手が自死する作品もある。

意外に少ないのが身近で大切な人を自死で失った「自死遺族」の心境を描いた作品。私が読んだ小説のなかでは『谷間の女たち』（森山啓）しかない。もつとも、私は多読ではないので、私が知らないだけで、ほかにもあるのかもしれない。

『草の花』（福永武彦）は自死遺族の文学だろうか。読みようによつてはそう捉えることもできる。意見が分かれるところだろう。危険な手術に挑んだ汐見の死は自死と言えるかもしれない。しかし「私」は遺族と呼べるほど汐見と近いわけではない。そういう理由で私は『草の花』は自死遺族の文学には分類しない。

本作は、どこかで自死を主題にした作品と見聞きしたので、読んでみることにした。そう、私は自死遺族の文学を探している。

前置きが長くなった。自死遺族の文学であることを期待して本作を読んだ。結論から先に書けば、期待通りではなかった。

自死遺族へのサポートを扱った本を読めば、自死遺族は、深い悲しみだけでなく、強い自責の念や、激しい怒りさえ持つことがわかる。本作において、主人公の心情はそのような複雑なものとして描かれていない。あえて言えば複雑な感情すら持てない、現実を受け入れられない初期反応のような状態にある。

その意味ではこの作品は自死遺族の文学の入口にとどまっている。疑問も悲しみも怒りもここから始まる。死者との対話が生まれるまでにまだまだ長い道のりが必要だろう。

安易に死を受け入れたり、悲しみを乗り越えてしまわないところはよいところと言える。でも、自死遺族が本作を読んで自分たちの心情を

よく描写していると感じるか、私には疑問が残る。主人公は淡々と謎を追いかけていくだけで、戸惑いや怒りなどが感じられないから。何か物足りなさが残る。

こんな風を書くことは、医者が医療ドラマに「ホントの手術室はこんなものじゃない」とケチをつけたり、科学者がSF漫画に知識の不足や矛盾を指摘するようなことと同じだろうか。きつとそうだろう。自分が自死遺族だからといって、小説のなかの自死について文句を言う資格はない。作品の中の自死を客観的に評価することが私にはできない。問題は私の方にある。

もとより芸術に制約はない。どう書こうと作者の自由であり、自死を肯定する作品でさえ、書くことを止めることはできない。もちろん、そういう作品を嫌う自由も読み手にはある。

私が書いてきたことも、一人の読者の勝手な感想であり、書評や批評とは呼べない類いのものだろう。

自死遺族の文学について

2/14/2022

『凍りついた香り』（小川洋子）の読後に何か物足りなさを感じて、あらためて自死を主題にした小説、とりわけ遺された者、自死遺族が主題の小説を探してみた。

ネットで探してはみたものの、主人公が自死する作品は数え切れないほどある一方、自死遺族が主人公の作品はあまり見つからない。そういう点では、物足りなさはあるにしても、自死遺族の心情を作品の中心に据えたという意味では『凍りついた香り』は稀有な作品かもしれない。数多く見つけられるのは、現実に身近な人を自死で失った人が書いたエッセイ。そういう作品はたくさんある。自死した、とくに若い人の遺稿集も数多く出版されていて、それぞれの時代でベストセラーにもなっている。『青春の墓標』（奥浩平）、『二十歳の原点』（高野悦子）、『ぼくは12歳』（岡真史）は私も持っている。

自死遺族の文学として私が高く評価している『谷間の女たち』（森山啓）も自伝的小説なので、エッセイに近く、完全なフィクションではない。もう一つ、優れた作品と思っている『死者と生者のラスト・サパー』（山形孝夫）は完全に自伝的エッセイ。

日本では自死の件数が多く、社会問題にもなっているので、自死遺族に取材したノンフィクションや、防止施策や自死遺族の支援に関する専門書は無数に出版されている。

でも、自死遺族が主人公の小説は少ない。

自死遺族というテーマは小説の題材になりにくいのだろうか。その悲しみは虚構を通じて語ることでできないものなのだろうか。

「自殺」か「自死」か

8/21/2022

「自死」という言葉が一般的になってきたと思つていところ、「自殺」という言葉が正しい意味を含んでいると考える人がまだいるらしい。「自」は「みずから」という意味だから次に来る言葉は他動詞であるべきという論理。理解に苦しむ。

「自」は「おのずから」とも読む。「自ずから死ぬ」で意味は通るのではないか。

「自殺」が忌避されている背景には「殺」には罪が含まれていることがある。自死者は死に追い詰められた人であり、殺人者ではない。まして罪人ではない。

「死に追い詰められた」とは、言葉を換えれば、自己崩壊した、すなわち、自ずから崩れていったということであり、合理的な判断により死を「選択」したわけではない。

遺族は「自らを殺した者の遺族」と名乗りたくはない。

こうした内容でツイートしたけれども、ほとんど反応がなかった。一方、「自死」という言葉に違和感を持つと主張するツイートに多くの「いいね!」がついている。

問題は字義ではなく、言葉に込められた意図。字義について議論するつもりはない。

自死遺族の思いは、社会全体のなかでみれば、まだまだ理解されてはおらず、少数派ということの証左なのかもしれない。もともと私のツイートはふだんから基本的に閲覧数が少ない。

公認されない死

12/17/2022

今週月曜日のNHKテレビ『クローズアップ現代』。東日本大震災で母親を失くしたことを誰にも話さなっていたという若い人がインタビューを受けていた。

映画『すずめの戸締まり』を見て、友人に話すことを決めたという。そして、友人は温かくその秘密を受け入れてくれたと答えていた。秘密を抱えて生きることは、さぞかし辛かっただろう。

これこそ「公認されない死」と呼ばれる喪失体験。

テレビで答えていた人と私とでは年齢も境遇も違う。

「公認されない死」を絶対に人に打ち明けない、秘密にすることを私は選んだ。

ここ、すなわち『庭』以外では、つまりリアルな世界ではもう誰にも話さないと決めた。

話さないでいても信頼関係は築ける。むしろ、五十歳を過ぎて思春期の出来事を告白することが信頼関係を深めるきっかけになるとは思えない。

仕方がないとは思わない。これでいい。私は秘密を大切に生きていきたい。

語り継ぐとらじんと

1/24/2023

先週、阪神大震災の被災者を追悼するニュースを見た。

被災者が、亡くなった人や災害の記憶を次の世代へつなぎたいと語りたいと話していた。

私はどうか。

私に姉がいたことは子どもたちも知っている。

でも、子どもたちに、叔母さんにあたる人について何も伝えられないでいる。

その人がどんな人で、どんな風に生きて、どんな風に苦しんで、どんな風に亡くなったか。

伝えたい、という気持ちと、秘密にしておきたい、という気持ち。両方ある。

話さない、と決めたこともある。それでも、こんなニュースを見ると迷いは始める。

もう四十年も過ぎていくのに。どうすればいいのか、心が定まらない。

死者を巡る「想い」の歴史、山本幸司、岩波書店、二〇二二

2/5/2023

去年発行されてすぐ読みたいと思った本。ようやく図書館で順番が回ってきた。

前に読んだ『日本人の死生観を読む』（島園進）が総論、本書はそれの各論にあたる印象。古代から中世にかけての和歌や物語に日本人の死生観を探る。死生観の変遷という点では、『死者はどこへ行くのか』（佐藤弘夫、岩田書院、二〇〇七）にも関連している。

本書を読んで最初に思ったことは、和歌という表現方法が日本においてグリーフケアの大きな柱になっていったこと。天皇から読み人知らずまで、多くの挽歌が詠まれている。亡くした人を弔い、悲しみを嘆くその歌意は、現代に暮らす私にもしみじみと伝わってくる。

悲しみを表現することがグリーフケアに寄与することは、現代の専門書にも書かれている。

和歌のような表現方法を人々が盛んに行ってきたことは、儀式や制度、風習だけでは死別の悲しみは癒されないことを示している。葬儀や墓参だけでは悲しみは癒えない。だから、人々は悲しみを歌に込めた。そう考えられないだろうか。

もう一つ、これもまた古代から現代まで変わらない。生者は、死者との交流を願っている。その願いもまた多くの和歌に表現されている。千年以上も前に紡がれた言葉が現代に生きる私に通じてくることに不思議な感動がある。

解釈とともに引用されている多数の和歌は、悲嘆とともに生きる私の琴線に触れるものが少なくない。

悲しみに浸りたいときに読み返したいので、本書は購入した。

寒梅忌

2/6/2023

七歳上の大好きだった姉、敦子が亡くなって四十二年が経った。

彼女と過ごした時間は十二年。背伸びをして彼女と親しく会話をするようになったのは小学五年生ごろだから、実質的には二年ほど。短い時間だったけれど、その後の私の人生に与えた影響は小さくない。私はずっと姉の影を追いかけて生きてきた。

大切な人を失うと時間が止まる。

姉が亡くなったとき、私は十二歳だった。だから、今でも私の中には「十二歳の私」がいる。十二歳より上の女性は皆、年上に見える。子であるはずの二十五歳の娘も、ときどき年上に感じてしまう。

今日は姉の好きだった音楽を聴いて悲しみに浸っている。心から悲しめるひとときは、私にとって幸福な時間でもある。

夜、秘蔵のウイスキーで献杯した。

自殺の思想史——抗って生きるために (Stay: A History of Suicide and the

Philosophies Against It, Jennifer Michael Hecht, 2013) / 沢李歌子訳、みずぶ書房、11

OIII

2/26/2023

二月は自死について考える月。姉が自死で亡くなった月だから。毎年二月は自殺もしくは自死に関する本を読むことが多い（以降、本書が取り上げている過去の事例を自殺、主に心の病を原因とする現代の事例を自死と書き分ける）。

本書は、自死を防止する哲学的根拠を求めて、自殺が許容、称賛された神話時代から自殺に関する見地をたどる。ギリシア神話や旧約聖書までさかのぼる自殺の歴史はとても長い。

自殺の思想史をたどる前半部で、私がとくに興味深く読んだのは、キリスト教の自殺観の移り変わり（第一章、第二章）。

初期にはイエスの死も自殺とみなされて、殉教は称賛される行為だった。少しずつ見方が変わり、「殺してはならない」という「十戒」の一つと重ねられ自殺は大罪とみなされるようになった。アウグスティヌスとアクウイナスの影響が大きいらしい。

宗教的に「禁止」や「大罪」とみなしてみても、自死を防止することには必ずしも役立つことはないと著者は指摘している。その点に私も同意する。

名誉のための自殺、責任を取るための自殺は日本にもある。現代でも、そのような行為をよしとする傾向さえある。しかし、現代において圧倒的に多いのは、心を深く病んだ末に視野狭窄に陥って自ら死を選んでしまうという悲劇だろう。著者はそうした苦しい心境にある人たちが読者として念頭に置いている。

本書は、神学者や哲学者の言葉の引用も多く、読みやすく書かれているとは言えないかもしれない。けれども、自らも自死遺族の一人でもある著者のメッセージは明快。

ある章のまとめで、著者は本書に一貫する意図をはつきりと書いている。

本章から学べることはふたつある。ひとつは、わたしたちにはみずから命を絶たない責任があること。もうひとつは、わたしたちは、他者に、そしてわたしたち自身に感謝され、大事にされているということだ。(第九章 苦しみと幸せ)

その根拠も明確に示されている。

自分がほかの人たちにとってどんな意味があるかは誰にもわからないし、未来の自分がどんな経験をするかを知っている人もいない。(おわりに)

正直なところ、一読したあとで、これらの言葉を飲み込むことができなかつた。私自身がまだうつ病から脱出できておらず、自己肯定感も低いからだろう。それでも、希死念慮からは卒業できたこと最近実感している。

本書は苦境にあり、人生にまつたく未来がないと思っている人に読んでもらいたい。著者もそう願っている。本書には自死を思いとどまらせようとする熱い激励の言葉があふれている。私自身もおおいに励まされた。

しかし、希望を失くし、自信を失っているとき、すなわち、絶望的な心境で自己肯定感が低いときに、本書を読んでも著者のメッセージは心の底まで届かないかもしれない。辛いときには本を開くことさえ苦痛で、苦しみを吐露することもできないことを私はよく知っている。

自分の存在が何かの役に立っているということを感じることがとてもむずかしい。ましてや、世の中から見捨てられたように感じる状況に置かれてはなおさら。だから、ふだんから「私たちは生きる責任がある」「私たちは互いに感謝し、大事にしあっている」という考え方を身につけておく必要がある。自死の防止にはふだんから「自分の命を大切にする」教育活動、啓蒙活動の必要性を感じる。

だから本書は、自死を思いもつかないような元気な人にも読んでもらいたい。いつ何時、本書が授ける知恵が役にたつとも限らない。

心の病で死に近づいている人をどうしたら立ち止まらせることができるだろうか。ささいなことでもいい、簡単なことから始めてみるのがいい、と著者は書いている。

ゴールデンゲートブリッジに柵を設けるだけでも、自死を試みる人数を減らすことができたという。駅のホームにある照明を気持ちを落ち着かせる青白色に変えるだけでも効果があると聞いたことがある。

私にできることは何だろうか。親しくありたいと思っている人々にその気持ちを素直に伝えることではないだろうか。彼らが万一、絶望の淵に立ってしまったときにでも思い出してもらえるように。

自死に関する本には二種類ある。防止策 (prevention) と遺族のケア (post-vention)。本書は基本的には前者にあたる。それでも本書を読みながら自死遺族に対するグリーフケアにもなっているような心持ちにもなった。

どういうことか。

姉の自死を止めることはできなかっただろうか。やはり、とくに二月にはそのような答えの出ない問いを繰り返してしまう。本書のような本を手にしていたら、結果は違っていたのかもしれない。

本書によれば、自死未遂者の多くは再度試みることはなく、むしろ自分の行為を反省して残りの人生を生きる。姉も、あの日を持ち切っていたら、未遂を後悔して残りの人生を何とか生きていたことだろう。そう思わせてくれる一冊だった。

姉が生きていたら彼女の人生は、そして私の人生はどうなっていただろうか。それを想像することは悲しいことではない。

敦香祭

2/28/2023

一九八一年二月六日に十八歳で亡くなった姉の生誕日。存命なら六十一歳。

敦香祭と名づけてから五年目になる。

姉の命日と誕生日があるので、これまで、二月になると気分が不安定になっていた。今年は命日も誕生日も穏やかな気持ちで迎えている。

今年は気分が変調することはなかった。

何が変わったのか、まだうまく説明できない。二年前に受けたカウンセリングをきつかけにして死別体験の受け止め方が変わったことはつきり言える。

不安定でもなく、最近は無気力でもない。かといって元気いっぱいというわけでもない。何が変わったのか、自分でもよくわかっていないので、新しい気持ちで生きはじめた、と宣言できるような状態でもない。

読みたい本もあるし、読むと決めた本もあるのに読書は進んでいない。夜九時を過ぎると眠くなり、十時には寝てしまい、朝までしつかり眠っている。

森有正のいう「変貌」、あるいは島崎藤村のいう「新生」とは、こんな風に事後的なものかもしれない。自分が変わった。新しい自分になった。それは、「変貌」や「新生」が起きたあとで、その変化を理解すること、言語化できることも変化のずっとあとになってからなのかもしれない。

少しずつ変わっている私の内面について言葉で説明できるようになるまでには、まだ時間がかかりそう。

彼女の好きだったオフコースとさだまさしを聴きながらお気に入りのジンで乾杯。

悲しみのなかで、生まれてきたこと、私の姉であったことに感謝しながら生誕日を祝った。

あとがき

二十年かけて書きためてきた文章を読み返しながら考えたことがある。それは二〇〇二年まで、私は、自分が自死遺族であることを真剣に考えてこなかったということ。もちろん、姉のことを忘れた日はない。しかし、それは追慕の感情であって、自分の人生にとって、自死遺族であるということが何を意味しているのか、客観的・論理的に、いや主観的・感情的にも、真剣に考え抜いたことはなかった。

「自死遺族であるということ」。それは一つの属性に過ぎない。それだけでは行動にも表現にもならない。本書で取り上げた吉田満も次のように述べている。

体験は、だが結局それだけのものではない。一つの体験が真に血肉となるには、さらにそれが他の体験によって超えられることを要する。（「死と信仰」『吉田満著作集下』）

本書を書き上げたことは「自死遺族」になつたという一つの体験を、私なりに鍛えた「他の体験」であり、言葉を換えれば、行動と表現の試み（エッセイ）とすることができると言える。この試みが「真の血肉」となるかどうかは、これから先の「日常」が明らかにするだろう。

二〇二三年四月二十五日

碧岡烏兎

自死遺族であるといふこと

著者 碧岡烏兔

編集 碧岡烏兔

校正・校閲 碧岡烏兔

表紙デザイン 碧岡烏兔

執筆ツール mi

編集ツール Pages

表紙作成ツール Canva

執筆機材 iMac 24インチ、2022モデル

表紙写真 碧岡烏兔（ブリュッセル、テルビュールン公演）

表紙フォント 筑紫明朝H

表紙文字色 #061B42 (6:27:66)

見出しフォント ヒラギノ角ゴ ProN

目次フォント ヒラギノ角ゴ ProN

本文フォント ヒラギノ明朝 ProN

PDF版 初版発行 二〇二三年五月九日

©MIDORIOKA, Uto, 2023. Created in Japan.